

そこへ行く男

竹村直久

第一章

1

「相沢さん、お早うございませう」
ボンヤリと目を開くと、薄いグリーンシャツを着た男が、上から真次郎の顔を覗き込んでいる。

真次郎には今その男から相沢さんと呼ばれ、眠りから起こされた自分が誰なのか解らない。自分が今いるところが何処なのかも解らない。

男は掛け布団を剥がすと、横向きに寝ている真次郎の腰に手を掛け「オムツを替えますからね、寝間着を降ろしますよ」と言いながらパジャマのズボンを降ろそうとする。だが真次郎の身体は横になっているので、上になっている左側の尻半分だけが腿の辺りまでズリ下げられ、オムツをした尻の左半分が露わになる。

男は上になっている真次郎の左の肩と膝に手を掛け、力を入れてグリーンと仰向けにする。すると曲がったまま拘縮している右膝が立った格好になる。

シャツの男は真次郎の左足の膝も立て、両膝を揃えようとする。だが骨の浮き出た股間や膝は固まっており、なかなか思う様に揃えられない。力を入れて足を曲げ、やっと両膝を立てた状態にする。

真次郎は訳も解らないまま、されるがままになっている。シャツの男が身体をつかむ感触だけは伝わっている。

そのまま身体を反対側に倒すと、今度は右側が上になる。尻の左半分だけ下がっていたパジャマのズボンの右側を下げると、オムツをした尻全体が丸出しになる。そのままもう一度仰向けに倒し、腿の辺りまで下がっているズボンを揃え、立っている膝を乗り越えさせる。そして足首までズリ下げてしまう。陰部を覆っている紙製のオムツが露わになる。

「はい、オムツを替えて綺麗にしますからね」

と言いながら慣れた手つきで腰の両側からバリバリとマジックテープを剥がし、オムツを開いていく。

「あ、今日はいいウンチが出てますね」

股の下から排泄物の付着した紙パットを引き出し、丸めてポリバケツの中へ放り込む。そして湿り気のある布で陰部を拭き取る。それからヒリヒリする薬を浸した布を擦り付けると、新しいパットを当て、またオムツを締め直していく。

その間真次郎は虚ろな目を天井に向け、何を見るでもなくぼくつととしている。

自分はベッドに寝かされ、若い男にオムツを替えて貰っている：そのくらいのことまでは頭の何処かで理解している。でもその他のことは解らない。そもそも真次郎は何も考えていない。既に考えるという概念もない。

シャツの男は作業を終えると元通りに真次郎を寝かせ、布団を掛けると部屋を出て行く。

暫くするとまた別の男が入って来る。その男もやはりグリーンのシャツを着ている。

「相沢さん、朝ご飯食べに行きましょうか。さあ起きますよ」

と言ってまた布団を剥がす。真次郎の背中に手を回し、痩せ細った両足の下に手を入れる。そしてグイと力を入れて上半身を起こすと同時に両足を回し、ベッドの縁に足を降ろす。

真次郎はベッドの縁に座った格好になる。男はぶら下がった真次郎の足にサンダルを履かせる。

「さあ相沢さん。頑張って立ちましょう」と促すと、真次郎の左手を持ち、ベッドの脇に置いた車椅子の肘に捕まらせる。そして弾みをつけて左足だけで立ち上がらせると、そのまま身体を半転させ、ドシンと車椅子に座らせる。

車椅子の前部にあるペダルを水平に倒し、真次郎の両足を乗せる。シャツの男は車椅子の取っ手を握ると向きを変えてドアへ向かい、

そのまま押して部屋を出る。

車椅子は押されて廊下を進む。真次郎はボンヤリと前方を見ている。すると走る自動車に乗っている様な気分になってくる。

真次郎は運転席でハンドルを握っている。左手をハンドルを握る形にして、車椅子が角を曲がるとグルグルと見えないハンドルを回す。

本当は両手でハンドルを握りたいのだが、右腕は麻痺しており、膝の上に放り出されたまま動かすことが出来ない。

そんな真次郎のことを、シャツの男は気にも止めずに車椅子を押しに行く。

車椅子は進み、広いフロアーへと連れて来られる。そこに並んでいるテーブルには、トレイに乗ったたくさんの食事が並べられており、それぞれに名前の書かれた立札が置かれている。その中から「相沢真次郎様」と書かれた札のある席に車椅子が着く。

「はい、じゃ相沢さん、前掛けしますからね」

と言って男は真次郎の首にエプロンを付ける。そして車椅子の隣に椅子を置いて座る。

「それじゃお茶から飲みましょうか」

と言って真次郎の口元にマグカップを持ってくる。

カップの縁が唇に着くと、反射的に口が開き、口の中に入ってくる生温かい液体を喉が勝手にゴクゴクと飲み込んでいく。だが口も右半分は麻痺して動かないので、右端からダラダラと漏れてしまう。

男はティッシュを使い、慣れた手つきで真次郎の口元を拭うとスプーンを取る。

「最初にご飯を食べますよ」

男がスプーンに白米を乗せ、真次郎の唇に当てると、また口は自動的に開き、入ってきたご飯をモグモグと食べる。だがやはり口の右端から半分くらいこぼれてしまう。

見ると他のテーブルでも車椅子に乗った老人たちが、同じグリーンシャツを着た男や、同じデザインだが薄いピンクのシャツを着

た女にご飯やオカズを食べさせて貰っている。

シャツの男はほぐした魚の白身と白米とを交互にスプーンに乗せ、真次郎の口に入れていく。

真次郎にも食べている物の味は解る。だがそれが何なのかは解らない。ただ口に入れてきた物に対して反射的に反応し、自動的にアゴが動いてモグモグと咀嚼する。

シャツの男は食べる合間にお椀を取って味噌汁も飲ませてくれる。そしてあらかた食べてしまうと「もうご馳走様でいいですか？」と問い掛ける。真次郎は黙っているが、男は構わずに「じゃ相沢さん。お菓を飲みますからね」と言って真次郎の頬を親指と人差し指で挟み、縦に開けさせる。もう片方の手で口の中に錠剤を入れ、吸飲みの尖った口を咥えさせ、水を流し込む。

ゴク……ゴクツ……水と一緒に錠剤を飲んでしまう。何を飲んだのかは解らない。ちゃんと口の中から錠剤が無くなっているか、男は真次郎の口を開けて確認する。

「はい、じゃ洗面所に行って歯を磨きましょう」と言って車椅子を引くとテーブルを離れ、そのまま洗面所へと連れて行く。

洗面台の前に車椅子を止めると、シャツの男は手に薄いビニールの手袋を付け「はいお口を開けて下さい」と言い、口の中へ手を入れてくる。上アゴから入れ歯を外す。それから口に歯ブラシを入れると、半分くらい残っている下の歯をゴシゴシと磨く。

それが終わるとまた入れ歯をはめられ、車椅子を押されて元の部屋へと連れて来られる。そして車椅子に乗り移った時とは逆の手順で、またベッドに寝かされる。

シャツの男は真次郎に毛布をかけると「はい、では相沢さん、暫く休んで下さいね」と言って部屋を出て行く。

それからどれくらい時間が経つたろうか、目を開くと天井が見える。いや目に天井が映っているというだけで、真次郎にはそれが天井だと認識出来ている訳ではない。

「相沢さん。お風呂の順番がきましたので、お連れしますね」

と言ってまた現れたシャツの男は、真次郎の身体を起こして車椅子に乗せる。

車椅子を押されて浴室へと向かう。真次郎の意識はまたハンドルを握り、車を運転している。

角を曲がると窓に面した長い廊下がある。ハンドルを握りながら窓ガラスの外を景色が流れていくのを見る。それは真次郎の中で車を走るトラックのフロントガラスになる。

真次郎はハンドルを握り、運転している。エンジンの振動が身体に伝わってくる。それは何処か遠くまで運ぶ大切な荷物を積んだトラックである。何処へ行くのかは解らない、何を運んでいるのかも解らない。でも真次郎はトラックを運転している。それはいつしか海辺の道路になり、少し開いた窓から吹き込んでくる潮風さえも感じられる。

そのまま車椅子は温かい部屋へと入り、決められた位置に着くとシャツシャツと音を立てて四方がカーテンに仕切られる「それじゃ寝間着を脱ぐお手伝いをしますからね」と言ってシャツの男はパジャマを脱がせにかかる。

真次郎は自分の左手と左足は動かすことが出来るが、右手と右足は麻痺しており、自分ではピクリとも動かすことが出来ない。だがシャツの男が持つて力を入れると右腕も右足も関節が曲がる。

男は手際良く袖を抜き取り、真次郎からパジャマも肌着のシャツも脱がせてしまう。アバラ骨に薄い皮が張っているだけの上半身が露わになる。

シャツの男は「さあ相沢さん、前の手すりに捕まって立ちますよ」と言って真次郎の背中に手を回し、前に押して前傾の姿勢を取らせる。真次郎の左腕を伸ばして手すりを握らせ、左足だけで立つことを促す。

「はいじゃ立ちますよ」と尻を持ち上げられ、真次郎はヨロヨロと立ち上がる。

「はい、そのまましつかりお立ちになって下さいよ」

と男は念を押してから。パジャマのズボンをズリ降ろし、バリバリとオムツも外す。真次郎が全裸になると後から車椅子と入れ換わりに入浴用の特殊な椅子があてがわれ、真次郎を座らせる。

男は防水用のエプロンを着けると「それじゃ行きましょう」と言っ
ってガチャガチャと音を立てるその椅子を押して浴室に入る。

男は真次郎の身体にシャワーで湯をかける「それじゃ髪の毛にか
けますからね、目を瞑って下さいね」と言われると、真次郎は眼
を瞑る。頭の上からジャバジャバと湯がかけられていく。

男は細長い網目のタオルに洗剤を付けて泡を立てると、真次郎の
身体をゴシゴシと洗っていく。

痩せ細った自分の腕を、足を、干乾びた胴体を洗われているのを、
真次郎はまるで他人事のようにボンヤリ眺めている。

「はい、それじゃシャワーで流していきますね」と言っ
て身体についた泡を流していく。

全身を洗い流すと、男は椅子を押してシャワーの前を離れる。向
きを変えると前方に大きなボックス状の機械がある。

「それじゃ湯船に入りますよ」

男に押された椅子はそのまま機械の中へと進み、ガシャンと音を
立ててドッキングする。ドア状になっている後方の枠を閉めると、
それは密閉された湯船になる。

「はい、じゃお湯いれますからね」と言っ
て男がスイッチを入れる。下から温かい湯が湧き上がってき
て、みるみる真次郎の身体を浸していく。

「はい、じゃ相沢さん、ゆっくり温まりましょ
うね、今泡を出しますからね」と言っ
てシャツの男がまた別のスイッチを入れる。するとボバババ
と前からジェットの水が噴き出して、痩せた身体が包
み込まれていく。そのまま自分が後へ流されてしま
いそんな感覚になる。

その瞬間、真次郎の目に濁流が広がってくる。真次郎は流れる川

から引き出される。元の脱衣所に戻って身体を拭かれる。そしてまた片手で手すりにつかまって立つことを促され、普通の車椅子へと乗り移る。そして下着と寝間着を着せられて、外の廊下へと押して行かれる。

「それじゃ相沢さん。髪の毛をドライヤーで乾かしますからね」

浴室を出て、フロアーの脇にあるスペースへ連れてこられると、そこに待っていたピンクのシャツの女が真次郎の髪の毛にドライヤーを当て始める。

ブオーと音を立て、温かい風が当てられると、真次郎の目には、細かいオガクズが粉雪の様に舞い散っていくのが見える。そして目の前には大きな作業場の様な光景が広がっている。真次郎は作業服を着て、機械を操作している。

周りにも作業服を着た男たちがいて、それぞれに自分の担当する機械の前で作業している。

長い木の板を機械にセットして、押していく。板はブイーンという音と共に機械に飲み込まれていき、横の吹き出し口から中空に木の粉を噴き上げていく。

押された板は機械の反対側から表面がスルスベスベになって出てくる。それをもう一人の作業服を着た男が受け取り、持ち上げると脇に運んで行く。

一本の板が出来上がると、脇に積まれた板の山から次の板を取り、位置を確かめてまた削り機に掛ける。

ブイーン……真次郎は熟練した手付きで板を削る作業を繰り返しながら「これでいい……これでいいんだ」と呟いている。

何が「これでいい」のかは解らない。何故自分がその言葉を呟いているのかも、自分が何処にいるのかも解らない。

前に座っている制服の男が真次郎に向かって「おい、一五七番、ブツブツ言うのやめろ！」と怒鳴る。真次郎は「す、すみ……ませ、ん……」と謝る。

「どうしました相沢さん？ 何も謝ることなんかありませんよ」

見るとピンクのシャツの女がドライヤーをかけながら、真次郎の顔を覗きこんでいる。

「大丈夫ですよ。もう少しで終わりますからね」

「……」

髪を乾かし終わると、車椅子を押され、再び広いフロアーへと連れて来られる。

気が付くと、自分の口の右端からヨダレが垂れ下がっている。黙っていても口の右側が垂れ下がってしまうので、ヨダレが垂れる。

だがそれを恥ずかしいとも思っていない。

ヨダレを拭ってくれる人もなく、そのままただ座っている。そうして宙を見つめていると、何処からかキュルキュルと車輪の回る音が響いてくる。

その音が近づくに連れ、真次郎の周囲に熱帯のジャングルが広がってくる。

バシャバシャと雨が降っている。真次郎は息をひそめ、木々の茂みに身を隠している。姿は見えないがキュルキュルと音を立て、木々を踏み潰して敵の戦車が近付いている。

近くで砲弾が炸裂し、ドカン！　ドカン！　と黒い土が空高く舞い上がっていく。

真次郎は他の戦友たちと濡れた木の葉をかき分けて夢中で走っている。暫く行くと茂みの中に腹ばいになり、身を隠す。

木の葉の間からそっと覗き、逃げて来た方を見ると、名も知らぬ戦友が足を負傷したらしく、途中で倒れたまま起き上がれなくなっている。

助けに行こうとするのだが、足が前へ出ない。

倒れた戦友の後方から、木々の茂みをかき分けて鉄の固まりが現れる。

タタタン……タタタタンと砲塔から突き出た機銃で銃弾を辺りに撒き散らしている。

キュルキュルとキヤタピラを軋ませて木々を踏み潰してくる。見つかれば撃ち殺される。全身が恐怖に縮み上がる。

キヤタピラが倒れた戦友の後からのし掛かり、足から踏み潰していく。バリバリバリバリ「うおー……」。

戦車は当たり前のように戦友の身体を踏み潰し、何事も無かった様に進んで来る。

キュルキュル……キュルキュル……キュルキュル……キュル……音が途絶える。ジャングルは消え、真次郎の世界はまたフロアーに戻っている。

車輪の音は調理室からフロアーへと昼食を運んで来たワゴンのタイヤが立てている音だった。フロアーに食事が到着し、その音も消える。

2

ガリガリ……ガリガリ……ガリ……

真次郎のベッドのある部屋で、その音が響いている。

真次郎はベッドに横になりながら、ステンレス製のスプーンをベッドの柵に擦り付けて削っている。

なるべく音を立てない様に気を付けながら。少しずつ削る。でもこうして僅かでも毎日削っていれば、いつかきつと先が尖がって、ナイフの様になる筈だと思っている。

真次郎はそうすることに何かの思いを込めている。それが何なのかは解からない。でもコレをやることが自分の使命である様に感じている。

「何してるんですか」

他の老人の車椅子を押して入って来た男が言う。そう言われて初めて自分のしていることに気が付き、真次郎はスプーンを見る。

自分の意志ではない。自分の手は何故そうしているのか、そのスプーンを何処で手に入れたのかも解かっていない。ただ無意識にそ

れをしていた。

スプーンを持った左手を男に捕まされると、真次郎は怯えた目で男を見る。

「す、すみま、せん！ 申し……訳、ありま……せん……ごめん、ごめんな、さい……」

男は真次郎の指を広げ、スプーンを取り上げる。

「どうかしました？」とまた別の男が車椅子を押し入って来る。

「見て下さいこのスプーン。さつき夕食の時に寝間着に隠して持って来たんですよ。食事の時気をつけないと、相沢さんはスプーンをポケットとか服の中に入れて盗んできて、自分の部屋でベッドとかに擦り着けて削るんですよ」と説明しながらスプーンを見せる。スプーンは先端が削られてギザギザになっている。

「今までにもう何本もやられてますから、気を付けて下さい」

「そうですか、解りました。今度から気をつけます」

男は車椅子に乗せて来た老人をベッドに寝かせると、もう一人の男と一緒に部屋を出て行く。

既に今起こったことも理解していない真次郎は、ただポカンとしている。

……願いまーす願いまーす。用願いまーす。

脳裏に言葉がこだましている。目を開くと真次郎は暗い中に寝かされている。仰向けのままキョロキョロと辺りを見回すと、いつもの常夜灯の光があるのを見つけ、自分がいつもの場所にいることが解り、ほっとする。

どうやら繰り返し返し耳に聞こえていた言葉は自分の口から出ていたらしい「願……い、まーす……願いま……す……」夢の中ではスラスラと出ていた言葉が、現実には口の右半分が麻痺しているので、たどたどしく発音される。

便意を感じている。だがどうやらこのお尻の下の感触は、既に排泄物がオムツの中に広がっている様である。

また自分の口が勝手に繰り返す「願……いま……す、願……ま
ーす……」

暫くしてパタパタとスリッパの音がして、グリーンシャツの男
がドアを開けて入って来る。ベッドを囲んでいるカーテンを開くと
臭気を感じたらしく、ウツと表情を変える。そして真次郎の上から
顔を覗き込む。

「相沢さん、朝になったらまたオムツ交換しますからね、それまで
静かに寝ていて下さいよ、いいですね」と有無を言わせぬ厳しい口
調で言う。そして部屋を出て行く。

自分の臭気に包まれながら、真次郎はボくつと天井を見ている。

真次郎には毎日同じ日常が繰り返されている。朝起こされ、オム
ツを替えて貰い、朝昼晩の食事を貰い、週に二回風呂に入る。

そして今日もまた同じ日常を繰り返し、気が付けば夕食の時間にな
っている。

真次郎はテーブルにつき、グリーンとピンクのシャツを着た男女
が夕食を配るのをボンヤリ見ている。

男女たちは慌しく食事の乗った皿やお椀をテーブルに配っている。
ふと真次郎の視線が引き付けられる。真次郎の目はピンクのシャツ
を着た女たちの中に、その一人を見付け、見つめている。その横顔、
振り向いた表情、他の男女たちと言葉を交わし、少し微笑んだ顔。

真次郎の口が動く「マ……リ……」

そう発音した瞬間、不意にドクン……ドクン……と胸の中で
鼓動が激しくなってくる。

「マ……リ、マ……マリ……マ、リッ……」

真次郎はその女に呼び掛けている。何故その女に呼び掛けている
のか、自分で言いながらマリという女が誰なのかも解っていない。

ただ胸の中にいい知れぬ懐かしさと愛おしさが込み上げてくる。
忙しく働いているその女はなかなか自分の方を振り向いてくれない。
そのことが余計に真次郎の感情を高ぶらせていく。口は半分動かな

い、呂律も回らず、言葉を明瞭に発することも出来ない。それでも必死に呼び掛ける。

「マ……リ！ マ……リ！」

必死に呼んでいる真次郎に気付いたその女が振り向いた。それは二十歳くらいのも、可愛らしい感じの女である。だが真次郎を見てハツとした様な表情を浮かべると、慌てて顔を隠し、そそくさと走って行く。

「マ……リ、俺……だよマ……リ、マリ！ 何処に行く、んだ！」

マリ……マリっ！ マリ……」

女は振り返らずに廊下を走って行ってしまふ。そのまま視界から消える。

それから三秒くらいが過ぎる。真次郎はそのままそこにいて、宙をみている。今起きたことも、自分が言ったことも忘れていた。ただ心には強烈な悲しさが残っている。今何があったのかも、どうしたのかも解らない。

周囲では何事も無かった様にシャツの男女が配膳の準備を進めている。

3

気が付くと真次郎は病院の診察室の様などろろにいる。真次郎の車椅子の前に白衣を着た中年の男が座っている。胸に首から吊るした名札を下げており、それには「川柳」という名前が書いてある。その名前の上には小さく「囑託医」という肩書きがついている。

そして真次郎の横には、紺の背広を着た男が座っており、同じく胸に下げた名札には「野崎孝雄」と書かれており、肩書きには「施設長」と書かれている。

ただポカンとして宙を見ている真次郎を余所に、囑託医の川柳が施設長の野崎に説明している。

「施設長、相沢さんの場合、認知を発症したのは脳梗塞で半身麻痺

になったのがきっかけですので、脳血管性の認知症であることは間違いないのですが、先日のCTの結果を見ると、どうも側頭葉の内側にある海馬が萎縮しているんです。しかし海馬の周りには脳梗塞が起きた兆候は無いんですよ」

聞いている施設長の野崎は、川柳の説明がさっぱり解らないという風は無表情である。

「と言いますと、それはどういうことなんですか？」と川柳に質問する。

「つまりですね、相沢さんの場合、脳血管性の認知だけじゃなくて、アルツハイマー型との複合型だったのではないかとという疑いがあるんですよ」

「はあ……」

「ですから今までは脳血管性の認知症に効く薬しか投与していなかったのですが、アルツハイマーとの混合型ということであれば、新薬のアリセプトを使うことで効果を期待することが出来ると思うんです」

「そうですか」

と答える野崎の返答には少しも感情がこもっていない、まるでそんなことはどうでも良いという反応である。

「なので相沢さんに対して、これまで投与してきたグラマリーの量を減らしてアリセプトを併用して投与してみようかと思うんですが、許可して頂けますでしょうか」

「はあ……」

「何か問題がありますか？」

「あ、まあ、いえ……でもただ、もうそんな必要があるのかなあと」

「どういうことですか？」

「いえ、もう相沢さんも来年は九十歳になりますし、今更少し症状が改善したところで……」

投げ遣りにも聞こえる野崎の物言いに、川柳はちよつとムツとした表情をして言葉を強める。

「医者としては少しでも患者さんの症状が改善されるなら、その為に努力するのは当然のことだと思っておりますが」

「……そうですか、解りました。では、はい、許可いたします」と野崎は表情を変えずに答える。

「それでは、明日の朝から、最初は少量の125mgから初めてみたいと思いますので。宜しいですね」

「分かりました。担当のケアマネージャーの方には私から報告しておきます」と言って野崎はさっさと席を立って行く。

川柳は手にした書類にサラサラとボールペンで数値を書き込んでいく。

真次郎はただぼくつとしたまま。相変わらず何も見えていない目を宙に躍らせている。

翌日の朝食の後、シャツの男は「はい、じゃお薬飲みますのでね。相沢さん。今日から新しくお薬が増えたんですね」と言って真次郎の口に色の違う二種類の錠剤を入れ、吸飲みの先を咥えさせ、水と一緒に流し込んでいく。ゴク……ゴクツ。条件反射で喉が反応し、流し込まれた水を錠剤と一緒に飲み下していく。

真次郎には何をされているのかも、今自分が薬を飲み込んだことさえ解らない。

その日の夕食が終わった後、フロアーに置かれた大画面テレビの周囲を囲む様に車椅子が置かれ、それぞれに座った老人たちがボンヤリとテレビの画面を眺めている。

それぞれの瞳には画面の光が反射しているが、その目で何を見ているのか、テレビに映っているものが何なのかを理解している者はほとんどいない。

そんな中に真次郎もいて、見るともなく視界に画面を捉えている。ふと真次郎の左手が思いがけず俊敏に動き、車椅子の脇を通ろうとしたピンクのシャツを着た女の腕をつかんでいる。

ハッと振り向いた顔は、先日真次郎が見つめていたあの若い女である。

「マ、リ……マリ……」

驚いた女は咄嗟に真次郎の腕を解こうとするが、真次郎のつかむ力が強く、解くことが出来ない。

「……マリ、じゃ……ないか！ 会いたか、った……よ、俺は……ずっと、会いたかった、んだ……よ」

「相沢さん、違いますって。私はマリさんじゃありません」

女は真次郎に訴える。その顔を見ていると真次郎の胸に懐かしさが込み上げてくる。どことなく関西の訛りがあるのもあの頃のマリのままだ。心がドキドキと弾んでくる。

「や、やっぱ……りっ、マ、マ、マリ！ マリじゃ……ないか！ マ、リ！」

真次郎は動かすことの出来る左手で女の手を握り、右半分が麻痺している口で呼びかける。

その女と自分は何処で会ったのか、何故相手を知っているのかも解らない、ただ口が勝手に話し掛ける。

「マリ……マリ……」女の唇は真次郎が長年慣れ親しんだ唇だった。いつもキスしてお互いの唇をなすりつけ合っていた。

この女の首筋も、身体も、全て、指の一本一本からつま先まで、真次郎が舐めていないところは無い。あの温もりが蘇える。裸になつてギュウギュウ身体を絡ませ合った感触が蘇える。

真次郎はその女をもっと自分に引き寄せたいと思い、グイグイ引っ張る。

「相沢さん、どしたんです、ちよつと、やめて下さいよ……」

「やつと……会えた、ね、マリ、きつと会える、と、思つて……たよいつ……か会える、と思つて……だから、だ、から、俺、は……生きて、ることが……出来た……んだよ」

ビュウウくと辺りに風が吹き始める。真次郎と女の周りを風が流れている。真次郎はマリと二人、山の高台の展望台にいる。

遙か遠方に海が広がり、真下には港の風景が見える。夕暮れが近い、他には人もまばらで、真次郎はマリの腕を引き寄せ、自分の顔を近付けようとしている。

「ダメ……いけないわよ真次郎さん……」

俯いたマリの項も、腕にかかる息遣いも、真次郎の頭の中に鮮明に再生されている。

「マリ……好きだ、よ……」

しかし真次郎には右腕が動かせない。両手でマリを自分の胸に抱き寄せることが出来ない。そのもどかしさが一層マリの腕をつかむ左手に力を入れさせる。

「相沢さん、相沢さん……」

女は狂おしい瞳で真次郎を見つめている。

「相沢さん。私はマリさんじゃないですよ。私は沙奈っていう名前なんです」

女を見つめる真次郎の目からポロポロと涙がこぼれ落ちる。

「いいん……だ、よ、お前……は何も言わな、くて……も、また、お前、に会えるな……んて、夢……みたい……だ。ずっと、思ってた、んだよ。お前、のこと……」

「でも相沢さん……」

女は必死になって真次郎の左手を解こうとするのだが、やはり解くことが出来ない。

「今まで……どうしてた？ の、幸せでいた……のか、い？ 愛してるよ、お前、のこと、今も……俺はお前……のこと、忘れ、た……こと、なんて、なか……った、んだあ、よ。いつもう、心配してた……ん……だよ俺は、謝らな……きや、ならないと、思ってたん……だよ、ごめ……んな、本当、に……」

自分がどうしてこの言葉を喋っているのか、何を謝ろうとしているのかも解らない。ただ感情が熱くなり、口が勝手に次々と言葉を吐き出していく。

「……酷いこと……ばか、りして、悪かった、な。懐かし、い……」

な。大好き、だ、った……よ。あの頃……俺、は生まれ、て、良かった……って思っ、たんだあ……よ。本当だ……よ」

真次郎の執拗な言葉に女も顔を赤らめてしまう。

「そうですか、そんな大事な方だったんですね、すみません相沢さん。私がおの方だったら良かったんですけど」

「謝らな、きや、なら、ないの……は、俺、の方、なん、だよ……」
「吉田さん、どうしました」

二人の様子を見つけたシャツの男が駆け寄って来る。

「ああ、すいません。相沢さんが手を放して下さらなくて」と女が振り向くと、男は「総務の村井さんが呼んでますよ」と言い、女を手伝って真次郎の腕を離そうとする。

「ちっ、何て強い力なんだ……」

と真次郎の握力の強さに戸惑いながら指を引き剥がしに掛かる。

「ちよつと、相沢さん。すみません。私は他に用事があるので行って来ますから、ちよつと、待ってて下さい」

だが真次郎は絶対に離すまいとして、つかんだ腕を揺すぶる。

「あ、相沢さん、離して下さい。私はマリさんじゃないんです。私は沙奈っていうんです！」

「どうしました？」

とまた別の男が駆け寄ってきて、三人掛かりで真次郎の腕を離しに掛かる。

「相沢さんに顔を見せちゃいけないって言ったじゃないですか」

「すみません。ここにいるって気が付かなかったのです。相沢さん、離して下さい、痛いですよ……」

「マ……リ、マリ……何処に、行く、んだ」

真次郎は身をよじり、女の腕をつかんだまま左足で車椅子から立ち上がるようにする。

「マ、マリ！　せ……せ、先生、先生っ……お願い……いします！

先生っ！　マリ……を、マ、リを引き留め、て……くださいっ！
先、生！」

「この人はマリさんじゃありません。マリさんという人はここにはいないですよ。ちよつと落ち着きましようね」

男は力づくで真次郎の指を一本ずつ引き剥がしていく。

「マ、リ、マリ……っ！ マリーっ！」

遂に女の腕から左手が離される。その瞬間、真次郎は女の首をつかむ。柔らかい肌に爪を喰い込ませ、喚き散らす。

「コイ、ツつ、殺す！ 殺し……て、やるーっ！」

「痛いっ、痛いっ！ キヤアーツ！」

女が叫び声を上げる。瞬間その声に重なって真次郎の脳裏に「きやー」という凄まじい少女の叫び声が響く。

中学生くらいだろうか、真次郎の目の前にいる少女の顔に、シャワーが掛けられるみたいに真っ赤な鮮血が浴びせ掛かっていく。バシバシバシバシバシヤ……。

「きやあー……！！」あらん限りの声を張り上げて少女は叫んでいる

真次郎はビクリとして動きを止める。

気が付くと、目の前にいるマリの姿が、別人の姿に入れ替わって行く。真次郎の脳裏で、ボケていたピントがキュツと引き絞られる様に、世界の輪郭がハッキリしてくる。

気がつくとその女は真次郎の手を握って涙を浮かべている。真次郎は啞然とする。

……これは……これはどういうことなんだ？ なんだ……この娘は、マリとは違う……。

真次郎にはマリという女が誰なのかは解らない。だが目の前にいる女が、自分の思っているマリとは似ているが違う人間であることが解ってくる。それは視界を覆っていた濃い霧が晴れて行く様な感覚である。

見ると女の白い首から血が出ている。真次郎が爪を立てて強く握ったので、ひっかき傷になってしまったらしい。

「……」

頭の中に、不意に筋道を立てた考えが浮かんでくる。真次郎の中に正気が、理性が戻ってくる。

……これは……俺が、やったのか……この人は、マリではない。違う、知らない人じゃないか……そうだ……俺は、そのマリという女と深い関係だったんだ……でもその女は、きつと俺とそう歳も変わらないだろうから、今ではきつと、お婆さんになっているに違いないんだ。だから……こんなに若い娘のはずがない。

……それにこの子の胸に付いている名札には「吉田沙奈」って書いてあるじゃないか。思い出した、そうだマリは……マリって呼んでいたけれど、正しくは麻里恵という名前だった……俺は、勘違いしてたんだ……。

……でも、それじゃ麻里恵ってのは誰なんだ？ 麻里恵という名前を思い出すことは出来たけど、麻里恵という女が誰だったのかは解らない……やはり思い出せない……。

真次郎は静かになり、ただ呆然とした表情で女の顔を見つめている。

やっと真次郎から解放された女も、じつと真次郎を見ている。首筋から血が流れている。女も今真次郎の様子が変わったことに気付いている。

心配そうに女を見ていたシャツの男が言う。

「血が出てるじゃないか、吉田さんすぐ医務室に行って、消毒して貰ってきなさいよ」

「はい、すみません」

と言って女は小走りに去って行く。

真次郎が落ち着きを取り戻すと、辺りはまた老人たちが眺めているテレビの音だけになり、何事もなかった様に元に戻っている。

「相沢さん」

真次郎の指を引き剥がしたシャツの男が車椅子の脇にしゃがみ込み、真次郎を見て語りかける。

「いいですか、今度また今みたいなことをする様でしたら、もうお部屋から外へ出られなくなりますからね」

「……分かり……まし、た」

「えっ？」

「……どうも、すみません……でし、た……」

思いがけず、真次郎の口からちゃんとした謝罪の言葉が出てきたことに、男は驚いた様子で真次郎を見る。

そして何か気味の悪い物でも見たかの様に立ち上がり、そそくさと歩いて行く。

残された真次郎は、またぼくつとテレビの画面を見るときもなく眺めている。だが心の中では、先ほどの出来事と、シャツの女が叫んだ瞬間頭の中に投影された女の子の、顔に血を浴びて叫んでいる姿が繰り返し再生されている。

あれは……さつき見たあれは一体何だったのだろう。そして、マリ、正しくは麻里恵という女は誰なんだ。俺にとって、とても大事な存在なのだと思うが、何も思い出せない……。

不意に車椅子のブレーキが解かれ、後に引かれて動き出す。

あつと驚いて見ると「相沢さん、ちよつとお話させてもらってもいいですか？」と車椅子を引いたのは先ほど真次郎が首に怪我をさせてしまった吉田沙奈という女である。手当をして来たのか首にはガーゼと絆創膏が貼られている。

その女は真次郎をフロアーの隅に連れて来ると、車椅子の脇にしゃがみ込み、真次郎の顔を見つめてくる。何と可愛らしく、優しそうな瞳だろうと思う。

……そうだ、この顔立ちも雰囲気も、きつと俺が若い頃に知っていた麻里恵という女にそっくりなんだ。

「相沢さん？」

「……」

真次郎には、もうこの女が麻里恵ではないということが解っ

る。

「私が誰だか分かりますか？」

真次郎は改めて女の胸に付けられているネームプレートを見る。

「よ、吉田、さ……沙奈さん……」

「そうです」

女はじつと真次郎を見つめる。今は真次郎を見るこの吉田沙奈という女の表情も違う。

……きつとこの子にも、俺がこの子のことを他の女と間違えてたことに気付いた……ということが分かってるんだ。しかし何てこつたろう……恥かしい。俺はこんな若い女の子に向って、あんな赤裸々な言葉を語り掛けてたというのか……自分の女と間違えて、口説き文句まで並べ立てて……。

「……吉田……さん。ごめん、なさい、俺は……他の、人と、間違えて、たんだ、よ……」

真次郎はお詫びの言葉を口にする。だが、首に血の出る程の怪我をさせてしまったというのに、その吉田沙奈という女は全く気にしていない様に、優しい眼差しで真次郎を見ている。

「いいんですよ相沢さん。私こんなの全然平気ですから、気にしないで下さい」

「……だけど、俺……は……」

「凄い相沢さん。こんな風にお話出来るなんて、初めてですよね。」

今日から川柳先生が新しいお薬を処方したから、その効果なんですかね」

そう言われても真次郎には、毎日ただ与えられる物を飲まされているだけなので、薬のことは解らない。

「私で良かったら、何でもお話して下さいね。今まで私のこと、誰か相沢さんの大切な方と間違えてらしたんですよね。でも私なんかじゃ、とてもその人の代わりになれないかもしれないけど、でも少しでも気持ち晴らして貰えるんですしたら。なんでもお話して下さいいいですよ」

真次郎の心に、それまでの幻想の世界ではない、現実の世界の暖かみというものが広がってくる。

「あ……：：：りが、とう……：：：こ、んな……：：：老いぼれ、た、半分死んで、
るみたい、な男……：：：にそんな、に優し……：：：くして、くれて……：：：」
「とんでもないですよ」

何かサラサラとした感触があるかと思うと、干乾びた頬に涙が流れている。

……：：：おお、俺にも涙が、涙が流れるなんて。俺の身体の中にも、
まだこんなに水分が残っているのか。

吉田沙奈という女は真次郎の涙を手で拭い、ポケットからハンカチを出して自分の指を拭う。そして真次郎の頬を拭く。

吉田沙奈はもうすっかり大人の様だが、顔は幼く、表情によってはまだ少女の様な面影がある。

「私、マリさんという人が、羨ましいです。前から相沢さんが私のことを、他の人と勘違いなさってることは解ってたんですけど、相沢さんのお話聞きながら、私も一度でいいから、こんな風に男の人から思われてみたいなって、思ってたんですよ」

「……：：：マリ」

真次郎の瞳はまた時空を超えるように遠くを見つめる。だが今度は目の前にいる沙奈という女と、自分の記憶の中にいる麻里恵という女とが、違う人間なのだということを理解している。今度は真次郎は、麻里恵ではなく沙奈に語り掛ける。

「き、み、は何歳……：：：なの？」

「三二歳です」

それを聞いて真次郎は驚く。思わず「えっ……：：：ほんと、う？」と聞き返してしまう。真次郎の目にはまだ二十歳くらいの印象だった。「ご主人……：：：は、いる、の？」

「いえ、まだ独身なんです。相沢さんの時代には、こんな歳になっても結婚しない人なんていなかったでしょうね」

「恋人、は、い……：：：る、の……：：：？」

「はい、好きな人はいるんですけど……」

沙奈はそこで言葉を切って、黙ってしまった。

「どう、した……の？ 何か、心配ごと……なの、かい」

「私、誰にも言えなかったんですけど、相沢さんだけに打ち明けますから、他の人には内緒にして下さいね」

「……ああ」

「私の好きな人は、ここの施設長の、野崎さんなんです。ここで働き始めた頃から素敵だなんて思ってた、でも施設長は結婚してて、お子さんもいるし、諦めなくちゃしょうがないな……って思ってたんですけど」

と言って沙奈は憂いを込めた顔をして俯く。するとその瞬間、その顔がまた麻里恵に見えてくる……。

「実は、この前。施設長さんから今度食事に行こうって誘われて、どうしようかなくて、悩んでるんですけど」

「……」

「そりゃ正直なところは、嬉しいんですけど、でもそれって不倫になっちゃやし……でも、自分の気持ちも抑えられなくて……」

それを聞いている真次郎は、沙奈の言葉を理解しているのかいないのか、ただ呆然とした顔をしている。

「でもやっぱ、奥さんのいる人を好きになっちゃいけませんよね……」

その言葉に麻里恵の声が重なって聞こえる。「夫のいる私を好きになっちゃいけないわ……」そう言って麻里恵は真次郎の顔を避けようとする。

……あの時、山の高台にある展望台で、あそこで麻里恵は俺にそう言ったんだ……それがいつのことなのかは分からない。でも、あの時、あの場所で確かに麻里恵は、俺にそう言った。

「貴方のお名前を仰ってみて下さい」

「あ、あいざ……わ、しん……じ、ろう……」

川柳が目を大きく見開き、驚きの表情で真次郎の顔を覗き込んでいる。

「相沢さん。凄いですよ。ご自分のお名前が言えるなんて。これまでは何をお伺いしても、お返事もして下さらなかったのに……」

次に川柳は、真次郎の前に大きな画用紙を置き、それに描かれている絵を見せる。

「さあ相沢さん。この絵に描かれている物は何だか解かりますか？」

真次郎は絵を眺める。それは……何なのか。目に映っている絵の情報が脳に伝わり、脳からそれを表す言葉が発信され、口から音声になって出てくる。

「と、り……鳥。コレは、鳥……」

「はい、その通りです。では次のコレは何ですか」

「……」

絵を見つめる。それが何なのかは頭の中では解っている。だが中々言葉が出てこない。もどかしさに顔が震える。

「落ち着いて思い出して下さい。相沢さんは必ずコレを見たことがある筈なんです。ヒントを言いましたようか、コレはお掃除に使う物ですよ」

「……ほう、き……ほうき、ほうき！」

「その通りです！」

……解る……俺には解るぞ！

真次郎は興奮している。真次郎にとって「解る」というこの感覚は、暫く忘れていた感覚である。

続けて川柳は画用紙を捲っていき、次々と真次郎に違う絵を見せていく。

「コレ……はひ、飛行機。コレが……象で、コレは……コレは、あ

あ……犬、犬だ！」

「そうです、その通りです！」

……俺には解る。そうだ。動物、乗物、道具……みんなこの世界にあったモノだ。そうか、俺は、ここにいたんだ。俺には解る。解るぞ、そうだ、世界が解る。俺は今この世界にいるんだ……。

真次郎のあまりの回復ぶりに川柳は改めて驚嘆した様子を見せ、真次郎に語り掛ける。

「この効果は、やはり先週から新しく飲み始めたお薬の効果だと思うんです。でも前から飲んでいるお薬もやはり一緒に飲まなくてはならないんですが。私が思うに、前に飲んでいた脳血管性のお薬と、新しく飲み始めたアルツハイマーのお薬との分量の比率を変えてみることで、より一層の効果が期待できるんじゃないかと思うんです」

「……」
真次郎にはこの男が何を言っているのかサッパリ理解出来ていない。だが川柳は嬉々として説明を続ける。

「相沢さん。今回の結果を踏まえて、次は二種類のお薬の比率をまた少し変えてみたいと思うんです。それでまた検査をしてみても、その時の様子からまたお薬の比率を検討していきたいと思うんです」
そう言って川柳は「相沢真次郎様」と書かれた処方箋の投薬分量の項目に、サラサラとボールペンを走らせて新しい数値を書き込んでいく。

それまで前後不覚で何も解らなかつた真次郎の感覚に、劇的な変化が起こっている。霧が掛かっていた景色が姿を現わしてくるよう。緩んでいた神経が引き絞られ、物事の並びがハッキリと見えてくる。

……そうか、今俺がいるここは……施設なんだ。身体が弱って自分で動けなくなったり、頭がボケて前後不覚になった年寄りを収容して、世話をしているところ。いわゆる老人ホームというヤツだ。

……そして、いつも俺たちの側にいていろいろと世話をしてくれ

るグリーンとピンクのシャツを着た男と女たちは、ここで働いている職員なんだ。職員たちがベッドで俺のオムツを替えたり風呂に入れて身体を洗ったり、俺の世話を焼いているのは、きつとずっと前から、毎日そうされてきたのだろう。

今まではただ見るともなく勝手に瞳に映っていた物が、全て意味を持って目に映る。

……ここは俺が毎日寝ている部屋だ……そして部屋の壁……寝てる時に目を開けるといつも見える天井……窓……窓の外には、大きな木が並んで、その向こうにはいろんな家が並んでいる。この窓は、この眺めからすると、四階か、五階くらいだろうか、かなり高いところにあるみたいだ。

この部屋は四人部屋で、男だか女だかも解らないが、同じような半分寝たきりの年寄りが俺の他に三人いる。

そして今肌や五感に感じている空気も解る。今までは何も感じなかった雰囲気も、他人の息遣いも、全てがビビットに伝わってくる。

だが、真次郎には今自分が置かれている状況が解ってくるのと同じ時に、その他の解らない部分への疑問が沸き上がってくる。

……ここが老いぼれて死に掛かっている様な年寄りたちを世話しているところだということ解った。では俺は、一体いつからここにいるんだ……この施設に来る前は、まだ自分の足で歩いていただろう若い頃は、何処で何をしてたんだ……それはさっぱり思い出せない。

今日の前にある物への認識力は戻ってきたが、過去については全く思い出すことが出来ない。もう思い出すことは出来ないのだろうか。だが頭の中から全ての記憶が消し去られている訳でもないと思う。

……だって沙奈という娘のことを麻里恵という女と間違えていたことや、何かの拍子に突然目の前に戦場のジャングルが広がっていること等は、きつと俺が過去に何処かで目にしてきた光景に違いないんだ。

……つまりこういうことではないだろうか。俺の前で何かきつかけになるようなことが起これば、それに刺激された記憶が呼び覚まされて目の前に再生される……。

真次郎がまともに話が出来る様になる前までは、沙奈は真次郎に見つかるとその度に愛の告白をされ、絡まれてしまうので、上司から真次郎とはなるべく顔を合せない様にしなさいと言われていた。

だが、真次郎が川柳医師から新薬の処方を受けてからは、沙奈を見ても以前の様に誰かと勘違いして騒ぎ出すことは無くなった。

それ以来沙奈は気軽に真次郎と言葉を交わす様になり、身の上の相談事なども、真次郎が全てを理解することは出来ないにしても、何でも話して聞かせる様になっている。

「相沢さん、私この間、遂に施設長と食事に行っただんですよ。そしてたら施設長が私と、秘密で付き合ってもいいって言って下さったんです！」

ときめいて話す沙奈の表情を見ると、何か真次郎の中にも呼応する記憶があるのだが、それが頭の何処に入っているのか、取り出して見たいと思うのだが、記憶のありかが解らない。そのもどかしさに顔を歪めながら、それでも楽しそうに語る沙奈の顔を見ている。

「相沢さん。大丈夫ですか？ お具合でも悪いんですか？ それとも私の話、詰まらないですか？」

「……いや、そんな……こ、と、ないんだよ。ごめん……ね、自分……のこと……なん、だよ……」

「そうですか、何かお辛いことがあるんですしたら、仰って下さいね。私何でもお力になりたいと思ってるんですよ」

と言って真次郎の動かない右手を取り、自分の両手で包んでくれる。

「あ、りが……とう、あり……が、とう」

……俺にもこの娘の様に、若い時があったんだ。だからその時、

この娘の様な女と恋をして、そして今この娘が感じている様に、嬉しいこともあったんだ。ただそのことを思い出せないだけなんだ……。

真次郎は笑顔になって涙を流している。それを見る沙奈にも物悲しさが移ってしまい、瞳に涙が浮かんでくる。

「吉田さん」

と男の声がする。沙奈が声のした方を見ると、施設長の野崎が歩いてくる。

沙奈は「は、はい」とちよつと緊張した様に答える。

「君の担当だった日の書類に記入漏れがあるからさ、ちよつと僕の部屋まで来てくれるかい」

と言って野崎は何か目配せするような表情を見せる。

「あ、でも今相沢さんが」

「一緒にお連れしてもいいから」といって歩いていく。

沙奈は立ち上がり、真次郎の車椅子を野崎の歩いて行った方へ押して行く。

プレートに「施設長室」と書かれた部屋の前へ来ると「失礼します」と言ってドアを開き、車椅子を押しして入る。

「ああ」

と言って野崎は真次郎と沙奈の後ろを回ってドアへ行き、鍵を掛ける。そして真次郎のことはまるで目に入らない様に沙奈に近付き、肩に手を当てて顔を見る。

「首の傷はどう？ もう大分良くなったかい？」

「はい、全然平気です」

「近くで見せてごらん」

と言いながら野崎は沙奈に顔を近付け「可哀相に」と言いながら唇にキスする。

沙奈は咄嗟に顔を離し「ダメですよ施設長、こんなところで……」
という。

「どうして？ いいじゃない、好きなんだよ」

「でも、相沢さんが見てますから」

「見てたって解らないんだから大丈夫だよ」

「そんなことありません……」

「解ったってどうせ何も覚えてないし、他の人に話したって誰も信用しないだろう」

「でも、あっ……」

グイと沙奈の身体を抱き寄せて、野崎は強く唇を塞いでしまう。

「んっ……んっ……」

激しく粘膜の擦れる音がして二人は身をよじらせる。

「……ん、はあ……いけない……施設長、ああ……」

野崎の顔を振り解こうとするのをまた抱き寄せ、口を覆ってしま
う。

「んん……ん……」

切なく喘ぐ沙奈のくぐもった声が、真次郎の脳裏に電流の様に流
れてくる。

「いけない……いけないよ真次郎さん……」

真次郎の腕の中で抗っているのは麻里恵だ。逃れようとする麻里
恵を抱きすくめて、真次郎は執拗に唇を吸い続けている。

「いけない、いけない……」と言いながら麻里恵の力が抜けて、真
次郎に応じてくる。遂には真次郎の唇を受け入れて、差し込んだ舌
に自分の舌を絡めてくる。

合間に漏れる麻里恵の熱い吐息が真次郎の情熱に火を点けていく。

「ああ……マリ、マリ、好きだよ……」

「ちよつと、施設長……」

下半身に伸ばしてきた野崎の手を振り解いて、沙奈はちよつと大
きな声を出す。

「ダメですよ、ホラ。相沢さんが見てますから」

振り放された野崎は荒い息をしながら沙奈を見つめる。

「ねえ……君はどうしてそう相沢さんにばかりこだわってるの？」

「……相沢さんは、昔愛してた人と、私のことを間違えてたんです」

「本当なのか？ 何か妄想でも見てるんじゃないの」

「違います。マリさんは本当にいたんです」

「そっか、でも、君が代わりになってあげるって訳にもいかないだろう」

「それはそうですけど、代わりになってあげられたら良かったんですけど」

「そんな、まさか君は俺よりもこんなジイサンの方が良いって言うんじゃないだろうな」

「そりゃ本当にお付き合いでする訳じゃないですけど、でも相沢さんみたいに何十年経っても、自分の好きだった人のことを思ってるなんて、憧れますよ」

「ふうん」

「施設長も、私のことそんな風にいつまでも思ってますか」

「勿論だよ」

「本当ですか？」

「本当だよ」

……本当に本当？……そう聞いたのは麻里恵の声だった。あの時……そう、六畳一間の布団の中で、裸の麻里恵は真次郎の顔を見てそう言った「勿論本当だよ」と真次郎は答える。そして麻里恵の身体をギュウつと抱き締める。

ブチュウ……野崎は沙奈の身体を抱きすくめて唇を吸う。そのまま沙奈の着ているシャツをずり上げ、ストラックスの中へ手を入れ、ホックをはずし、ずり下げて行く。

「んっ……んっ……」といいながら沙奈は逆らうこともせず、そのまま野崎に引き摺られる様にして応接セットの長椅子に倒れ込んでいく。

野崎は沙奈の服を脱がせにかかる。

「ああ、ダメ……ダメです……施設長……」

「俺のこと、好きじゃないのか」

「好きです……でも」

「好きなんだろう」

野崎は沙奈のシャツをたくし上げるとブラジャーのホックを外し、露わになった乳房に舌を出したままの顔を擦りつける。

「ああっ……はああ……っっ……」

沙奈が鼻に掛かった喘ぎ声を漏らす。

真次郎も今、麻里恵とセックスしている。それは六畳の部屋に敷かれた布団の上である。

野崎は沙奈の中へ割って入り、激しく腰を打ち付け始める。

「ああっ、ああっ、ああっ、はああ……っ……」

真次郎も今切羽詰まった様に麻里恵の身体をかき抱いている。麻里恵の身体に情熱をぶつけている。もう他には何もない、生きる意味も、生きる価値も、麻里恵にこうして激情をぶつけること意外には何もない。今麻里恵とこうしていることが真次郎の全てなのだ。

そんな真次郎を麻里恵の身体がひっしと受け止めている。突き入れられる度に身体を仰け反らせ、受け止めきれない激情に呻き声をあげながら、身体をガクガクと震わせている。

ソファの上で野崎の身体を挟んでV字に上げた脚をビクビクと震わせて、沙奈は絶頂を迎える。

「はあああ……っ……」

真次郎の瞳に、恍惚とした麻里恵の顔が映る。マリ……その時麻里恵は満ち足りている。麻里恵は真次郎で満ちている。そして真次郎も。麻里恵が真次郎の全てになり、真次郎が麻里恵の全てになる。

「施設長……」

ぐったりした沙奈が口を開く。

「うん？」

「私のこと……好きですか？」

「当たり前だろ」

「本当ですか」

「ああ」

「でも……」

先行きのことを心配する様な顔をして野崎を見つめる沙奈の顔を、野崎が優しく撫ぜ、顔を近付けてそっとキスする。

「何も心配しなくて大丈夫だよ」

「……何も心配しなくて大丈夫だよ……一字一句同じセリフを、真次郎も今、麻里恵に向って呟いている。

5

囑託医の川柳は真次郎の前に白い画用紙と鉛筆を置く。

「相沢さん。今日はこの紙に時計の絵を描いてみて欲しいんですけど。お願いできますか？」

と言って、真次郎の左手に鉛筆を持たせる。

「相沢さんは元々は右利きだったのかな。それじゃ左手じゃ描き難いかもしれませんけど、出来る範囲で構いませんので、描いてみて欲しいんです」

「と……けい？　ですか……」

「はい、時計です。時間を見る為の物ですね。お願いします」

と促された真次郎は鉛筆を持ち、画用紙に向う。

時計……漠然としたイメージはある。確か満月の様な丸か、お盆の様に四角い枠に、数字が並んでいて、その数字を今何時なのかを知る為の針が差し示している物だ。

時計、時計……何か花畑の様に花が咲いている中に、長い時計の針が動いて行く光景が思い浮かぶ。それは過去に何処かで見た物なのかも知れないが、よく解からない。

ブルブルと震える手でぎこちなく円を描いていく。そしてその中に数字を並べて書く、確か円の周りに数字が散らばって、1、2……だが真次郎には数字の順番も分らない。思いつくままの数字を4、9、3……と書いていく。上手く円状に書くことが出来ず、枠からはみ出してしまふ。

それでも川柳は描いていく真次郎を見て驚きの表情を浮かべる。

「相沢さん。凄いですよ。ちよつと前まではお話しをしても全く反応も無くて、自分で考えて何かを描くなんてことは絶対出来なかったのに」

「……」

そう言われても、真次郎には何をそんなに褒められているのか、それとも褒められているのではなく、何かそれ程自分が驚かせるようなことをしたというのか、解らないまま川柳を見る。

「相沢さん。これは本当に、予想以上の効果が現れて私も非常に驚いています」

見ると川柳の横には、もう一人川柳とは違う形の白衣を着た若い男が座っている。

真次郎には解っている。自分は既に衰えた老人で、頭が呆けてしまっている。これまでは自分が何処でどうしているのかも解らなかつたのが、この医師の処方した薬のお陰で自分の意志や、認識力が戻ったのだということも。

しかし過去の自分の人生については全く解らない。だが少なくとも今この瞬間は解る。この部屋、この建物、そしてこの川柳という医師や職員たち。自分がまだ生きているという実感が戻っている。

「それですね、相沢さん。意識の方がここまでしっかりされてきているのであれば、身体のリハビリを行うことも可能だと思えますよ。お身体の機能を活性化させれば、相互作用で脳の働きも活発になっていくんです。今は車椅子ですけど、まだお身体の左側はご自分の意志で動かすことが出来ますから、練習すれば杖を使って歩ける様にもなるんじゃないかと思うんですよね」

「は、はい……」

……練習すれば杖を使って歩ける……その言葉がジンと真次郎の胸に響く。

「それですね、こちらにいらつしやる理学療法士の原先生にリハビリの方をお願いしてみようと思うんですが、どうでしょうか？」

「……お、お願い……しま……す。是非とも……」

口が勝手に喋っているのではない、真次郎の意志がそう言っている。頭がハッキリして来たのだから、自分の足で歩ける様にもなりたい。

理学療法士の原先生に連れて来られたその部屋は、広い板張りのフロアーになっており、自転車のペダルのような物が付いた機械や、鉄棒にロープが付いて引っ張ったりする機械等が並んで置いてある。「それでは相沢さん。最初は歩行器に捕まって、歩く練習をするところから始めたいと思います」

と原先生が車椅子に座った真次郎に言う。

「コレが歩行器ですよ」

と言って原先生が押し来たそれは、キャスターがついた脚部から半円柱の形にフレームが立ち上っており、肘の高さのところは水平に半円状の浮き輪の様なシートが付いている。訓練をする者はそれにもたれて身体を支えながら、脚で地面を押すとキャスターで前に進むことが出来る仕組みになっている。

原先生は車椅子の横に立ち、真次郎の左手と腰を支えながら、前に置いた歩行器につかまって立ち上がらせようとする。

「さあ、相沢さん、いきますよ、立ちましよう」

真次郎は原先生の手で伸ばされた左手で歩行器のシートの縁をつかむと、力を入れて立ち上がるうとするのだが、シートの縁は入浴の時につかまる手すりやベッドの柵よりも高い位置にあり、手すりの様に握って引くことも出来ないの、思う様に力が入らない。

どうにかして車椅子から身体を引っ張り上げようとするのだが、右半身の重みを左手一本で持ち上げることが出来ない。

「ち、くしょう……」

「慌てなくても大丈夫ですから、ゆっくりやりましょう」

真次郎の焦る気持ちを察したのか、原先生は労わる様に声を掛ける。

「それじゃ、せーので私が相沢さんの腰を持ち上げますから、相沢

さんは左手に力を入れて、弾みをつけて立ってみましよう」

と言って原先生は横から真次郎の尻の下に両手を入れ、持ち上げる格好になる。

「いいですか、それじゃせーのでいきますからね、いきますよ。せーのっ！」

原先生が真次郎の尻を持ち上げると同時に、グイと歩行器をつかんだ左手に力を入れ、身体を引き上げる。少し腰が浮いたが、またドシンと車椅子に落ち込んでしまう。

「相沢さん頑張つて、さあもう一度いきますよ。せーのっ」

真次郎も左腕に力を入れる……だがまたドシンと車椅子に戻ってしまう。

……ちくしょう……なんてこった。俺の身体は、こんなにもポンコツになっちゃまったのか。自分で立ち上がることも出来ないなんてなんて情けないんだ……ちくしょう。

「大丈夫ですよ相沢さん。コツがつかめればきっと立てますから、さあ諦めないでいきましょう。いーですか、いきますよ、せーのっ！」

弾みをつけてグイと身体を前に倒すのと同時に左腕に力を入れる。同時に原先生が尻を持ち上げて、真次郎の身体は車椅子を離れ、歩行器にもたれ掛かってどうにか立ち上がる。

立った左足はガクガクと震えているが、なんとか立っている。歩行器のシートに身体をもたせかけ、下を見ると自分が床から凄く高いところにいる様に見える。まるで宙に浮いている様な感覚である。「ほら、出来たじゃないですか相沢さん。いいですよ、しっかり捕まってる下さいね」

どうにか立ってはいるが、歩行器がなければすぐに倒れてしまうだろう。

「それじゃ相沢さん。歩行器のストッパーを外しますからね、いいですか」

原先生は真次郎の腰に手を回して支えながら、もう片方の手を下

に伸ばし、キャスターについているレバーをストップからオープンの方へひねる。

「さあ相沢さん。これで前へ進めますからね、ゆっくり左足に力を入れて、前へ進むようにしてみてください」

後ろから腰の両側を原先生に支えてもらいながら、やっと立っている左足に力を入れて、身体を前へ押し様にする。

グラリ……遥か下に見える床が動いて、四角いタイルの線が後ろへ流れる。

……動いた……。

全く動かすことの出来ない右足はただ引き摺られて、後ろに身体を戻そうとする。真次郎は縁をつかんでいる左手に力を入れて左足を身体に引き付けるとともに、もう一度後ろへ力を入れて歩行器を前へ押し出す。また床のタイルがグラリと揺れて後方へ流れる。

「いいですよ、その感じです。さあ頑張って、出来るだけ前へ進む様にしましょう」

と腰を支えたまま原先生が応援するように言う。

真次郎は下を向いて白い床を見ている。右足を引き摺りながら、左足だけで一步、また一步と歩行器を進めていく。

「あく〜い〜う〜え〜お〜お〜」 「はい、もう一度」 「あく〜い〜う〜え〜え〜お〜お〜」

左半分しか動かない口で明瞭に言葉を発する為の練習も始める。身体を動かすことで脳の働きも活性化されてきている効果なのか、頭の中で言葉を考えて話す速度も増してきており、以前よりもずっとスムーズに言葉が出て来る様になったと感じる。

真次郎の生活には毎日リハビリの日程が組まれる様になり、それまでには無かった張り合いを感じている。

「それじゃ今日は外へ出て、中庭を歩いてみましょうか」

原先生によるリハビリが始まって何日か経った時、歩行器を使っ

て歩くことにも大分慣れて来たので、原先生から中庭へ出てみよう
と提案される。

原先生は歩行器で歩く真次郎を誘導していく。

真次郎が寝起きしている部屋のある廊下を通り過ぎて、職員たち
の詰所になっている部屋を過ぎたところにあるエレベーターホール
まで連れて来る。

二つの大きなドアがあり、その上に数字が並んでいる。以前真次
郎がエレベーターに乗ったのはいつのことだったろうか。

エレベーターというものがあつたことは覚えている。だが前に乗
ったのがいつだったのかは分からない。しかし自分がここにいると
いうことは、かつてコレに乗って来たに違いないのだろうと思う。

原先生はドアの脇にあるボタンを押す。ドアの上に並んでいる数
字のひとつが光っており、その光が横に移動していく。やがてその
光が4のところまで来た時、チーンと音がしてドアが左右に開く。

……そうか、ここは建物の四階なんだな。

原先生に気遣われながら歩行器を進め、エレベーターの中へ入っ
てしまうと、原先生はドア脇に並んだ数字ボタンの①を押す。ドア
が閉まり、グインと揺れて下に落ちて行く感じがする。

一階に着いてエレベーターを降りると、四階と同じガラス窓の並
んだ廊下を歩き、中庭に面したドアへ来る。

ドアは老人たちが勝手に外に出してしまうと危険だから、という配
慮からだろうか、施錠されており、その脇に数字の並んだ機械が設
置されている。

原先生はその数字版を指で押す「1、2、3、4、E」と押して
いくと、ピーツと音がして施錠が解ける。原先生はレバーをひねっ
てドアを開ける。

「さあ行きましよう相沢さん」と原先生が開け放ってくれたドアを
抜けて、真次郎は外へ歩行器を押して出る。途端に外の空気に身体
が包まれる。

……外だ。俺が外に出るのはどれくらい振りなんだろうか。分ら

ないけど、何か懐かしい匂いがする。微かな風と、土と、植物の匂いがする。

周りを施設の建物に囲まれた中庭には、丸い花壇に無数の花が咲き乱れており、その周囲が煉瓦色をした石畳になっている。

建物の脇に植えられている緑の草木を見ながら、真次郎は歩行器を押していると、ふと眼下を流れて行く石畳が、草の生えた地面に変わっていく。

ゲートルを巻いた自分の細い足がヨタヨタと地面を歩いている。

真次郎はボロボロの軍服を着て、本土へ帰る船に乗る為に、船着き場を目指してジャングルの中を歩いている。

果たしてこの道で合っているのかも分からない。もう何日もこうしてさ迷う様に歩いている。自分は生きて帰れるのか。沢山いた仲間の兵隊たちは殆どいなくなってしまった。

自分の意識も朦朧とし始めている。いつ倒れてもおかしくない。倒れたらそのまま気を失って、もう二度と立ち上がれなくなるのではないか……と思いつつ、それでも一歩、また一歩と歩き続ける。そして頭の中のもう一方で、真次郎には解っている。今自分の目に見えているそのジャングルは、現実ではない。

かつて自分が体験した記憶の中にある物なのだろう。それが何時のことか、何処にいたのかは解らない。どうしてその状況になっているのかも解らない。でも確かにそれは、自分が過去に経験した事なのだろうと思う。

「あくえくいくおくうく……私の、名前は、相沢、真次郎……です……」

理学療法士の原先生の指導により、毎日セッセとリハビリに勤んでいるお陰で、真次郎は以前と比べてかなりスムーズに歩行器を使って歩ける様になってきており、言葉を話すことも以前とは比較にならないくらい明瞭に出来る様になっている。

それでもここでの生活パターンは前と変わっていない。朝起こさ

れて、オムツを替えて貰い、車椅子に乗って朝食を食べに行く。そして歯磨き、週に二回の入浴、昼食、団欒の時間、夕食、就寝……。真次郎の生活は変わっていないが、真次郎自身は凄く変わっている。以前の様に全てがなされるままに、自分が誰なのかも何をされているのかも分らなかった状態とは違い、今の真次郎には、自分の今いる状況が理解出来ている。

「さあ相沢さん。今日もゆっくり温まりましたよね。それじゃ前から泡が出てきますけど、大丈夫ですからね」

と言って職員の男がスイッチを押すと、湯船の前からボバババーとジェットの水が噴き出して来る。

身体が後へ流される感覚に包まれると、途端に湯の流れが濁流に変わり、視界にはジャングルの中を流れる河が広がってくる。

「うおっ、うおっ……」

「大丈夫ですよ相沢さん。溺れませんよ、小さなお風呂ですよ」

職員に肩をつかまれて我に返る……真次郎の認識が戻ってくる。

そうだ……コレは只の風呂なのだ。

ジェットの泡を浴びて揺らめいている自分の手足を見る。それは何と皺くちゃで痩せ細っていることか。

「相沢さん、お湯加減はどうですか？」

と職員の男は優しい目をして真次郎を覗き込んでくる。真次郎はこの若い男を見ていて、よくもこんな年寄りの面倒を看ってくれるんだ……と感心してしまう。

ぼくとした目でその顔を眺めていると、男は真次郎の耳に顔を近付け、他の者には聞こえないようにモゴモゴと口を動かし、泡の音に紛れさせながら小声で話しかけてくる。

「……おい、くたばり損ないが今日は静かにしてんじゃねえかよ、くせえ糞ばかりしやがって、お前なんかもう生きてたって何も出来ねえんだからよ、早く死ねよ」

真次郎には驚きも違和感も無い。多分この男は前から真次郎を風

呂に入れる度に、こうやって小声で悪態をついていたのだろう。

……俺には何よりそう言いたくなるコイツの気持ちが見える。そりゃそうだ。それでこそ人間でもんだ……こんな文字通りくたばり損ないの年寄りの面倒を見る仕事なんか、俺が若い頃だったらごめんこうむるところだ……といって、俺が若い頃どんなだったのかも解らねえがな……。

等と思っていると、真次郎は可笑しくなってしまう、自嘲する様に顔がニヤケる。

そんな真次郎の様子をいまましく思ったのか、職員の男はフンと鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。

昼食の時間になり、いつもの様に職員が真次郎の口にスプーンでご飯を食べさせようとする。だが、真次郎が左手で職員の手からスプーンを取り、容器から自分でご飯をすくって口に運ぶのを見て仰天する。

「あ、相沢さん。凄い、自分で食べられる様になったんですか……」
驚いている職員を余所に、真次郎は黙々と食事を続ける。スプーンで口に放り込み、ムシヤムシヤと咀嚼する。

だが右側が麻痺しているので唇が思う様に動かない。口の右端から食べ物がボロボロとこぼれてしまう。気にせず食べ続けると職員がこぼれた食べ物をティッシュで拾う。

食べながらふと、手にしているスプーンを見つめている。

……俺はこのスプーンを盗んで持って行こうと思ってる。何故そう思うのかは解らないが、そうしなければならぬと思っている。どうやって隠して持って行こうかと考えている。

周りを見ると、他のテーブルでも同じように職員たちが、それぞれにヨボヨボの年寄りたちの食事を手伝っている。皆自分と同じ様な、前後も左右も解らなくなっている年寄りたちである。

ホールの端にはテーブルに着かずに、車椅子を円形に並べて座っている年寄りたちがいる。その中心には職員の男がいて、鳥にエサ

をやるように年寄りたちの口に端からスプーンを突っ込んでいく。口にスプーンを突っ込まれた老人たちは、入ってきた食べ物を反射的に口をモグモグ動かして食べる。

中にはスプーンではなく、注射器の形をした器具を口に差し入れられ、注入される流動食を顎を動かして飲み込んでいる者もいる。年寄りたちは男も女も皆無言で萎びた顔をしている。そして白や緑に濁った虚ろな眼をして宙を見ている。

よく見るとその老人たちは、それぞれが皆見覚えのある顔をしている。

……俺は毎日ここで、この連中と顔を合せていたのだろう。ただ、俺も今までは何も認識することが出来ていなかったんだ。目を開いてはいても、何も見てはいなかったんだ。

昼食が終わると一端居室に戻り、職員にベッドに寝かさされる。そして休んでいるとまた三時におやつの時間となり、起こされ、従業員はまた真次郎を車椅子へと乗り移らせ、フロアーへと連れて来る。一日に五回のオムツ交換。それに朝食の時、入浴の時、昼食の時、おやつの時、夕食の時……その度にベッドから車椅子へ、車椅子からベッドへと移乗させる作業の繰り返しで職員たちはクタクタになっている。

皆ニコやかに老人たちに接してはいても、腹の中ではあの風呂場で悪態をついたあの男の様に思っているのだろう。

そりゃ無理もないことだと思う。この老人たちの人数に比べれば職員たちの数が余りにも少ない。一体職員はひとりで何人の老人を受け持っているのか。

それに真次郎は思う、職員たちが大変そうなのは解るが、どんなに世話をしようとも、ここにいる老人たちは何も理解していない。

そりゃ一日中ベッドに寝かせたままでいるのではなく、朝・昼・晩と着替えたり、テールブルに着いて食事やお茶の時間を持つことで人間的な生活をしているという考えは分かる。だがそんなことをさ

れていても、完全に呆けちまっている老人たちが楽しんでいるとはとても思えない。

そんなことを考えながら、フロアーの風景を眺め回してみる。パタパタとテーブルを叩いて拍子をとりながらお経を唱えている老婆がいる。その言葉は「ナンミョーレンギョウ、ナンミョーレンギョウ……」と繰り返しているだけで、恐らく自分が何を言っているのかも解っていないだろう。

隣に座っている老人に一心に話し掛けている老婆は、のべつ幕無しに喋り続けているが、東北の訛りがあるのか、ズズ……ズズとまるでフランス語を話している様でサッパリ聞き取ることが出来ない。他にも誰にもなくブツブツと文句を言っている者。黙って宙を見つめている者。ただ目を瞑っている者……。決して完成することのない折り紙を折り続けている者。友人が皆戦争に行って死んでしまい、自分だけが生き残ったという話をしている者……。

今の真次郎には、それ等の光景が全て今自分のいる現実なのだということが理解出来ている。

……ここは酷い……こいつ等はまるで生ける屍じゃないか。こんなことで、生きていけるといえるのか。そして俺もこの中のひとりなんだ。俺もくたばり損ないだ。でもどうすることも出来ない。もうヨボヨボでこんな半身麻痺の身体じゃどうにもならねえ……。

ふと見ると、パジャマの裾の下に入っていた自分の左手が、食事の時に使っていたスプーンを握っている。

……やっぱり俺は盗んだんだ。何故こんなことをするのかは解らない。だがそれは俺にとって、やらなければならぬことである様な気がする。

夕食が終わり、フロアーでの、団欒の時間、も終わり、また自分の居室へと連れて来られる。真次郎の部屋は四人部屋で、四つのベッドをそれぞれ囲む様にカーテンで仕切られている。

車椅子からベッドへと真次郎の身体を移乗させる為に、職員の間

が真次郎に立つことを促そうとするのを、真次郎が左手を伸ばしてベッド脇の柵を持ち、自分でスツと立ち上がったのを見て職員の方が驚く。

「凄いですね相沢さん。リハビリの成果なんですか」

といいながら真次郎をベッドに寝かせると布団を掛け、車椅子を畳んでベッドの脇に置く。そして部屋を出て行く。

職員が行ってしまったのを見計らい、真次郎はそつとパジャマのポケットからスプーンを取り出す。そして当たり前の様にベッドの柵に擦りつける。

見るとそのベッドの柵には、丁度今スプーンを擦り着けている位置が無数の傷になっており、きつと今までにもこうしてスプーンをここに擦って削っていたのであることが解る。

……ギ……ギギ……ゴリゴリゴリ……同じ部屋にいる老人たちは何も言わないが、職員に見つかり取り上げられてしまうので、あまり音がしない様に気を付けながら、スプーンの先を尖らせる様に削っていく。

自分が何故そうしているのか、何故それをしなければならぬのかは解らない。でもスプーンを削らなければならないと思っている。それはどうしてなのか、きつと何か理由がある筈である。思い出したい。そして、自分はこの先を尖らせたスプーンで何をしようというのか。

削りながらそんな疑問に苛まれて、ふとベッドから身を起こし、周りを見回してみる。今身に着けている物の他に何か自分の持物は無かったのか。見るとベッドの横に小さな戸棚の様な物があり、その上には小さなライトのスタンドが立ててある。そして柵の一番上には引出しがついている。

左手で取っ手をつかみ、引出しを引いてみる。スルスルと開いた引出しの中に、一冊のノートが入っている。

取って布団の上に置き、開いてみると、ページの上に日付が書いてあり、どうやら自分で書いたらしい文字がウニャウニャと並んで

いる。全く覚えてはいないが、きっと左手で書いたのであろう。字の乱れが酷い。

最初のページから目を凝らしてその文字をどうにか読んでみると「この日記は、今日一日のことを忘れてしまわない為に、自分のしたことを思い出せる様に書くものである」と読める。

きっと毎日その日のことを忘れてしまうので、まだ今程には記憶力が無くなってしまいう前に、何も解らなくなってしまうことを恐れた自分が、未来の自分の為に書き留めておいた物なのだろう。

……そうだ。俺だって確かに今まで長い年月を生きて来た人間なのだから、俺にだってちゃんと人生があったはずなんだ。しかし俺は、どんな人間だったのか、何処で何をして、どんな人生を送って来たのか……。

次のページには……六月八日、ボランティアの演奏の人たちが来て「慕情」や「エデンの東」の映画音楽を演奏してくれた……と書いてある。そうだ「慕情」も「エデンの東」も何となく聞き覚えのある題名じゃないか。きっと俺が若い頃に観た映画なんだ。

翌日真次郎は、オムツを替えに来た職員の人に訪ねてみると、確かに以前、楽器を演奏するボランティアの人たちが来て、それ等の映画音楽を演奏してくれたことがあったのだと言う。

真次郎は狂喜する。始めて自分の人生を知る手掛かりになるものを見つけたのだ。夢中になって過去に自分が書いたであろう日記を読み進める。そして遂に最期のページに辿り着いた。そこにはこう書いてある。

「これ以上生きていても、もう俺には何も解らない。何も覚えていないし、自分が誰なのかも解らない。もう俺には生きている意味はない。最早こうなったからには、早く死んでしまいたいだけだ……」

この文章が書かれた日付は、一年くらい前のことらしい。真次郎は日記帳を壁に投げつける。

日記の書かれている最初の日付は、職員に聞いたところによると、四年くらい前らしい。ということは、少なくとも真次郎は四年前にはこの施設にいたことになる。だがその前のことは何も知ることは出来ない。せつかく見つけた日記帳なのに、殆ど役に立たないという事か。

夜眠っていると、夢の中で、目の前を板が機械に掛けられていく。ブイーンと木屑を巻き上げながら、反対側からスベスベになって出てくる。

真次郎は「これでいいんだ……これでいいんだ……」と呟きながら作業を続けている。

「願ひ、まーす……願ひまーす……」

気が付くと闇に向って声を上げている。下腹部から小便がオムツの中へ広がっていく。

グリーンシャツを着た男が入ってくる。

「どうしました相沢さん。もう少ししたらオムツ交換の時間ですかね、それまで待って下さいよ」

と言って部屋を出て行く。出て行った職員が他の職員と喋っている声が聞こえてくる。

「オムツ換えてあげなくていいんですか？」

「いいんだよ、定時の交換以外にそんなことしたら手が回らなくなっちゃうよ」

「相沢さんって独特ですよね、なんで願ひまーすって言うんですかね」

「昔刑務所に入ってたんじゃないかって噂だよ」

「刑務所ですか、何やったんですかね、なんか怖いッスね……」

真次郎には、今自分が夢を見ていたのだという自覚がある。

……そうだ。俺は毎晩の様にこの夢を見ている。あの木材を機械に掛けている場所は、刑務所なんだろうか……俺は、刑務所にいたのだろうか、だとすれば、何か犯罪を犯して捕まったということな

のか。だとしたら俺は一体何をしたというのか……そうだ、あの吉田沙奈さんに聞いてみよう。沙奈さんなら、何か教えてくれるかもしれない。

朝食の後、テーブルの食器を片付けている沙奈を見つけて、真次郎は話し掛ける。

「ねえ、沙奈さ、ん。俺は……刑務所、にいた……んじゃ、ないか……と思う、んだけど……」

「えっ、刑務所ですか？ どうしてそんなこと思うんですか」

「時々、夢を、見る……んだ」

「夢？」

「う、ん。刑務……所の……」

「刑務所の、夢ですか？」

「そ、うなん、だ。俺……は、知り、たい。教えて欲し……い」

「……そうですか、分かりました。それじゃ今度利用者さんたちの家族状況とかが書かれたケースファイルを見てみますね」

それから二〜三日が経った頃、沙奈は「解りましたよ相沢さん」と言ってお話してくれる。

「相沢さんのケースファイルには刑務所のこととかは書いてなかったんですけど、施設長さんに聞いたら教えてくれました」

「そ、そう……そ、それで？ ど、どうだっ……たの？」

「……はい、相沢さんは確かに、ここに来る前、服役なさってたみたいですね……でもそれは医療刑務所です」

「医療……刑務所？」

「はい、普通の刑務所の中で大きな病気とか怪我をして、普通の服役生活が出来なくなった人が移されるところだそうです。相沢さんは最初にいた刑務所で脳梗塞になられて、身体の片側に麻痺が残ってしまったので、そちらに移されてみたいんです」

「そ、それ……は、いつ頃？」

「えーっと、十年くらい前です。そして、医療刑務所に入ってから二年くらいした時に、認知の症状が出て、それで刑期が執行停止になって、この施設に移されて来たらしいです。それは八年くらい前です」

「俺は……今、何歳なの？」

「相沢さんは、生まれたのが大正十四年ですから、今年で八九歳です」

……このしわくちやな手を見れば、ここにいる人たちと同じ、俺がヨボヨボの老人であることは分かる。八九歳……そうか、俺は、そんなに長いこと生きたのか。

「俺は……何をやって、捕まっ、た……んだろう？」

そう言われて沙奈は言葉に詰まってしまう。

「それは、私がお教えしてしまっ、て良いのかどうか、解からないんですけど」

「教えて……くれ、自分……の人生を知る、のは俺……の権利、じゃない……か」

「……そうですよね、これは確かに相沢さん自身のことなんですもんね」

「……」
じっと見つめている真次郎を見て、沙奈は決心したように口を開く。

「それじゃ、お教えしますね。相沢さんが刑務所に入った理由は、殺人だったみたいです」

「殺人……」

真次郎はショックを受けてしばし呆然としてしまう。

「だ、誰……を？　なんで、なんで……殺したの？」

「それは、どんな事情があっ、て、誰を殺してしまったのかまでは、施設長も知らないみたいです」

ショックを受けている真次郎の気持ちをとり繕うように、沙奈は説明して聞かせる。

「でもきつと、何か止むを得ない事情があったとか、そんなつもりはなかったのに弾みでそうなってしまったとか、そんなことじゃないかと思えますよ……だって相沢さんがそんなことしたなんて信じられないですもん」

真次郎はしばし口を開くことが出来ない。でも他にも聞きたいことは山ほどある。

「俺には、家族……は、いない……の？」

「結婚はされてなかったみたいですね、兄弟もいないし、でも相沢さんの貯金とかを管理してる後見人になられてる方がいますよ。遠い親戚の人みたいですけど、たまに面会に来られてるみたいですから、今度来た時にいろいろ聞いてみると良いんじゃないですか」

「そう……それか、ら……俺、は戦争、に行った……のかな」

「そうですね、解らないけど、でも年齢的には行ってもおかしくないと思いますよ」

「……そう、それで、刑務所に、は何年くらい、いた……の？」

「相沢さんは、逮捕されたのが、三六歳の時で、刑期が執行停止になったのが八年前で、その時八一歳ですから……三六歳から、八一歳まで……四五年間です」

「！……そ、そんな……四五年間！俺は、そんな……に、長い間……刑務所にいた、のか……」

しかし真次郎の胸中では、確かにそのことに違和感はない。

……俺は人を殺したのか。誰を？ 何故？ 俺は、若い頃に戦争に行った。そして、日本に帰って来た。おそらくその後、誰かを殺して刑務所に入ったんだ。俺の人生は、戦争の他は、殆どがあの木工の作業だったような気がする。

そして、俺は刑務所にいる間ずっと、麻里恵という女のことを思っていた「これでいいんだ……これでいいんだ」と呟きながら。何がこれでよかったのかは解らない。俺が殺したという相手が、殺しても仕方のない人間だったとでもいうのか？

……麻里恵……もし、俺の記憶の中にいる麻里恵という女に会うことができれば、教えてくれるだろうか。

……麻里恵は、きつと俺と深い関係があったんだ。だから、麻里恵は俺のことをよく知っている筈なんだ。でも、俺には、麻里恵がどういう女なのかも、何処でどうしているのかも分からない。俺には何も思い出すことができない。そもそも麻里恵という女がまだ生きているのかも分らない……。

……麻里恵という女は俺のことをどう思っていたんだろう。まだ生きているのなら、俺が刑務所を出て、ここにいることを知らないのか？ 俺がこうして麻里恵のことを忘れずにいる様に、麻里恵は俺のことを覚えてはくれないのか。

……俺はどうして人殺しなんてしたんだ？ 俺はそんなに悪い男だったのか？ そうだ、沙奈さんが言う様に、何か理由があった筈だ。止むを得ない理由がなければ、俺がそんなことをする訳がない。根拠はないけれど、ただそう思う……しかし。

……解らない、何も解らない、ああ、もどかしくて気が狂いそうだ……。

「わああー！」叫んで頭をかきむしると、目の前で真っ赤な血のシャワーを浴びた少女の顔が叫ぶ「きゃあー！ー！ー」瞬間真次郎は沈黙する。

「大丈夫ですか相沢さん！ 相沢さん……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

心配そうな顔をして沙奈が見つめている。その顔がまた麻里恵の顔にだぶって見える。それは確かに、麻里恵の顔なのだ。若い頃の……俺には解らない……あの少女は誰なんだ！

そもそも俺は「何も解らない」ということが解るようになった。なつちまなつちまから、こんなに苦しむことになったんだ。なんでこんなことになったか。今までは、自分の過去のことなんて知りたいたいと思わなかったのに。

でも解ってしまった。俺には、解ってしまった……そう、俺の人

生は、思い出す価値もないってことが。俺は人殺しで、人生の半分以上も刑務所にいたってことが。

6

「はい、じゃあ相沢さん。今日もお風呂に入って温まりますよ」と言っつて、この前真次郎に小声で悪態をついた職員が笑顔で車椅子を押していく。見ると今日はもうひとり、どうやら新人らしい見知らぬ若い職員がついて来る。

「今日は初めてだから俺のやり方をよく見ておけよ」と偉そうに新人の職員に言う。

「はい」

と新人の職員は少し緊張した面持ちで頷く。車椅子はいつもの脱衣所に入っていくと、シャツシャツと周りをカーテンで囲まれる。

職員は新人に手伝わせながら真次郎を全裸にすると、入浴用の椅子に座らせる。

そして浴室に入ると新人に手伝わせながら身体を洗う。洗い終わると椅子を移動し、浴槽へ向かう。

「さあ、相沢さん、今日もお風呂で暖まりましたよねえ」

ガシャンと音を立てて椅子を浴槽に合体させると、機械を操作する。足元からみるみる湯が沸き上がってくる。職員は新人に耳打ちする様に小声で話す。

「いいか、ここからよく見とけよ、この人ジェットバス入れると助けてくれ〜って暴れるからヨ」と面白がって言う。

「はい……」と新人が答える。

「はい、それじゃ相沢さん。前から泡が噴き出しますからねえ」

と言っつてスイッチを入れる。途端に前からズボボボ〜と泡が噴きかかってくる。

しかし、真次郎はもう前の様に暴れたりはしない。今の真次郎には、コレがジャングルの濁流などではなく、ただの風呂だということ

とが解っている。

「……」

職員は、自分が言った様に真次郎が暴れないことが癪に障ったのか、新人に向って吐き捨てる様に言う。

「……ふん、もうこんな、自分が何をされてるのかも、何処にいるのかも、何を喰わされてるのかも解らなくなってよお、コレで生きてるって言えるか？ 俺だったら、もうこんなになったら殺してくれって家族に頼んで書いてくけどな」

「……そうとも、俺だってそう思う。だが俺にはそう頼んでおく家族もないんだ。若造、分かってるなら今すぐ俺の息の根を止めてくれよ……そうだ。今ここで湯の中に身体を沈めてそのまま溺れ死ぬことは出来ないだろうか。それにもしそうなればコイツの責任になってクビになるかもしれない。そうなればザマア見ろじゃないか……」

真次郎は膝を曲げ、椅子に座った状態の身体が前にズリ下がる様にする。上半身が前へずり下がり、顔が泡立つ湯の中に沈んでいく。そうすることに何の迷いもない。ただ単に、今こうすることが至極当然のこの様に頭を湯の中に沈めてしまう。

ゴボゴボゴボゴボ……

途端にザバアーっと脇の下から身体をつかまれて引き上げられる。

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ、ゲホーッ、ハアッ、ハアッ……」

途端に真次郎はむせてしまう。

「冗談じゃねえよジジイ！ お前みたいなくたばり損ないでもな、死んじまったら俺等の責任なんだぞ、一応人殺しになんだからなあ」
慌てふためいた様子で職員は真次郎を怒鳴りつける。

真次郎は何の感情も沸かない目をして職員を見つめる。

……ふん。若造、なんだかんだ言っても気の小せえヤツだな。

真次郎には、自分の命が存在する価値があるとは全く思えない。人を殺して、人生の半分以上も刑務所にいて。今はもう自分では歩

くことも出来ない。文字通りのくたばり損ないなのだ。

家族もいないし、大切な物など何も残ってはいない。早く死んでしまった方が良く。こんな自分には、死ぬことにさえ意味が無い様に思える。

…：俺が今ここにいても、誰にも何も意味は無い。どうやったら死ねるだろうか。いや、死ぬというのは正しくない。消えるとしてもいおうか。消したい、無くなればいい。俺はただ無くなればいい。

その方法をあれこれと考えてみる。近頃のリハビリの効果により、その気になれば人の手を借りなくても一人でベッドから立ち上がり、左手で壁を伝わって歩くことは出来るだろう。

ここは建物の四階である。窓から外へ飛び降りれば死ぬと思うが、それを見越してなのかサッシにはストッパーが付けられていて、人の身体が通る程には開かないようになっている。

右足を引きずりながら歩くことが出来るのだから、この部屋を出て、歩いて廊下の端まで行って、階段から落ちれば…：でもそれでは首の骨を折るとか、よほど上手い落ち方をしなければ、大怪我をしたとしても確実に死ぬのは難しい気がする。

そうだ、職員目を盗んでエレベーターに乗り、屋上に行くことが出来れば、そこから飛び降りることが出来るかもしれない。理学療法士の原先生に連れられて一階まで降りた時に乗ったエレベーターは、浴室に行く時に通る廊下の先、職員たちの詰所の様な部屋の向うにある。そうだ、それが良い…：。

そう思いつくと、今すぐにでも行きたいと思う。三時のおやつが終わったところなので、夕食に職員が迎えに来るまでにはまだ時間がある。その間に屋上まで行ってしまえばいいのだ。

思い立つと真次郎は左手でベッドの柵をつかみ、グイと力を入れて上半身を起こす。そして動かすことの出来る左足の膝を立て、動かない右足を左手で持ち上げる。左足を動かしてベッドの脇に両足

が下りるように身体を回す。

ベッドの縁に両足を下げて座っている様な格好になる。足元にはスリッパが置かれている。左手で柵を持ち、左足を床に降ろしてスリッパを履く。右足は多分スリッパを履いても引き摺ってしまうので途中で取れてしまうだろうと思い、履かなくても良いと思う。

左足に力を入れて、右足も床に降ろし、左手でベッドの柵をつかんで立った格好になる。それから左手で柵を握って徐々に移動させながら、動かない右足に体重を掛けて少しだけ左足を前へ踏み出す。そうして一歩、また一歩……とベッドの端まで身体を移動させる。

ベッドの端まで来ると、柵を握っていた左手をパッと離し、身体の重心を壁の方に傾けて、ドンと左手を壁につく。そのまま左手で壁を伝わりながら、動かない右足と動く左足で一歩ずつ入口のドアへ近付いていく。

入口の側まで来るとドアの取っ手を握り、スライド式のドアを押して開く。同じ部屋にいる老人たちは何も言わずに黙っている。

スライドドアをいっばいに開けたまま、左手で壁を伝い、身体を外へ出す。廊下には何かを台車に乗せて運んでいる職員の姿もあるが、足腰が丈夫な老人がフラフラと歩いている姿もある。誰も特に真次郎に気付いたり感心を寄せる様子は無い。

そのまま壁を伝わって、エレベーターのある方へと歩いて行く。一歩歩く度に右足を引きずって引き寄せながら、左足だけで少しずつ進んで行く。

エレベーターのところまで行くには、浴室へ向かう角を通り過ぎて、職員たちの詰所になっている部屋を通り過ぎなければならぬ。もし誰かに見つかったら「自分のリハビリの為に練習してるんです」と言い訳しようと思っている。

エレベーターに乗って、屋上へ出ることが出来れば、そして縁まで行って、そこから飛び降りることが出来れば、全ては終わる。

もう何も思い悩むことはない、俺なんか誰でもいい。ただ面倒臭い、今ここで、こうしていることはただ面倒臭いだけなのだ。コレ

が消えればそれでいい。

やっと職員たちの詰所になっている部屋の前まで来る。その部屋は廊下に面して大きなガラス窓になっており、中から外のフロアーの様子が見える様になっている。見ると休憩しているのか、テーブルでお茶を飲んだり雑誌を見たりしている職員たちがいる。その奥にはカーテンで仕切られた中にロッカーが立ち並んでいる。

どうやら沙奈の姿は無いようだ。他の職員たちも壁を伝って通り過ぎる真次郎に注意を向ける者はいない。

詰所を通り過ぎて、エレベーターの前まで来る。原先生がしていた様にボタンを押して待つ。もしエレベーターが着いてドアが開いた時、誰か職員が乗っていたら止められてしまうかもしれない「屋上で少し新鮮な空気を吸いたいです」等と言ってもきっと連れ戻されてしまうか、もしくははその職員と一緒に来てしまうだろう。そうなれば飛び降りることは出来なくなってしまう。

どうか、誰も乗っていませんように……と祈っているとエレベーターは到着し、ドアが開く。誰も乗っていない……。

左手で壁を伝い、途中で閉まりそうになるドアを左足で遮りながら、乗り込むことに成功する。

真次郎にも、それは当然勤務所に入る前のことなのだろう。きっと遠い昔にエレベーターというものに乗ったことがあるのだろう。何処で乗ったのかは解らないが、昔のエレベーターには操作する専門の女性が乗っていた様な気がする。だが今のコレは自分でボタンを操作するものなのだということはある。この前原先生がボタンを押しているのを見ていた。あの時原先生は「1」のボタンを押した。そしてエレベーターは一階に降りた。

1、2、3……と数字が並んでいるのは、一階、二階……ということなのだ。だから一番大きな数字の書かれているボタンの上にある「R」と書かれたところがおそらく屋上ということなのだろう。

今ボタンが光っているのが「4」なので、真次郎のいる階は四階なのだ。迷わず数字の一番上にある「R」を押して動き出すのを待

つ。途中で誰か職員が乗って来てしまえば、屋上まで行くことは出来ないだろうと思いつながら、上がって行くのを待っている。

ドアの上に表示されている数字の光が、一階上がって行くごとに移動して行く。一番大きな数字は「6」で、その次が「R」。

エレベーターは「R」に着いた。ドアが開くと小さな部屋になっており、ドアがあつて外に出られる様になっている。エレベーターを降りるとドアの脇から壁を伝い、外へ出るドアに近づく。

ガチャガチャ……左手でドアノブを握り、回してみるが、どうやら鍵が掛かっているらしい。ドアの横に数字がならんだ小さな箱状の機械が取り付けられている。

この前原先生と中庭に出ようとした時、ドアの脇にあつたのと同じ機械だ。原先生はボタンを押していた。それは確か「1、2、3、4」と数字を押して、それから左下にあるアルファベットの「E」だ。

同じ様に押せば開くだろうか「1、2、3、4、E」……ピーツ、ガチャツ！音がして鍵が外されたようである。

ドアノブを回してみると、すんなりと回る。そのまま前へ押すと外に向つてドアが開く。

やった……途端に風が吹いてくる。先日原先生と中庭に出た時にも感じたが、今また外に出たということが、何か特別なことのように感じられる。コレは何なのだろうか。

……きつと俺は、ずっと長いこと刑務所にいたり病院にいたり、そして今はこの施設に閉じ込められて、こうして自分で歩いて外の空気を吸うということが何年も、いや何十年も無かったから。だからこうして外に出るといふことには、特別な感慨を持つのかも知れない。

踏み出して行くと、建物が大きいだけにかなり広い屋上が広がっている。物干し台が立ち並び、収容されている老人たちの物であるう寝間着や下着、シャツ等が干してあり、風になびいてパタパタと音を立てている。

出て来た塔屋の壁を伝い、そのまま端の欄干につかまって歩いて行く。嬉しくて顔が綻んでしまう。

……でももう、俺には何も意味がないんだ。俺にはもう、こんなことを感じていても、この瞬間に自分が生きているのだという実感があつたとしても。それ以外には何も無い。過去がない。自分が誰なのかも解らない、生きていてもその意味が解らない。だからもう未来も無い。

さっさと飛び降りよう。この左手と、左足だけで、あそこに欄干の前に置かれたベンチがある。アレの上に乗ることが出来れば、上半身を欄干の外に倒れさせて、下へ落ちることが出来そうじゃないか。なんとかあそこまで行ってベンチに登り、欄干を乗り越えるのだ。そうすれば、全て終わる。終わりにすることが出来る。この意味もない瞬間を……。

左手で欄干を伝い、右足を引き摺って歩きながら、どうにかベンチのあるところまで来ることが出来た。身体を欄干にもたせ掛け、動かない右足の膝の下に左手を入れ、グイと持ち上げてベンチに乗せる。そしてまた左手で欄干を握り、身体全体を持ち上げる様にして左足もベンチの上に乗せる。

やった……ベンチに登ると欄干は腰より少し高い位置にまで低くなった。あとは、上半身を欄干の外へ出して、そのまま前に倒れれば……。

背後でガチャガチャと扉のノブを回す音がする。ドアが開き、誰かが出て来た様子である。

「ちよつと！ 何してるんですか！」

バタバタと慌てて走って来た女性の職員が真次郎の身体をつかみ、ベンチから引きずり降ろし、そのまま自分もろともコンクリの床に倒れ込んでしまう。

「あ、相沢さん！ 貴方何考えてるんですか！ ちよつと、誰か、誰か来てえーっ！」

その職員の大声を聞き付けた他の職員たちも現れて、真次郎は抱

き抱えられる様にして四階の居室へと連れ戻される。

その時脳裏に同じ体験が重なっている。真次郎は身体の自由を奪う拘束服を着せられて、紺色の服を着た四々五人の屈強な男たちに手足をつかまれ、そのままズルズルと廊下を引き摺られている。

真次郎は叫んでいる「や、やめろっ……放せ、放せえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

だが誰も真次郎の叫びに耳を貸す者はいない。男たちは有無を言わず真次郎を引き摺って行く。

真次郎は居室に戻され、ベッドの上に乱暴に寝かされる。

そこへ騒ぎを聞き付けたのか沙奈が入ってくる。

「相沢さん」

「……」

沙奈が声を掛けても真次郎は眼を合わそうともしない。

「相沢さん。どうしたんですか」

「うる、さい」

「えっ？」

「うるさい！ うるさい！ 放つといて、くれ……」

「でも……」

「だから……放つといて……くれっ！ って、言ってるじゃ、ねえかあ！」

「……」

まるで取り付く島も無い。沙奈は悲しい顔をして真次郎を見つめるばかりで、何も言えなくなってしまう。

だが真次郎はまだ、この世から消えるという希望を失った訳ではない。

前回は昼間にやろうとしたので失敗した。だが今度は職員が屋上に来る可能性のない夜中に実行すれば、きっと飛び降りることが出来るのではないかと思う。

その日から真次郎は、夜中に職員が見回りに来る時間を測ろうと

思う。今までの感覚だと九時の就寝から朝七時の起床時間まで、四く五回くらい部屋に職員が見回りに来ている感覚である。

だとすれば、九時から朝の七時までの間が十時間だから、少なくとも一回の見回りから次の見回りまで二時間くらいの間が開く計算である。夜中眠らずに起きておいて、職員が見回りに来た後に部屋を出れば、屋上へ出て飛び降りるには十分な時間がある筈ではないか。

躊躇う理由は何も無い。今夜実行しようと思う。

夜九時の就寝時間が来て、職員たちが詰所へと引き上げて行く。

真次郎は毛布を被って寝たフリをしているが、眼をしつかりと見開いたまま、眠る気は全くない。

今すぐにはまだ、職員たちが何か片付けをしたり、詰所で仕事をしている可能性がある。だが次の見回りが来る頃にはかなり夜遅くになっている筈である。その時間にはさすがに当直の職員たちも休んだり、眠ったりするのではないかと思う。その頃がチャンスだと思っっている。

毛布にくるまったまま、じっと待っている。一体どれくらいの時間が過ぎたのか、時間の感覚はつかめない。

やがてパタパタと廊下を歩く音が聞こえて、ガラガラと扉が開く。入って来た職員が他のベッドのカーテンをシャツと開け、眠っている老人たちを確認していく。

他の三人を見回った後、真次郎の寝ているベッドのカーテンを開け、上から覗き込んでいる気配がする。真次郎は頭を少し毛布から出して、じっと目を瞑っている。

やがて職員はドアを閉めて出て行き、隣の部屋のドアを開ける音が聞こえてくる。そのドアが閉まると、またひとつ向こうのドアが開かれる音が小さく聞こえる。それを何度か繰り返すうちに音は聞こえなくなり、シンと静まり返ったまま何の物音もしてこなくなる。今だと思いい、真次郎はそっと毛布を持ち上げ、ベッドの柵を握る。力を入れて上半身を起こしていつもの手順で両足を縁に降ろし、左

足にスリッパを履かせる。そして柵を握った左手で重心を取りながら、左足だけでベッドから床に降り立つ。

その時遠くから何かパタパタと走って来る様な音がしたかと思うと、途端にガラガラとドアが開き、職員の男が入って来る。

「相沢さん。どうしましたか？」

「……」

瞬間真次郎には何が起こったのか分からない。何故だ？ 何故今職員が来てしまったのか。また捕まって廊下を引き摺られた恐怖が蘇える。

「い、いや……俺、は、何も……」

誤魔化す言葉が何も思い浮かばない。

「勝手にベッドから離れてはいけませんよ。解かりましたか！」
いつになく強い口調で職員は言う。

「さ、ベッドに戻って下さい、まだ起床の時間じゃありませんからね」

職員は腕をつかむと、痛いくらいに力を入れて、真次郎をベッドに戻してしまう。

真次郎は訳の分からないまま元の様に寝かされ、毛布を掛けられる。

職員はシャツとカーテンを閉めると、ガラガラとドアを閉めて出て行く。

……部屋から出てもないのに、どうして職員に分かったのか……

考えてみると、何か部屋の中に仕掛けがしてあるとしか思えない。もしかしたら真次郎がベッドから起き出したのを察した同じ部屋に寝ている誰かが、無線でも使って連絡したのだろうか。とも考えたが、この部屋にいる老人たちにそんなことが出来るとは思えない。

だとすれば、このベッドに何か仕掛けがあるのだろうか……

ふと真次郎は、ベッドの布団をめくり上げてみると、布団とマットレスの間に灰色をした分厚い板の様な物が敷かれている。それに

は端から電気のコードの様な物が繋がっている。

「はあ……きつとコレなのだと思う。真次郎がベッドから降りた途端に、物音も立てていないのに職員が走って来たのはコレのせいなのだ。多分この板は、その上に寝ている人がいなくなると、コードで繋がっているところに知らせる仕組みになっているのだ。」

「それはきつと人間の重みに反応する様に出来ているのだ。寝ている人の重みが無くなって軽くなると反応する仕組みになっているのだろう。」

「……きつと俺が屋上から飛び降りようとした時に、また俺が勝手に部屋を出て行かない様に職員たちがベッドに仕掛けたのだ。」

次の日の朝食の後、職員がいつもの様に真次郎の口を開かせ、処方されている錠剤を飲ませようとする。だが真次郎は口を真一文字に結んだまま開こうとしない。

「どうしたんですか相沢さん。さあお薬ですよ」

「……」

真次郎は職員の手を振り払い、口を引き結んだまま無言である。

「しよがないですねぇ相沢さん。折角川柳先生が処方して下さいなのに、どうしてお飲みにならないんですか」

「……」

職員は諦めたのか錠剤を容器に戻し、そのまま車椅子を押して川柳の診察室へと真次郎を連れて行く。

「川柳先生すみません」

「はい」と机に向ったままの川柳が答える。

「相沢さんが朝のお薬をお飲みになってくれないんですが」

「あら……そうですか、どうしたんでしょう」

と言って川柳は椅子を回転させて真次郎の方を向く。

「どうしたんですか相沢さん」

問いかける川柳に真次郎はしっかりと答える。

「もう……飲まない……」

「はい？」

「もう薬……は、飲まない」

真次郎の顔を覗き込んで川柳は不思議そうな顔をする。

「どうしてですか？ 相沢さん。このお薬のお陰でこんなに回復なさったのに、私にも信じられないくらいなんですよ。だからこうしてお話まで出来るようになったんじゃないですか、なのに……」

「その薬……のせいで、苦しんで、るんだ……もう頭なんて……ハッキリしない方が、いい……」

「どうしてです、症状がこんなに改善されて」

「改善……しなくて、いい！」

「どうしてですか？」

「……何も、解りたくな……い。ま……た、何も……分からなくなっただ方、がいい……」

「でも……」

「俺、はもう……薬は、飲まない……」

余りに断固とした真次郎の態度に、川柳も啞然としてしまう。

「でもそれじゃ、ヒハビリの方はどうするんですか」

「やらない……もう、やらなくて……いい……」

「……」

午後の団欒の時間になり、老人たちはフロアーに集まり、テレビの画面を眺めている。

昨日まで真次郎は原先生についてリハビリに励んでいたのだが、止めてしまったので時間を持て余してしまい、フロアーの隅でぽつんと座っている。

そこへ通り掛かった沙奈が真次郎を見つけ、側へ歩いて来る。

「相沢さん……」

「……」

真次郎は沙奈の顔を見ても、もう何の感情も湧かずにぼくつとし

ている。

沙奈は心配そうな顔をして真次郎を見つめる。

「……朝のお菓を飲まなくなっちゃったって聞きましたけど」

「……」

「ねえ、相沢さんどうしちゃったんですか？」

真次郎は何も見えていないかの様にただ宙に目を泳がせている。

「相沢さん……」

「いいんだ……もう」

「えっ？」

「俺なん……かも、死んだ方、が良い……」

「ええっ？」

「生きて、いて……意味がな……いから……」

「そんな、何言ってるんですか、そんなことないですよ。生きていれば楽しいことだってありますよ」

「いい……加減な、こと言うな！」

急に怒鳴ったので沙奈は驚いてしまい、涙目になって真次郎を見る。

「そんなこと仰らないで下さいよ。相沢さんにそんなこと言われたら、私だって悲しくなるじゃないですか」

「……」

「……そりゃ、こんなところで申し訳ないと思うけど、人手不足でいき渡らないところもあると思うけど。でも私にとってはこれが仕事で、頑張ってるんですよ」

そう言っつて沙奈が余りにも悲しそうな顔をするので、真次郎も少し狼狽してしまう。

「そ、そうじゃ……ないよ、沙奈さんに……は感謝してるよ……」

「あのね相沢さん。私なんかには、偉そうなことなんて言えないですけど、でも……」

沙奈は言葉に詰まってしまい、どう言えば真次郎に解って貰えるだろうと考えている様子である。

「ねえ、相沢さん。ここで働いている職員の生き甲斐は、相沢さんの様な利用者さんに幸せを感じて貰うことだけなんですよ。生きていて良かったって、感じて貰うことだけなんですよ。それなのにそんなこと言われたら、私だってもう、頑張ろうっていう気が無くなるじゃないですか」

「いや……そうじゃない。ごめん……よ君には感謝してる、んだ……よ、いつもありがとう……よ、こんな老いぼ……れの相手、をしてくれて……」

「私たちもこの利用者さんたちの暮らしをもっと良くしてあげたいとは思ってるんです。でもこれ以上職員の数を増やすことは出来ないらしくて、いつもギリギリの人数でやっていくしかないんですよ。でもどうしても手が回らなくて、利用者さんたちに見れば、雑に扱われたり、放つたらかちにされてるみたいに思われるのかもしれないけど」

「いや……俺はそんなこと言ってる……んじゃない……んだよ……」
確かにここにいる老人たちは、自分も含めて、まるで物の様に扱われていると思う。でも、それは仕方のないことなのだと思次郎は思っている。

必ずしも職員たちが老人を物の様に扱っているという訳ではない。実際ここにいる老人たちは物に近いのだ。

それは沙奈が苦しむべき問題ではないと思次郎は思う。誰が、何が悪いというのでもない、これは必然的にある現実なのだろう。

「でも君は、どうし……てそんな……に俺のことを？」

「だって私、相沢さんみたいな人に会えて、この仕事して良かったって思ってたんです」

「ど、うして……？」

「どうしてかな……それは、人のことが信じられる様になっただけだろうか……」

「……？」

真次郎は沙奈の言っていることが理解出来ずに、ただ沙奈の顔を

見つめている。

沙奈の表情が思い詰めた様になっていく。真次郎にはその顔が酷く悲しそうに見える。

「施設長が最近、二人で会ってくれないんです。私……施設長のと好きだけど、やっぱり施設長は、奥さんや子供と別れてまで私と一緒にになりたいとは思ってないと思うんです。だから相沢さんみたいに、マリさんて人のことを生涯愛してたって話を聞くと、憧れるんです。私もそんな恋愛がしてみたいって思うんです。一度でいいから、そんな風に男の人に思われてみたいなって。人を愛するっていうけど、それってどういうことなのか、本当に人から愛されるってどんな気持ちなのか、私も感じてみたいです」

「……」

「相沢さん。私、いけないことだって解ってても、施設長を好きになっても幸せにはなれないってことも解ってても、でも気持ちが凄く魅かれてしまうんです。辛いです。でも、これが人を好きになるっていう気持ちなんですかね。私、こんなに男の人を好きになったの初めてなんです」

その言葉が真次郎の脳裏にこだまする。

「……私、こんなに男の人を好きになったの初めてよ」

そう言ったのが麻里恵であることは間違いない。そしてその言葉の後に麻里恵はこう続けた。

「私、真次郎さんのところに行っちゃおうかな……」

真次郎は沙奈の顔を見て話す。

「でも俺……はその相手、が誰だっ、たのかも……思い出せない、んだよ……情けないよ……」と自分の頭を叩く。

「相沢さん。いいんですよ、もう、いいじゃないですか、相沢さんの中に今でもそんな強い思いが残ってるってだけでも素敵じゃないですか。だからもう無理に思い出さなくてもいいじゃないですか」

だが、沙奈にそう言われても、真次郎の中にはどうしても思い出したいという強烈的な衝動がある。

「ねえ相沢さん。生きててもつまんないなんて言うけど、私だって、どうやって生きてらいいか解らなくて、ジタバタあがいてるんですよ。相沢さんと同じなんですよ」

その言葉に真次郎は不思議そうな顔をして沙奈を見る。

「……こんなに若くて、可愛らしい顔をして、それで一体何が詰まらないというのか……」

「相沢さん、私まだこの仕事を始めてから二年目なんです。その前はOLをしてたんですけど、その会社が倒産しちゃって、仕方なくこの仕事を始めたんです。元々何がしたいとか、ハッキリした目標があって生きて来た訳じゃないですけど、気が付いたらこんな良い歳になっちゃって、まだ自分が本当にやりたい事もなくて、でも取りあえずこの仕事に就いたから、今は頑張ってるしかないって感じで」

「……」

真次郎は沙奈が何故自分にそんな話をするのか理解出来ない。キョトンとしている。

「ねえ相沢さん。私ね、元々は兵庫県の宝塚市に住んでたんです。

知ってますか？ 神戸の近くです」

「……」

「そこで短大を出た時、ひとり東京に来たんです。私の実家は古い温泉旅館をしていて、両親は離婚して、旅館は母が社長になってるんですけど、母とはあんまり仲が良くなって……」

沙奈が話すのは、きつとそうすることで真次郎が死にたいと言う気持ちも少しも慰めようとしてくれているのではないかと思う。

でも、そんなことは意味の無いことなのだ。真次郎が死にたいと思うのは、生きることには希望を持つとか、まだ楽しいことがあるかもしれないとか、そんな次元で解決出来ることではない。

「でも私……正直に言っつて、もう死にたいなんて言う相沢さんの気持ちも解るんです……」

「……」

「本当はこんなこと利用者さんに話しては絶対にいけないと思うけど。実は、私も思ったことがあって、認知症になってもう自分では右も左も分らなくなつて、身体も動かさずに自分でご飯を食べることも出来なくなつてしまつたら、こんな風に、まるで植物みたいに生きてるくらいなら、尊厳死させて上げた方がずっと救いになるんじゃないか……つて。思つてしまうこともあるんです」

……そうだよ、それは、その通りだ。

「これから先、もつと高齢化が進んで、介護職員の数はどんどん足りなくなるんだから、利用者さんたちは今よりもつと酷い扱いになるつて、そんなこと私たちが心配してもどうにもならないつて上の人たちは言うんですけど。でもきつと利用者さんたちの家族は、一日でも長く親御さんたちに生きていて欲しいと思つてると思うんです」

「俺……にやもう家族なんて、いない、俺に生きて、て欲しいなんて、思つてる人……は誰も……いない……」

「でも、ここに私がいるじゃないですか、それに何処にいるか解らないけどマリさんという人だつて、まだ何処かで真次郎さんのこと思つて生きてるのかもしれないじゃないですか！」

「……」

沙奈も珍しく語気を荒げる。どうしてそこまで熱を入れて話してくれるのかと思う。そのことにはずっと忘れていた人の温もりの様な物を感じる。

「さ、沙奈……さん……」

「何ですか」

「お母さ……んとは、連絡……してないの？」

「時々電話だけはしてます。仲悪いけど、元気であることだけは知らせとかなきゃと思つて。私の両親は、私が小さい頃に離婚して、ずっと母子家庭だったんです」

「そう……でも、なんで、お母さん……と、仲が悪い……の？」

「母は男性に対して凄く疑り深い人で、父のことを、他に女がいる

んじゃないかって、凄く疑ってて、私は父は浮気なんかしてなかったと思うんですけど、母は信じなくて、そんな母に父は我慢出来なくなつて、出て行っちゃったんです」

「ふうん……」

「そんな母も、子供の頃に戦争で父親を亡くしてて、旅館の女将だった祖母と二人だけで暮らしてきたらしいんですけど」

そんな沙奈の話を聞きながら、真次郎にはずっと引っ掛かっている物がある……さつき沙奈の言った言葉が脳裏にこだましている。

それは宝塚市……神戸の近く……という言葉である。でもそれが何だというのかは解らない。

「それで地元の短大を出た時に、父は母と離婚して東京に住んだので、私は母の元から離れたかったのと、父のことが可哀相だと思つたので、東京に行こうと思つたんです。それでこっちにあつた会社に就職して、そこで十年も働いてたんですけど、倒産しちゃつたんで、職業安定所に行ったら、良い仕事はあんまり無かつたんだけど、介護の仕事にだけは沢山の募集が来てて、それじゃやってみようかなつて。私がこの仕事に就いたのは、そんな風に、本当にたまたまだったんです」

「……」

「だから私、前から介護の仕事がやりたかつた訳じゃないけど、でも私にもまだ地元で元気に暮してるお祖母ちゃんがいて、私母とは仲が悪いけど、お祖母ちゃんのこと大好きなんです。小さい頃から、母に怒られて落ち込んでる時も、お祖母ちゃんはいつも優しくて、慰めてくれたんです。だから私、もしこの先お祖母ちゃんに介護が必要になったら、旅館を継ぐのは嫌だけど、神戸に戻つて、お祖母ちゃんの面倒は見てあげたいなあと思つてるんです」

「おばあ、ちゃん、は何歳……なの？」

「来年九十歳になるんです。あ、ちょうど相沢さんと同い年ですね」

「ま、まだ元気……なの？」

「はい、今でも旅館で働いてるんですよ。もう女将は引退したんで

すけど、女将の仕事は母に譲って、今でも仲居さんをしてるんです。でも昔からのお客さんからは、祖母は大女将って言われてて、地元じゃちよつと有名なんですよ」

「そう……」

「そうそう、そう言えば相沢さんの大切な人はマリさんで言うんですよね、私の祖母はマリエっていうんですよ」

「!……マ、マリ、エ……マリエっていう……のか？ 君のお祖母……ちゃん、も」

「そうですけど、それが何か？」

キョトンとした顔をして、沙奈は真次郎を見ている。だが真次郎は慌てふためいた様に問い質す。

「そ、その字……を書い……て、名前を……漢字で、書いて……」

「あ、はい、いいですけど……」

沙奈は胸のポケットからメモ帳を取り出すと、新しいページを開き、ボールペンで出来るだけ大きく文字を書き、真次郎に見せる。

「麻里恵」

!……真次郎の目が見開かれる。

「麻里、恵……!!？ 沙奈さんの……お祖母ちゃん、は、麻里恵って、言う……の？」

「はい、そうですよ」

「今、何歳……な、の？」

「だから相沢さんと同じ八九歳です」

「……」

「……どうしたんですか？」

愕然とした様に真次郎は宙を固視する。それはまるで遠く時空を超えたところを見据えている様な目をして。

「……それは……はマリ、じゃないのか!……いやそ、れはマリ……だ。解った。麻里恵、それは、麻里恵……なんだよ、それ……は……」

…

「えっ、相沢さんのいうマリさんも、麻里恵っていうんですか、でもそんな、相沢さんのいつも言ってるマリさんが私のお祖母ちゃんだっていうんですか？ そんなことはないですよ」

確かに何の根拠もない。たまたま同じ年で同じ名前だったというだけなのかもしれない。だが何の疑問もなく、真次郎には沙奈の祖母だという麻里恵が、自分の記憶の中にいる麻里恵に間違いないのだと信じられてしまう。

…麻里恵…お前は生きていたのか、麻里恵…そうか…この子は麻里恵の孫だったのか、だからこんなに似てたのか…。

「ね…え、お祖母ちゃんの…こと聞かせ、て…どんな…お祖母ちゃん…なのか」

「お祖母ちゃんは、ずっと宝塚市に住んでましたけど」

「宝塚っていう…それは、何処なの」

「兵庫県ですけど」

「兵庫、県…」

「兵庫県は、大阪と京都の隣にある県です」

「それじゃ、ここは…ここは何処なの…」

「この施設があるところですか、ここは東京の杉並区っていうところですよ」

「東京…杉並」

どの地名にも聞き覚えがある。かつて真次郎はその地名のどれをも良く知っていたに違いない。だが今はそれらの場所が何処にあつて、どれくらいの距離なのかも、全く思い浮かべることが出来ない。「それに、相沢さんの覚えてる麻里恵さんて、苗字は何ていうんですか？」

「苗字…は、苗字は…分らない…」

「それじゃ何処でお知り合いになったんですか…それも分らないか…」

「…」

「うちのお祖母ちゃんは、一度結婚したけど、私のお母さんを生んだ後すぐに戦争でご主人を亡くして、それから実家に戻ってずっと、母と二人で旅館を切り盛りしながら暮らして来たって言っていました。それ以来宝塚市から出たことは一度もないはずですけど。相沢さんも神戸の方にいらしたことがあるんですか？」

神戸……宝塚市……温泉旅館……それ等の言葉に引っ掛かるものを感じるのは確かなのだが、それが何なのかは解からない。

「う……うう……」

やはり真次郎にはただ、唸り声を上げて頭を抱えることしか出来ない。

「戦時中に祖母は地元の作り酒屋の息子さんだった人と結婚して、その方は戦争に行って亡くなられたって言ってました。今は旧姓に戻って三浦っていう名前ですけど」

「三浦……」

「はい、私は母が離婚してもそのまま父の名前で通してきたので吉田ですけど」

「どんな……お祖母ちゃん。どんな……人なの？」

「お祖母ちゃんは……」

ちよつと考える顔をして、沙奈は思い出している。真次郎の方から尋ねる。

「いつ……も優しくて、弱弱し……い感じがして……人に何か……強く言われると、逆らえない……」

「……はい、確かにそんな感じはあると思いますけど……」

……そうだ。麻里恵は弱弱しい女だった。俺がどんな理不尽なことも、横暴なことを言っても逆らいやしない、ちよつと大きな声を出しただけでも涙ぐんでやがった……。

「私が母と喧嘩した時も、お祖母ちゃんは優しくて、いつも慰めてくれました。私にとっては、フカフカの綿みたいに優しいお祖母ちゃんでした」

「よく……泣いて、なかった……かい？」

そう言われて沙奈も何かに気付いたのか、ちよつと気味が悪そうな表情を見せる。

「……は、はい、確かにお祖母ちゃんは、私が相談に行くといつも優しく、ニコニコしてくれるんですけど、でも仕事を休んでる時とか、一人でいる時は、なんだか物悲しい感じっていうか、普段から黙っていると泣いてるみたいな顔してて……旅館の敷地にある離れで寝起きしてるんですけど、夜中に時々シクシク泣いてる様な声が聞こえたりしました」

……シクシク声を殺して泣いている！

その言葉に、真次郎の胸の奥で呼応する記憶がある、それは何なのかは解らない、だが酷く懐かしい様な感情が込み上げてくる。

「それで気になって次の日に、昨夜は何を泣いてたのって聞いてみても、お祖母ちゃんは悲しそうに笑うだけで、教えてくれないんです」

「マリだ……そ、れはやっぱり、麻里恵だ、それは……」

「でもそんな偶然って……」

「いや、ま、間違い、ない……」

「でも、じゃ何処で知り合ったんですか？ お祖母ちゃんはずっと宝塚市にいて、戦争で亡くなったご主人がいたんですよ、相沢さんとはどんな関係だったんですか」

「……それが……が、分らない、いんだよう、うううああ何なん……」

……だ！ 何だ……っていう、んだ！ うううううー」

ブーーーーンンンン……。

途端に材木を削っていく電気カンナから木屑が噴き上がる。

そして顔面に血しぶきを浴びて絶叫する少女「きゃあああああー！ ー！ ー！ ー！ ー」だが、今回はその映像に、血飛沫を噴き出して倒れて行く人間の影が見える。少女に噴きかかる血液は、その倒れていく人の胸元から噴き出している。

真次郎はカッと目を見開く。

……俺は、一体何をしたんだ……。

自分の左手を開いて見つめる。

真次郎は、沙奈の祖母が自分の記憶にある麻里恵であるということを確認している。だが、それを沙奈に信じて貰える様に説明することは出来ない。

何一つ麻里恵との具体的な関わりを思い出すことが出来ない。だから何をどう説明すれば良いのかも解らない。自分自身にさえ麻里恵がどういう存在だったのか分からない。

「お祖母……ちゃん、は、今何処……に、いるの？」

「神戸の近くの宝塚市の武田尾温泉っていうところにある桜華園っていう旅館ですけど」

「おう……か……？」

「……えん。桜の、華の、園、って書いて桜華園です」

「桜……の、華の……園、神戸の近く、宝塚市……に、ある……」
今真次郎の胸の奥に、ポツと小さな炎が点いた様な熱さが宿る。

第二章

1

「先生……あの薬……を、もう、一度、飲ませて、下さい……」

「はい、分かりました。相沢さんがその気になられたのならそれに越したことはないですけど、でもなんでまた急に気が変わったんですか？ 何か心境が変わることでもあったんですか？」

「もつと、思い出……したいから……記憶が戻るか……もしれない、から……」

「……そうですか、では挑戦してみましよう。でもこれだけは申し上げておきますが、この薬は飽くまでも症状を緩和したり、認知症の進行を抑える効果はありますが、相沢さんがいくら思い出したいことがあるとしても、死んでしまった脳細胞はもう元には戻りませ

んからね。完全に失われてしまっている記憶を思い出すことは出来ないんですよ」

「……はい」

それでも、真次郎は信じている。頭の中にはまだ記憶が残っている。絶対に。

断片的にはあるが、時折頭の中を過って行く数々の光景は、自分の中にそれらの記憶がまだ残っているという証拠なのだと思う。「それでは前回中断してしまった時に試そうと思っていた薬の比率配分にして、また再開したいと思います。私が思うには今度こそ、グラマリールとアリセプトの比率が一番良い比率になると思うんです。これならきつと、今までよりも一層の回復が見込めると思いますが、いかがですか」

と言って川柳は張り切った様子で処方箋の用紙にサラサラとボールペンを走らせ、数値を記入していく。

真次郎は先日壁に投げつけたままベッドの下に放置されていた日記帳を拾い上げる。

ベッドの脇にある台の上でシワを伸ばし、ページを開く。そしてボールペンを取り、左手で苦労しながら最後の日に書かれている「死にたい」という言葉に線を引いて消す。

そして、新しいページのの上にさっき職員に教えて貰った今日の日付けを「平成二六年九月十七日」と書く。左手はブルブルと震えて上手く書けないが、真次郎はゆっくりと、時間を掛けて、一文字一文字を書き入れていく。

今日から自分について、分かったことを書いて行こうと思っている。

「俺の名前は相沢真次郎である。」

今八九歳である。

若い頃、戦争で何処か外国の島に行っていた。

帰国してから誰かを殺してしまい、長い間刑務所に入っていた。十年くらい前に刑務所で脳梗塞を起こし、医療刑務所へ移され、そこで頭がボケてしまい、この施設へ移されて来たのが八年前。俺には後見人になっているという遠い親戚がいる。たまに俺と面会に来ているらしい。

俺の人生には麻里恵という女がいた。しかし麻里恵は俺の妻ではなく、戦争で死んだ他の男と結婚していたらしい。

この職員の吉田沙奈さんは、きっと麻里恵の孫娘であると思う。麻里恵は未だ健在で、神戸の武田尾温泉というところにある桜華園という旅館で仲居をしているらしい。

俺がいまいるこの施設は東京の杉並区というところにある。

頭の中に時折り、俺が殺した人から噴き出したと思われる血を顔に浴びて絶叫している少女の顔が見える」

2

その日真次郎は、今までには入った覚えのない「応接室」というプレートが掲示された部屋へ連れて来られる。

職員に車椅子を押されて入って行くと、そこには施設長の野崎と、もう一人見知らぬ男がソファに座っている。

「相沢さん。今日は相沢さんの後見人をして下さっている町倉さんがいらして下さいましたよ」

と野崎がその男を紹介する。

「こんにちは相沢さん」

「……」

年齢は四十代くらいだろうか、じっと見ても、その顔には一向に記憶がない。

「あ、貴方……は、誰……ですか」

真次郎がハッキリとそう言葉を掛けたことに、町倉という男は驚いた顔をして真次郎を見る。

「相沢さん……」

黙っている真次郎に代わって、野崎が答える。

「最近うちの嘱託医が相沢さんの飲まれている薬の処方を変えたのはご存じですよね」

「はい、ケアマネージャーさんから伺いましたが」

「どうもその薬が凄い効果を発揮したらしくって、私たちも驚いてるんです」

「そ、そうですか……」

その町倉という男は何故か狼狽した様子で真次郎を見つめる。真次郎は訊ねる。

「あ、貴方……は誰、なんだ……？」

「この方は相沢さんの成年後見人をして下さっている方なんですよ」ともう一度野崎が説明する。

「せ、成年、後見人……って何だ」

「相沢さんの代わりに、相沢さんがお持ちになつてる財産を管理して下さってる方です」

「ぞ、財産……俺に、財産……がある、のか？」

その質問には後見人だという町倉が答える。

「はい、それは心配しなくても。私がしっかり守って管理してますから大丈夫ですよ」

「貴方と、俺と……は、どういう関係……なんだ？」

「私は、相沢さんの従妹に当たる人の、義理の息子です。八年くらい前に家庭裁判所の方から依頼がありまして、それからずっと相沢さんの後見人をさせて頂いてます」

「……」

そう言われても、真次郎には俄かには理解出来ない。

「俺は、アンタに、教えて……欲しい」

「はい、何でしょうか」

身を乗り出して質問する真次郎に、町倉は少し圧倒された様に身構える。

「お、俺には家族……はいたのか？」

「はい、それはいましたよ。相沢さんにはご両親と、妹さんがいました」

「そ、それ……はどうなった、の？」

「それは、その頃相沢さんの御家族は神戸に住んでいたんですが、戦争で空襲にあつて、全員亡くなられたと聞いています」

「こ、神戸……でぜ、全員……死んだ……」

……神戸……やはり、俺も、神戸にいたのか……。

「はい。その時相沢さんは戦争に行つていて、終戦になってから復員して来たと聞いてます」

……戦争……。

真次郎の中で何か自分の記憶の、離れていた断片が少しだが、繋がっていく様な気がする。真次郎は尚も町倉に問い詰める。

「それから……俺は、刑務所……にいた、んだろう？」

「はい、そうですよ」

「お……教え、て欲しい……俺は、誰を殺……したんだ？」

「はい？」

町倉は再び驚いた顔をして真次郎を見る。そして野崎と顔を見合わせる。

「……だから、どうして、誰を……殺したんだ？ アンタ、知って……るんだろ……う」

「覚えてらっしゃらないんですか？」

「思い……出せない、だから、聞いている……」

俄に町倉の表情が真剣になる。

「本気で言ってるんですか？」

「ああ……」

「自分のしたことを忘れてしまったんですか？」

「だか、ら……教えてくれて……言ってるじゃ、ねえか」

「今更そんなこと、もう思い出さない方が良いんじゃないですか」

「なんで、だ……？」

「もういいんですよ相沢さん。貴方は長いこと刑務所に入って、立派に罪を償われたんですから。もう安らかな日々をお過ごしになって良いんです。忘れてしまわれたのなら、それで良いじゃないですか」

「……」

「……どうやらこの男は、それについては教えてくれないつもりらしい。」

町倉はそんなことよりも早く自分の用事を済ませてしまいたいと思っているのか、真次郎の問い掛けには答えず話題を変えてしまう。「それですね、相沢さん。施設長さんから今度貴方が身体のリハビリをお始めになったということ伺ったものですから、今日はそのお話をしに伺ったんですよ。というのですね、こちらの施設の中に、相沢さんのお金でリハビリに使う専用の道具を買って置いて貰おうと思っっているんです」

「俺の……金でリハビリ……の道具？」

「はい、そうです。こちらの理学療法士の先生とも相談してですね」

「そ、それは、幾ら……なん、だ？」

「はい、それはこちらできちんと管理してお支払いもしておきますので、ご心配なさらなくても大丈夫なんですよ」

「幾ら……なんだ？ 俺の金……なんだろ」

「……ですからそれはですね」

「俺……の金は幾ら、幾らある……んだ？」

「それは、こちらでちゃんと管理していますので、お気になさらなくともいいんですよ」

「いい、幾ら……ある！ って聞いてん、じゃ……ねえか！」

そう言われて町倉は鞆から預金通帳らしき物を出しかけるが、ちよっと困った顔をして野崎を見る。

真次郎は左手でバーンとテーブルを叩く。町倉は大きな音に驚く。

「見せろ！ 見せろっ……俺の金を、見せろ……」

真次郎は左手を伸ばし、町倉の持っている通帳を渡せとせがむ。

町倉が野崎を見ると、野崎が仕方ないという風に頷いたので、真次郎に通帳を渡す。

真次郎は通帳を受け取って見る。表紙に「相沢真次郎様」と記載されている。開いて見る。

細かな数字が並んでいる。一番最後に記載されている数字が今の残金なのだということは無意識に分っている。

最後に並んだ数字の列の、数の位を数えていく、一、十、百、千、万、十万……それは五百万円を超える金額になっている。

通帳の最初の金額は六百万円を超えており、そこから幾らかずつが引き落とされて現在の金額に至っている。

真次郎の金銭感覚は逮捕される以前の、昭和三十年代のままである。当時の物価からすれば、五百万円は途方もない金額である。

……こんなに金があるのか、俺の金が、これは刑務所で四五年間働いていた賃金なのか、こんなにあるというのか。

「……な、なんでこんなに……こんなに俺に、金が、あるんだ……俺は、何をして、こんなに金を、溜めたのか……」

驚いている真次郎に町倉が説明する。

「私も事情はよく知りませんが、五十年前に相沢さんが捕まって刑務所に入られた時に、持っていらした預金通帳に二百万円の貯金があったそうです……」

……逮捕された時、俺に二百万円も貯金があっただと？……一体俺は、どうやってそんな大金を貯金することが出来たんだ。それとも、俺が犯した殺人と、その金とは何か関係あるのか。

「それを長い間銀行に預けているうちに利息がついて、バブルの頃は景気が良かったからですから倍くらいになって……」

……バブルって？ それは何だ？

「……それと相沢さんが長年勤められた刑務所での作業報奨金というのが二百三十万円くらいあったんです」

町倉の話を聞いている真次郎は、放心した様に考えに浸っている。「相沢さん。私は家庭裁判所の方から命令を受けて貴方の財産を管

理していますから、貴方の為に必要な経費だけをそこから出して大切に使ってるんです。ですからご心配なさらなくても大丈夫なんですよ」

その言葉が真次郎には何か全く胡散臭い、信用出来ない言葉に聞こえてくる。

「は、判子……は？」

「はい？」

「判子だ。ここに……押して、ある。コレと……同じ判子」

と真次郎は通帳の最初のページに押してある届け出印の印影を指差して言う。

この通帳の金を管理するには、ここに押してある印影と同じ印鑑がなければならぬということを潜在的に覚えている。

「それは……」

「何処？ にある……？ 判子はある、のか……？」

「は、はい、そりやありますけど」

「見せろ」

「はい？」

「見せろ……よ、俺のだろ？」

「いえ、でも」

「早……く判子を、出せ」

真次郎は左手を出して催促する。

「いや、大丈夫ですよ。相沢さん。判子は私が持ってますから」

「いいから！ 出せよ！」

「……」

「出せ！ 判子を！ 出せよ……コラアーっ！」

まるでヤクザが恫喝している様に叫び、激しくテーブルを叩く。バン！ バン！ バーン！ そうしながら、そんな自分に驚いている。

……コレも俺なのか。俺の中に、こんな俺もいるのか……。だがそれと同時に、自分の中から蘇えってくるエネルギーの様な

物を感じている。それは生命の炎とでも言った物だろうか。

思いがけない真次郎の迫力に圧倒された町倉は、仕方なく鞆の中から印鑑の入ったケースを取り出し、真次郎に渡す。

真次郎はそれをもぎ取るとテーブルに押し付けながら左手で器用に開き、印鑑を取り出す。それは年季の入った、見るからに何十年も前に作られた印鑑だということが分かる。顔に近付け、その印面と通帳の印影とを比べて見る。

「……どうですか、同じ判子でしょう？ 納得されましたか？」

と言って町倉が真次郎から印鑑を返して貰おうとすると、真次郎はその手を跳ね除ける。そして通帳と一緒にパジャマの懐に入れてしまう。

「ちよつと、相沢さん。それは大事な物なんですよ。失くしたりしたら大変ですから。ねっ、私が保管しておきますから、ね、返して下さいよ」

取り戻そうとする町倉の手をバシバシと叩く。

「うるせえ……俺の……俺の金だろう！ ふざけんな……俺のだ！」

「ちよつと、相沢さん」

取り戻そうとする町倉は真次郎の左手をつかみ、真次郎はそれを払いのけようとして暴れ、町倉の手を叩く。二人はつかみ合いになる。

「まさか、こんなに回復するなんて、ちよつと野崎さん」

「いいです。大丈夫ですよ町倉さん」

と言って野崎は側に来ると、無理に取り上げようとする町倉の手を制する。

「快復したといっても、飽くまで一時的なことですから。そう長くは続きませんから。今は薬が効いて停滞していますけど、もう少し経てば認知がもつと進行して、そうしたらもういくら薬を飲んでも効果はなくなりますから。お金のことも解らなくなってしまうですよ」

「そうですか……」

野崎の言葉に町倉は諦めて手を放すと、まるで今までは別人を見ている様な目で真次郎を見つめ、改めて真次郎の快復ぶりに驚いている様子である。

真次郎は思う……刑務所の労働が四五年間で二百三十万円。でもその前に、刑務所に入る前に自分がしていたという貯金が二百万円……それは何をして稼いだ金なんだろう？ 俺は大会社の社長でもしていたというのか……。

しかし、この後見人の町倉という男は怪しい。今まで俺が何も分からなくなっているのを良いことにして、俺の金を管理しているといいながら勝手に俺の金を自由にしてきたのではないのか……。そう思うと、何かメラメラと腹の立つ思いが沸き上がってくる。これも暫く忘れていた感覚である。

「もう俺の金を……お前の……好き勝手に、させないからな！」
「……はい？ 何を言ってるんですか、好き勝手になんて出来る訳ないでしょう？ いいですか相沢さん。私は裁判所から依頼されてですねえ……」

「冗談じゃねえ……テメエ、人の金かすめ……取ろうと思いやがって、老いぼれと……思って、舐めんじゃねえぞ！」

その言葉にはさすがにムツとした様に町倉は目付きを厳しくして言う。

「ちよつと、落ち着いて下さいよ。いいですか、私はこんなことしても何の得にもならないんですよ。それなのに……」

「帰れっ、バカ野郎！ 俺の金だ……お前なんか……ビタ一文、やらねえからな！」

そんな乱暴な物言いが、自然に口から流れ出てくる。

今までもろくに話も出来なかった真次郎が、まるでゴロツキかヤクザの様に啖呵を切るのを見て、町倉はついにポカンと口を開けたまま黙ってしまう。

そう言いながら真次郎自身も、そんな言葉を吐きだしている自分に驚いている。

「町倉さん。今日のところは仕方がないですから……」

と野崎が声を掛け、町倉に帰る様に促す。

「は、はあ……」

と言いながら町倉が席を立つと、野崎が真次郎に背を向けて、聞こえない様に小声で話す。

「大丈夫ですよ。また折を見て取りあげておきますので……」

「そうですか、解かりました。それじゃ、宜しく願います」

と言うと、町倉を連れて野崎も部屋を出て行く。

真次郎はそれらの会話を全て理解している。

「俺には、今五百万円の貯金がある」

新たに真次郎の日記帳に書かれる項目が増えた。しかし何故刑務所に入る前に二百万円もの大金を持っていたのかは分からない。それまでに働いて溜めていたのか？ では一体どんな仕事をしていたと言うのか。五十年前の当時にそんな大金を溜めるには、それこそ会社の社長か何かをしていたとしか考えられない。

刑務所に入る以前にしていた仕事の記憶と言えば、何か荷物を積んでトラックを運転していたことくらいしか思い浮かばない。だがトラックの運転手ごときでそんな大金が稼げるとは到底思えない。そうではないとすれば、一体何をして手に入れた金なのか。

……もしかしたら……俺は誰かを殺して、その時に金を奪い、逮捕される前にその金を銀行に入れていた……ということなのかもしれない。

俺はそんなに悪い奴だったのか……でもだとしたら、どうして警察に捕まった時にその金は没収されなかったのか……何か上手い手を使って誤魔化したとでもいうのか……解からない。

だがいずれにしても、コレが今俺の金であるということは紛れも無い事実なのだ。コレは俺にとつて有力な力になる筈だ。もう絶対に奪われてはならない。取られない様に大切に持っていなければ……

…。
真次郎は、これからはその通帳と印鑑を常にパジャマの懐へ入れて、片時も離さずに持つていようと思う。夕食の時も、ベッドへ入ってからもずっと懐の中に入れておくことにする。

その日の深夜、何か違和感を感じて目を開けると、暗い中で何者かが、恐らく職員が掛布団を剥がし、パジャマの懐に手を入れようとしている。

「何すんだー！ ふざける、なあ…泥棒ー！」

真次郎は左手でその男の手を払いのけ、叩いてやろうと手を振り回すが届かずに宙を切ってしまう。

「チッ…！」

と舌を鳴らすと職員の男は諦めて部屋を出て行く。

危なかった…通帳と印鑑が無事なのを確かめて、懐をかき合わせ、掛布団を被って身を丸くする。

その翌日は週二回の入浴のある日である。真次郎は脱衣室へと車椅子を押して行かれ、いつもの様にパジャマを脱がされていく。

だが、職員がパジャマの上着を脱がせようとしても、真次郎はそこに入っている通帳と印鑑を守る為に、頑なに胸を抑えた左手を外そうとしない。

「さあ、相沢さん。お風呂に入りますからね、寝間着を脱がないと入れませんよ」

「…！」

「相沢さん…！」

「入ら…無い、風呂は、入らなくていい…！」

「そんなこと言って、入らなかつたら不潔になりますよ、さあダダ捏ねてないで手を離して下さいよ」

強情な真次郎に苛立ってきたのか、職員の語調が厳しくなり、真次郎の左手を外そうとする手に力が入る。

「さあその手を離して！ 相沢さん！」

「う、う〜く止める！ 泥棒〜泥棒〜！」

意地でも手を放そうとしない真次郎は、左手を引き剥がそうとする職員の手を噛み付いていく。

「痛っつ……つたく。もう本当にお風呂入れなくなりますよ！」

そこへ騒ぎを聞き付けた沙奈が入ってくる。

「相沢さん、どうしたんですか？」

駆け込んで来た沙奈に、真次郎に手を噛まれた職員が答える。

「この業突く張りのジイサンがよ、どうしても通帳と印鑑を離そうとしないんだよ」

「相沢さん」

と沙奈に見つめられると、真次郎には無視することが出来ない。

「相沢さん、そんなに大事な物なんでしょう。お風呂に入ってる間は私が預かっておきますから、それでどうですか？」

「……」

「それで、お風呂から出て来たらもう一度お返ししますから、お約束しますから。私のこと信じて貰えませんか？」

「……」

真次郎は考える。沙奈の言うことは信じる事が出来る。しかし、沙奈に預けている間に、他の職員が沙奈から取り上げてしまうということも考えられるではないか。

逡巡しながら沙奈を見つめていると、何か思い立ったのか沙奈は部屋の隅の棚へ行き、スーパー等で商品を入れるビニール袋を持ってくる。

「それじゃ、相沢さんの通帳と印鑑をこのビニールに入れて、水が入らない様にしっかり口を縛っておきますから、それに紐をつけて首から下げたらいかがですか？ それなら入浴の時もずっとご自分で持っていることが出来るじゃないですか」

「……」

暫く考えて、沙奈の顔を見て真次郎は頷く。懐から通帳と印鑑を

ースを出し、差し出されている沙奈の手に乗せる。

沙奈はそれをビニール袋に入れると口を堅く綴じ、紐で縛って真次郎の首に下げる。

そのまま職員は真次郎のパジャマを脱がせ、下着のランニングも剥ぎ取る。

「はいはい、良かったね相沢さん。これで誰も貴方のお金は取れませんからね」

と忌々し気に言いながら、全裸になった真次郎を入浴用の椅子に移乗させ、ガチャガチャと音を立てて浴室へと押して入って行く。

3

真次郎は沙奈に車椅子を押されながら施設長室に連れて来られる。「どうしたんですか施設長。ここに呼んでくれるなんて久しぶりじゃないですか」

野崎は黙って微笑むとドアに鍵を掛ける。そして沙奈の側へ来て肩を抱くと、顔を近付けてキスしようとする。

咄嗟に沙奈が顔を避ける。

「あれ、どうしたの？」

と野崎は不思議そうに沙奈の顔を見る。

「だって、相沢さんがいるし」

「またそれか、心配するなって大丈夫だよ」

「だって本当に最近を意識がハッキリしてるから。周りのことも全部理解してるんですよ」

そんな沙奈の言葉にひるみもせず、野崎は沙奈の両肩を抱いて顔を近付けてくる。

「ふん、そんなの本当に解かってたって、気にしなくたって平気だよ」

「それに……施設長は暫く私のこと避けてたじゃないですか」

「そんなことないよ」

「じゃ、今日はどうして急に呼び出して下さったんですか」

「……」

「やっぱり何か特別な用事があったからなんですよね」

「……まあね、君にしか頼めないことがあったから」

「何ですか？」

「こないだ相沢さんが後見人の人から通帳と印鑑を取り上げちゃって、それからずっと自分で持ったまま取ろうとすると暴れるだろ。

それでこの施設の利用費とか相沢さんの為に必要な経費の支払いが出来ずに困ってるんだよ。でも沙奈ちゃんの言うことなら相沢さんも聞き入れてくれるんだろう？ だから君から相沢さんによくお話しして、通帳と印鑑をこちらに戻してくれる様に頼んで欲しいんだよ」

「そんな、相沢さんのお金を取ってどうするつもりなんですか？」

「取るって？ ヘンな言い方するなよ。何も横取りする訳じゃないんだから」

「だってこの前、後見人の人と何か相談してたじゃないですか」

「相談って、そりやこの施設の相沢さんの利用費だってあの通帳から払って貰わなきゃならないんだから」

「それならここでちゃんと相沢さんに説明すれば解って貰えるんじゃないですか。最近相沢さんは物事をちゃんと理解出来るようになってるんですから」

「そんなの川柳先生が薬の処方を変えたからだろう。一時的にそうなってるだけだよ。どんな薬だって認知症の進行を止めることは出来ないんだから」

「でも今は解るんだから、きちんと説明して理解して貰えば良いじゃないですか」

「そんなの無理だよ。だって相沢さん、コレは俺の金だから誰にも渡さないって、その一点張りだからな」

「相沢さんは、施設長と後見人の方が一緒に考えてることくらい薄々気が付いてるんですよ」

「何だよ考えてることって」

「……それじゃ言いますけど、施設長は後見人の人と相談して、介護の経費とか言って相沢さんの通帳から沢山お金を使わせて、途中で金額を操作して差額を取ってるんじゃないんですか？」

「な、何言ってるんだよ、そんなことしたら只じゃ済まないだろう」
慌ててそう答える野崎の様子には、明らかに狼狽した様子が伺える。

「……」

「なあ、俺がそんなことする訳ないじゃないか」

「だって、信じられないんだもん」

「どうしてだよ」

「……施設長は、本当に奥さんと別れて私と結婚してくれる気あるんですか？」

「何で急にそんな話になるんだよ」

「だって、全然その話進めてくれないじゃないですか」

「それと今話してることは関係ないだろう」

「……」

「いいかい沙奈ちゃん。離婚して君と一緒にするにしても、その為にはお金が必要なんだよ。女房に慰謝料だって払わなきゃならないし。子供だって離婚したらそれでハイさよならって訳にもいかないんだから。成人するまでは養育費とかも払わなくちゃならないんだからね」

「だからその為に相沢さんの持つてるお金を使おうっていうんですか？」

「そんなこと言ってないだろう」

「でも相沢さんの為に必要な経費だとか言って、後見人の人と結託して実際に掛かる費用に上乗せして差額を盗んでるんじゃないんですか」

「人聞きの悪いこと言うなよ」

「だって、施設長には今だって借金があるんでしょう」

「それはあるよ、でもそれとこれとは別問題だろう。まあでも確か

に、それを先に解決しないと離婚の話も先へ進めることは出来ないけどな」

「やっぱり狡い」

「どうして！」

「だって私が相沢さんから通帳を取り上げないと、私との関係も終わってしまうって脅迫してるみたいじゃないですか」

「そんなこと言ってないよ」

「言ってる」

「言っていないっ！」

「嘘……」

「嘘なんかついてない」

「いいえ、私解ってます」

「だったら何て言えば良いんだよ！」

「……」

「それなら沙奈ちゃんの方こそ、もう俺と一緒にならうって気はないって言うのか？」

そう言われて、沙奈は言葉に詰まってしまった。

「いいかい、それでなくとも今俺は大変なんだよ。二年前に起こした事故の賠償金があと二百万円。それは金融業者に借りてて女房にも内緒にしてる」

「それだってどうせ奥さんに言えない様な状況で事故を起こしちゃったから内緒にしてるんじゃないんですか？ 誰か奥さんに秘密の女の人と一緒にいる時に事故っちゃったから内緒なんでしょう？」

「……」

野崎は忌々しそうに頭を掻きむしりながら、遂には開き直った様に溜め息をつく。

「だからどうだって言うんだよ、施設長って言ってもねえ、他の職業に比べたら給料が安くてどうにもならないんだよ。兎に角もう支払いがギリギリで間に合わなくなりそうだし。もし間に合わなくなったら君との結婚どころじゃない、大変なことになってしまうんだ

よ。いいかい、コレは全く俺の不運なんだよ。何で俺がこんな目に遭わなきゃならないんだって思うよ……」

野崎の言葉が真次郎の脳裏に響く「何で俺がこんな目に遭わなければならんだ……」真次郎もいつかそう吐き捨てた。そしてその横では麻里恵が、悲しそうな顔をして真次郎を見つめている。

「いいかい、もし相沢さんが亡くなれば、残ったお金は全てこの施設に寄付するってことで話はあるんだ。そうなればどうにでもして俺が自由に出来る金になるんだよ。そうすれば事故の賠償金だって返せるし」

そう話す野崎の顔を沙奈は凄い目をして睨んでいる。

そんな沙奈に訴える様に野崎が言葉を繋ぐ。

「だってこんな稼ぎの少ない仕事じゃ何年経ったって借金なんて返せっこないんだぜ。正直なところ早く相沢さんの認知が進んで死んでくれれば良いと思うよ」

「!……そんな、酷いですよ」

「ふん。だってね、沙奈ちゃんよく考えてごらんよ。そもそも今あるこの相沢さんのお金だって、半分は刑務所に入る前に持ってたものなんだぞ。今から五十年前の二百万っていったら物凄い大金だぞ、そんなの相沢さんが悪いこととして誰かから取ったに決まってるじゃないか」

「だからってそれを野崎さんが取ってもいいってことにはならないでしょう」

「だからそんなことしないって、飽くまでも施設の為に寄付して貰うんだから」

「酷い……」

「もう話にならないな」

「やっぱり……嘘なんですよね、奥さんと別れて私と結婚しようだなんてこと、考えてないですよね」

「もうやめてくれよ、ウンザリなんだよ!」

「最初は相沢さんみたいに優しくかったのに。もう奥さんとは別れた

いって、私と一緒にになりたいって言ったのに。私のことずっと好きだって言ったのに！」

その声は麻里恵の言葉として真次郎の胸に突き刺さってくる。「私のこと、ずっと好きでいるって言ったのに！」

「ふっ……子供じゃあるまいし、何をいつまでも解んないこと言ってるんだよ。いずれにしたって、相沢さんが通帳握ったまま施設の利用費を払わないって言うんなら、ここから出て行って貰うしかないんだからな」

「そんなことしないでしよう」

「なんで？」

「だって、施設長は元受刑者で認知症になった相沢さんを受け入れたことで、この施設の評判を良くしたかったんでしよう？ 全部計算づくでやってるのに、施設にとってマイナスになることなんかする訳ないじゃないですか。それに一番の目当ては相沢さんの持つてるお金なんだから……」

そう言われて野崎の顔がみるみる怒りに震えてくる。

「うるせんだよ！ もう黙ってる！」

そう怒鳴ると野崎は乱暴にドアを開くとバンと叩き着け、部屋を出て行ってしまふ。

瞬間シンとしたかと思うと、真次郎の耳にうううううとくぐもった声が響いてくる……麻里恵が泣いている……いや違う。泣いているのは麻里恵じゃない、沙奈だ。でも真次郎の中では麻里恵が泣いている……六畳一間のアパートで、麻里恵は真次郎に背を向けて泣いている。小刻みに肩を震わせて。

……可哀相に、俺が泣かせたんだ……ごめんよ麻里恵、ごめんよ。俺はちっとも優しくなかったね。麻里恵のこと泣かせてばかりいて、俺は悪い男だったね……そうだ。悪いのは俺だ……解ってる。解かっているんだよ……でも、男には譲れない時もあるじゃないか……ごめんよ麻里恵。お願いだよ。もう泣かないでくれよ、お願いだから……。

やがて麻里恵の泣き声は、また現実の沙奈が泣いている声に戻っていく。

「沙奈、沙奈ちゃ……ん。どうした、の？　大丈夫かい？　可哀相に……大丈夫、かい？」

「……うっ……うっ……うう……やっぱりそうだった。ずっと好きでいるって言ってたのに……やっぱり嘘だった……そんなの分かってた。でもやっぱりハッキリ言われると、悲しいですよ……あんなに優しくかったのに……あんなに優しくしてくれたのに……ううううううう……」それはまた時空を超えて、真次郎の中で麻里恵の言葉になっていく。

畳に座り、顔をうつむけて麻里恵が泣いている。

「……酷いわよ真次郎さん……あんなに優しくかったのに、もう私のこと何とも思っていないんでしょう？　私のこと、捨てないでよ、捨てないでよう。うっううううううう……」

可哀相に、俺が泣かせた。俺のせいだ……。

「……ごめんよ、泣かない、で……もう、泣かない……で、おくれよ、俺……が、悪か……ったんだよ、ごめんよ……」

と言いながら真次郎は左手で沙奈の背中を摩っている。

「沙奈さん……俺はね、君に、お世話になったから、恩返しが、したいと思っ……るんだよ、俺は、もうこの……先、長くないから、自分の、持つてる、お金を使って、しまいたい、んだよ……だから、君の……お祖母ちゃんの為に……俺の金を、使って欲しい……」

「えっ？　そんな、どうしてですか？」

「俺には……家族も無いから……君と、お祖母ちゃんの、力になりたい、んだ……。もう命が、短い、俺……の願いを、聞いてくれ、よ」

「そんなのいけませんよ相沢さん」

「どうして……だい？」

「だって、そのお金はこれから先まだ相沢さんが生きて行くのに必

要なお金じゃないですか」

「俺……はもう、生きて、いたいと……思わない……俺は……麻里恵に、酷いこと、を……して、しまったから……麻里恵に、罪滅ぼし……を、したいから……」

「でもね相沢さん。私のお祖母ちゃんは相沢さんの思っているマリさんとは違うんですよ。この前実家の母に電話してみたんです。もし相沢さんの言うことが本当なら、母が相沢さんのこと何か知ってるかもしれないと思って。それからお祖母ちゃんにも、相沢真次郎さんっていう人のこと知ってるかどうか聞いてみて、そしたらお祖母ちゃんもそんな人のことは知らないって言ったらしいですから」

「……え、そんな」

そう言われてしまつては返す言葉もない。だが真次郎の心の中には、そんなことでは誤魔化されない確信がある。何故そう思うのかと問われても、説明する術もないのだが。

「だって、相沢さんのいう麻里恵さんて、苗字も分からないんですよ？ 何処で知り合ったのかも覚えてないんでしょう？ お祖母ちゃんは産まれてからずっと宝塚市で暮らしてましたけど、相沢さんもあの辺りにいたことあるんですか？」

「あ、ああ……それは、こないだ、後見人の人……が言ってた。俺……の家族も、神戸にいた……って」

「本当ですか？ でも神戸って言っても広いですからね、やっぱり人違いだと思いますよ。だって相沢さんがそんなに強烈に覚えてるなら、もしうちの祖母がその麻里恵さんなんだとしたら、祖母も相沢さんのこと覚えてる筈じゃないですか」

「……」

「だからやっぱり、違う人なんだと思いますよ」

「そ、それで……も、いい。それでも、いいんだ……君のお祖母ちゃん……が、麻里恵……じゃなくても。俺は君に……お世話に、なった……お礼がしたい……から、俺の金を……お祖母ちゃんの為……」

…に使って欲し…：いから。頼むから、お願いを聞いて、くれよ…
…」

「そんなこと…」

「でも…：それには、ひとつ、お願いが…：ある。俺を、君のお祖母ちゃん…：とところへ、連れて行って。会わせて…：欲しい」

「えっ」

「お願い…：だよ沙奈さん。俺は…：麻里恵に、会いたい。俺は…：行きたい。神戸、桜華園…：お願いだから…：連れて行って…：おくれよ…」

「そんな、何言ってるんですか、今の状態で相沢さんを神戸までお連れするなんて、どんなに大変なことだと思います？ 私にそんなこと出来る訳ないじゃないですか。それに施設の外出許可だって取れないと思いますよ」

「…」

4

…：俺は、どうしても生きてるうちに麻里恵に会わなければならぬ。それには、沙奈さんが連れて行ってくれない以上、自分で行くしかない。それには、ここを抜け出してひとりで行くしかない。

…：それにしても、俺は一体、どんな男だったのだろう。昔何処で何をして、どんな仕事をしてたのか…：思い出すことは出来ない。でもこう思う。俺は、自分の意志がハッキリしてさえいけば、どんなことだろうと一人で行動出来る。根拠はないが、俺はそういう男なのではないかと思う。

麻里恵に会うことさえ出来れば、俺が誰を殺して刑務所に入ったのかも、何故殺さなければならなかったのかも、全てが解るような気がする。

いずれにしても、このままここで生活していても何も変わることはない、そのうち朽ち果てて死んでお終いになるだけだ。でも俺は

まだ、辛うじて歩ける。この施設の廊下を歩けるといふことは、外へ出たって歩けるってことだ。それに俺には今五百万の金がある。

この足と、金があれば……行けるかもしれない、神戸まで。でもその前に、ここから出なければならぬ。でも普通に「俺はここを出ます」と言っても、この連中は誰も俺を一人で行かせてはくれないだろう。

だから……逃げるしかない。誰にも見つからずに。でも、そんなことが出来るだろうか。

まず第一に、神戸の近くにあるという桜華園という旅館の住所を調べなければならぬ。沙奈さんに聞いても教えてくれないかもしれない。ではどうすれば良いか、それは電話を掛けて聞くのが良いと思う。昔もあつた、電話番号案内というものに掛けて、それから神戸の桜華園という名前を言えば教えて貰えるのではないだろうか。

電話番号案内の番号は何番だったか……警察は百十番。救急車は百十九番、確か番号案内の番号もそんな三ケタの数字だった気がする。だが思い出せない。コレは誰か職員に聞いて教えて貰うしかない。

そして、その電話を何処で掛けるかが問題だ。施設の廊下には公衆電話が置いてあるが、電話に入れる小銭が無い。若い職員がよくポケットから出してコチョコチョいじっているのはどうも無線の電話機らしいのだが、アレを貸して貰うことは出来ないだろうか。

そうだ、沙奈さんとは全く接点のない職員を捕まえて、個人的に思い出があつて、どうしても桜華園という旅館の電話番号を調べたいのだと言えば、貸してくれるかもしれない。

真次郎は若くて比較的いつも優しくしてくれている男性の職員を捕まえて、その旨を頼んでみる。

するとその職員は「ええ？ 住所が知りたいんですか、でもそんなの知ってどうするんですか？」と訊ねてくる。

「は、ハガキを、出したい……から」と真次郎は言う。

「へえ、ハガキですか、良いですよ解りました。え、と神戸の近く

にある……桜華園……ですね」

と言って、その職員は電話を掛けるのではなく、その小さなメモ帳の様な機械の画面を指でなぞったり指先でチョンチョンと突いたりするうちに「ハイ、コレですね」と言って真次郎の前に画面を出して見せる。

どうやらその小さな画面に桜華園という旅館の写真や住所が載っているらしいのだが、真次郎には小さすぎてよく見えない。

「あ、あの、お願い……住所を、教えて……貰えない、だろうか」

「住所ですか、えくとねえ、兵庫県宝塚市玉瀬……神戸って言うても宝塚市の山の中の方みたいです」

「あ、ありが……とう。住所……を、メモに……」

と言って真次郎は用意しておいた紙とボールペンを取り出し、桜華園の住所を書いてもらう。

「兵庫県、宝塚市……玉瀬……」

……ここに、桜華園という旅館があつて、麻里恵が今も働いている……いや、別人かもしれない。でも、そうかもしれない。確信はない……でも、俺はどうしても、ここに行かなければならない。他に選択の余地は無い。

しかし、果たしてひとりでそこに辿り着くことが出来るのか。俺のこの身体で、行けるだろうか……全く自信がない、というより無理ではないのか。いや、それでも俺は、行くしかない。

「は、原先生、お願い……しま、す。またリハビリ……をして、下さい……」

「分かりました。相沢さん。またやる気になられたんですね。良かったですよ」

「お、俺は……もつと自分、で歩ける……ように、なりたい……」

「はい、それは頑張って毎日続ければきつとなれると思いますよ」

「は、はい……頑張ります……」

その日から真次郎は、理学療法士の原先生の元で、再び熱心にリハビリに励むことにする。

原先生が言うには、頑張れば壁に手を着いたり歩行器を使ったりもせずに、杖を使って一人で歩ける様になるというのだ。

……俺はどうしても、一人で歩ける様にならなくては、ひとりで何処へでも行ける身体にならなければならない。そして遠くまで行ける体力を養うのだ。

沙奈の祖母が本当に麻里恵であるという保障は何も無い。やはり単なる思い込みなのかもしれない。でも行かずにはおれない。

……麻里恵という女はきつと、俺の人生だったのだ。そうに違いない、でなければ、今こんなに強い衝動に駆られる訳がないんだ。

ここから脱走する計画は周到に用意しなくてはならない。またこの前の屋上の時の様なことになれば、更に俺に対する警戒が厳重になって、それこそ身動きが取れなくなってしまうに違いない。

ではどうすれば良いのか、取りあえずは職員たちが、俺が脱走なんていうことを考えているとは思いもしない様に、また前の様に何も解らないフリをして、油断する様にしておこう。

決行するのはやはり夜中が良いと思う。職員たちに見つからずに部屋を出て、エレベーターに乗って一階に降り、表へ出るのだ。

どうにかして通過しなければならぬ難関は沢山ある。まずは屋上から飛び降りようとして見つかって以来、ベッドに敷かれているセンサー付きのマットだ。コレは寝ている状態でスイッチを入れられると、起き上がった時に作動して何処かへ知らせる様になっている物だから、夜中でもベッドから離れればすぐに職員が飛んで来てしまう。

電源を抜いてしまえば作動しなくなるのかもしれないが、勝手に抜くとバレてしまうかもしれない。

もうひとつの手としては、寝ている人間の重みが無くなることで反応すると思われるので、自分に変わる何か重みを乗せて、起きてもまだ人間が寝ている様に機械が勘違いさせることが出来れば良い

のではないかと思う。

夜中に見回りに来る職員の話は、一度見回りに来ると次の見回りまで二時間くらいの間があることは分かっている。その来ない間のタイムリングを見計らって外へ出れば良い。

そして、コレが一番難しいと思われるのは、真次郎はここではないつも着の身着のままパジャマしか着ていないので、このまま外へ出たのでは往來の人に見られると不審に思われるかもしれないということだ。

なので出来れば、外から通って来ている職員の着替えが置いてあるらしい詰所に入って、ロッカーから職員の着て来た私服を盗んで行くことが出来ないだろうかと思う。

夜中とは言えいつも二人の職員が常駐している。だがきつと昼間と違って、人数は少ないし、ずつと起きているのはどちらか一人だけなのではないだろうか、ならば側に隠れてチャンスを見計らって忍び込み、ロッカーから衣服を盗んで行くことが出来るかもしれない。だが、もしそれが無理だとしたら、パジャマのまま外へ出て行くしかないと思う。

もし外へ出て銀行に行くことが出来れば、この通帳と印鑑で金を下ろすことが出来るだろう。そうすれば何処か洋服を売っている店に行つて服を買うことが出来る。

まず誰にも見つからずにエレベーターに乗ることが出来れば、一階までは行くことは出来る。そして、リハビリの為に中庭に出た時に通つたドアへ行く。

ドアは原先生が機械の数字を押すのを見ていた「1234E」の番号を押せば開けることが出来る。中庭に出ることが出来れば、リハビリで歩いた時周りに建っている建物の中に外側へ出る道が見えたから、あそこを通つて行けば。敷地の外へ出られるに違いない。

しかし、そこにはまだ行って見ないと解からない点がある。まずは、職員に見つからずに一階まで降りられたとしても、夜中に一階のフロアーの様子がどうなっているのか解らない。もしかした

らずつと電気が点いて警備員等がいるのかもしれない。

そして建物の外に出られたとしても、この施設の敷地の広さがどれくらいなのか解からないから、敷地を出るまでどれくらいの距離があるのかも分からない。

それに、敷地の出入り口にはきつと門がある筈だ。高い門が閉まったまま鍵が掛けられていれば、外へ出ることは出来ないかもしれない。

考えてみると、決行するには無謀な要素が多すぎるのではないかと思う。でも一度失敗したとしても、また次があるはずだ。そうだ。例え何年掛かったとしても……。

何年掛かったとしても……その感覚に、真次郎は何か合致する深い記憶を感じる。いや記憶というよりは、長年持っていた感覚というか。何年掛かったとしても、きつといつか……そうだ。俺は何かをずっとそう思って生きて来た気がする。でもそれが具体的にどういうことだったのかは解からない……でもソレもコレも、神戸へ行つて麻里恵に会うことが出来れば。解るのではないかという気がする。

何を根拠にといわれても解からない。本当にそうなのかという確信も無い。そもそもこんな脱走計画が成功する筈は無いのかもしれない。でも、もう火が点いてしまった衝動を止めることは出来ない。俺はこのまま進んで行く。それより他は無い。でも何か、俺の中に生きていくということが戻つて来た気がする。

真次郎は熱心にリハビリに励む。歩行器につかまっつての歩行は、かなりの早足でも進める様になり、歩幅も広くなつてきている。そんな様子を見た原先生は「それでは次は杖を使って歩く練習をしてみましよう」と仰る。

初めの杖は地面に突くのが一本ではなく、杖の先が4本に枝別れしており、安定性の高い「四点杖」というものを使つてみるという。その杖は左手一本で体重を掛けてもかなり安定性がある。そこへ

しつかり体重を掛け、左足を前へ踏み出す。そして後ろに残った右足をズルズルと引き寄せ、杖を突き出す。また左足を前へ踏み出し、右足を引き寄せる。それを繰り返して、どうにか一歩ずつヨロヨロと歩く。

ヨロめいて、バランスを崩しそうになると原先生がガツシと抱き抱えてくれる。

「大丈夫ですか？ 最初は少し杖の感覚を覚えるだけでも良いんですよ」

原先生が忠告しても、真次郎は額に汗をかいたまま拭おうともせず、再び杖に力を入れてバランスを取り直し、ブルブルと震えながら一歩、またもう一歩と杖を突き出し、左足を前へ進めて行く。

ガツチャツと杖を突き、左足をタツと踏み出す、そして右足を引き寄せる、ズズツツ……。

ガチャツ、タツ、ズズツツ……ガチャツ、タツ、ズズツツ……。額に汗を浮かべながら、真次郎は必死の形相で前へ前へと進んで行く。

「もうそんなに無理しない方が良いんじゃないありませんか」

余りにも頑張る真次郎の様子を心配して、原先生が声を掛ける。だが真次郎はまるで耳に入らないという様が続ける。杖を前に突き出しては歩いて行く。

……行かなければ、俺は行かなければならない……。

原先生はそれを半ば呆れる思いで見つめている。

左腕を鍛えることにも努力する。左半身しか身体を動かすことは出来ない。だから歩くことも、洋服を着替えたり、物を持ったり、物を食べたり、その他の生活の何もかもを左手と左足だけで出来る様にならなければならぬ。それは自分を取り戻す為に、ひとりで麻里恵に会いに行く為に。

真次郎は時間は掛かるがトイレへもひとりで行き、自分で用を足

すことが出来る様になった。

前まではオムツの中に垂れ流すに任せており、職員にオムツを替えて貰っていたのだが、今はオムツではなく紙で出来ている吸水性の高いリハビリパンツと呼ばれる物を履くようになり、失禁することも無くなった。そのことにも職員たちは驚かされる。

川柳医師が処方する薬の新しい比率の効果なのか、並行して行っているリハビリによる身体活動の活発化が脳の機能をも活性化させているのか。真次郎の頭脳は以前より一層の明晰さを取り戻している。身の回りで職員たちが会話している内容や、フロアーで観るテレビのニュースの内容等もほぼ理解出来る様になっている。

そこで見せられているテレビの画像には驚かされることばかりである。

その画面の大きさは、昔の映画館を思い出させる。映像は写真の様に鮮明であり、まるで自分もそこにいる様な臨場感がある。

そこに映し出されている街並みや走る自動車。若者たちの姿や言動を見ていると、何か見知らぬ未来の世界に来たような感覚である。

ただ、真次郎にはそれがテレビであるということが分り、そこに映っているのが同じ日本人で、話している内容も理解出来ている。なので驚かされることが多くとも、コレはかつて自分が生きて来た時代と地続きにある現代なのだという事も理解している。

そして、何より真次郎がテレビの画面から知ろうとしていることは、この施設の外の世界の様子である。自分が病院で頭が呆けてしまい、正気を失っていたのは十年くらいの間のことなのだろうという事は解かっている。だがその前に四五年間という、世間とは隔絶された刑務所暮らしの期間がある。その間に自分は世の中の移り変わりから取り残されていたのである。

その間に世の中はどう変わっていたのか、普通の人たちは今どんな暮らしをしているのか……。そんな興味で真次郎はテレビに見入っている。

何より一番に着目するのはニュースやドキュメンタリー番組で流

れる一般の人々の様子や、ドラマで描写される生活の様子である。親や兄妹がいて家で一緒に暮らしている。父親は仕事に行き、子供は学校に行く。そこには友達がいたり、恋人が出来たりする。それ等はきつと、真次郎が刑務所に入る前に暮らしていた頃と基本的には変わっていないのだと思う。見ていると懐かしい感じがする。確かに外の世界はこんなだったと思う。

真次郎は原先生を呆れさせる程の執念でリハビリに打ち込み、遂には練習を続けていた四点杖を卒業し、一般的な一点杖で歩けるまでに回復する。そして毎日の職員たちの行動をつぶさに観察し、誰にも見つからずに施設を出る方法を考えている。

真次郎は出来る限り周到に計画を立てる。そしてその計画は実行に移せるまでに出来上がった。後はいつ実行するかである。

出来れば職員の私服を盗んで行きたいと思う。背丈が自分とほぼ同じくらいだと思われる職員の男に狙いをつけ、その男が大体何日置きに夜勤に入っているのか目星を付けている。実行する日はその男が夜勤に入っている夜にしようと思っている。

そして最も重要なのは天候である。外へ出ればひとりで杖を突いて歩いて行かなければならない。傘等は勿論持つことは出来ない。なので決行するのは雨の降らない、天気の良い夜でなければならぬ。

夕方の団欒の時間にフロアーで見ることの出来るテレビの天気予報に注目している。九月も終わり十月に入っても台風が発生して、日本に近付いているという予報が続いている。

台風が去るまでは待たなければならぬ。だがあまり延ばしていても冬になってしまう。まだ温かく軽装で身体も動き易い季節のうちに行かなければと思う。

そして遂にその夜が来た。台風も行ってしまい、もう新たな台風が発生しているという予報はない。今晚はずっと良い天気で雨の降る確率はゼロパーセント。そして洋服を盗む為に目を付けておいた浜矢という名前の職員が今日夜勤に入ることとも確認している。

真次郎は全ての準備を整えて、毛布を被り、寝たフリをして職員が最初の見回りにくるのをじっと待っている。

九時の就寝から二時間くらいが過ぎたのだろうか、パタパタと足音がして、職員が今夜最初の見回りに来る。ガラガラとドアを開けて入って来ると、懐中電灯の光が壁を過る。職員は歩いてカーテンの仕切りをそっと開きながら、それぞれのベッドに眠っている老人たちの様子を確かめていく。

当直の職員は二人いる。見回りはそれぞれが分担する部屋をひとりで回っている。入って来たのはそのうちのどちらかなのだろうか、真次郎は毛布を被っていないければならないので、それがあの真次郎と体型の似ている浜矢という名札を付けた男なのか、それとも他の職員なのか、男なのか女なのかも解からない。

その職員は他の三人の老人たちの様子を確かめると、真次郎のところへも来る。真次郎はじっと寝たフリをしている。スーツとカーテンを開けるとそっと毛布の縁を持ち上げ、真次郎の様子を確かめるとまた毛布を被せ、部屋を出て行く。

隣の部屋のドアを開ける音が聞こえてくる。少ししてそのドアが閉まると、またひとつ向こうのドアが開かれる音が小さく聞こえる。それを何度か繰り返すうちに音は聞こえなくなり、何の物音もしてこなくなる。

真次郎はそっと起き上がる。掛けていた毛布を左足で蹴り、足元へ押しやる。うっかりベッドから腰を浮かせるとシーツの下に敷いてあるセンサーが作動してしまうので、そのまま左手でベッドの脇に用意しておいた折りたたみ椅子を持ち上げる。真次郎の左腕は原先生にリハビリの時に掛かる負荷を上げて貰い、鍛えた成果でかなり力が入る様になっている。

持ち上げたパイプ椅子の縁とベッドの柵が当たってカーンと音が鳴る。ハツとして耳を澄ませるが、他の老人たちは静まり返ったまま反応はない。

そつと身体を脇へずらし、寝ていた場所に折りたたみ椅子を寝かせる。でもこれだけでは重みが足りないと思われるので、そつと腹ばいになってベッドの下に手を突っ込み、隠しておいた二つの水枕を引っ張り出す。それは部屋の入口脇にある戸棚にあるのを見つけ、水道の水をいっぱいに入れておいたのだ。タプタプと音を立てる二つのそれを、寝かせた折りたたみ椅子の上に乗せる。

それからそつと腰をずらしてベッドの縁に両足を降ろす。このまま腰を浮かせてベッドから降りた時、センサーが反応してしまえばそれまでである。

左足を伸ばして床においてあるサンダルを履き、ベッドの柵に立て掛けておいた杖を手取る。原先生からもう普通のステッキ状の一点杖でも充分に歩くことが出来るとお墨付きを貰っている。この杖は施設からお借りしている物だが、このまま持つて行こうと思う。床に杖を突き、ベッドに座っている自分の体重を杖の方へと傾けていく。

ここでセンサーが反応すれば、警報を聞いた職員が飛んで来るだろう……心を決めるとベッドから腰を浮かせる。脇に立ったまま暫く待つ。

……誰もやって来る気配はない。どうやら折りたたみ椅子と水枕の重みとで誤魔化したのだろうか。動かない右足を引き摺ってサンダルを履かせると、体勢を変えてもう一度ベッドの下に手を入れ、これも戸棚から盗んでおいた予備の毛布を引っ張り出す。

その毛布をベッドの折りたたみ椅子と水枕の上に乗せ、人型に盛り上がる様にして、その上から自分が被っていた毛布を被せる。全ての作業を左手だけで、しかも物音を立てない様に注意してやらなければならぬので時間が掛かる。だが今度見つかればそれこそ何処かに監禁されてしまい、身動きが取れなくなってしまうだろう。

そう思うとやはり慎重に行動しなければと思う。

これでパツと見には真次郎が毛布を被って寝ている様に見える。毛布を被って寝ていることを職員が不自然に感じない様に、ここ最近真次郎は毎晩寝る時に顔を出さず、毛布をスッポリ被って寝るようになっていた。

首からヒモで下げているビニール袋の中の通帳と印鑑を確かめる。それと若い職員に書いて貰った麻里恵が働いている旅館「桜華園」の住所が書かれたメモ。そして何故かは解らないが、気が付くといつも何処からか盗んではガリガリと削っているスプーンは、どうしても持って行かなければならないものだと思っている。何故かは解からないが、それが自分にとつてとても大事な物の様に思えるのだ。なのでそれも一緒に首の袋に入れる。

今夜は真次郎と体型の似ているあの浜矢という職員が当直している筈なのだ。だから今職員詰所のロッカーには浜矢の私服が入っている筈だ。これからこの部屋を出て廊下を歩き、始めは職員たちの詰所へ行つて、浜矢の衣服を盗むのだ。

ヨロヨロと杖を突きながら、ベッドの脇を離れてドアの側へ来る。なるべく音を立てない様に注意しながらそつとスライド式のドアを開く。

ガラ……ガラガラ……

ドアの隙間から顔を出し、暗い廊下の両側を見る。誰も人影が無いのを確認し、自分が出られるくらいにまでドアを開く。

まず杖の先端を外へ出し、体重を支えながら左足を外へ踏み出す。身体の全部が外へ出る。辺りは暗く、天井に等間隔に付いている常夜灯だけが小さく光っている。ドアを閉める。

職員の詰所のある方へ一歩ずつ歩みを進める。先に杖を突き、左足を踏み出し、後に残った右足を引き摺って引き寄せる。

コツン……タツ、ズズ、コツン……タツ、ズズ……

音を立てない様に気を付けても、辺りがシンと静まっているので

音が響いている様に感じる。

暫く進み、角を曲がると長い廊下に出る。その先に明るく電気の点いている部屋がある。アレが職員の話所だ。あそこへ行くまでに職員が廊下に出て来てしまえば、その場で見つかってしまう。しかしもうこの期に及んではイチかバチか進んで行くしかない。

コツン……タツ、ズズズ、コツン……タツ、ズズズ……。

話所の前まで来る。廊下に面した大きな窓の枠に近付き、縁からそっと覗いて見る……職員が一人椅子に座ったまま眠っている。そしてもう一人、それは確かにあの浜矢という職員である。浜矢はテーブルに書類の様な物を広げて一心に何か書き込んでいる。

職員の私服が入っているロッカーは部屋のテーブルの奥にある。この状態ではとてもあの職員に見つからずに奥へ取りに行くことは出来ないだろう。

だが浜矢は何か集中して書いているので、気付かれずにそっと窓の前を通過することは出来るかもしれない。洋服は諦めるか……。

先ほどの見回りからどれくらい時間が経っているのだろう。次の見回りの時間になれば二人ともこの部屋から出て行くのかもしれない。それまで見つからない様に近くで隠れていることが出来れば……。

話所を通り過ぎた向こうにエレベーターのある場所があり、ここからは窪んで死角になっている。あそこへ行つて隠れていることが出来れば、次の見回りの時、二人が出て行った間にこの部屋に忍び込んで衣服を盗むことが出来るかもしれない。

よしと決心して歩き始める。話所の大きな窓の前を歩く。職員の一人は眠っており、浜矢は書類を書くことに集中しているので、こちらに顔を向けない限りは見つからないのではないか。音を立てない様に、細心の注意を払いながら、少しずつ歩く。

話所の窓を通過してしまうとエレベーターホールになっている。その一番奥の隅まで行き、暗がりの中に身を潜める。しかしここには身を隠す物が何も無い。暗いので前の廊下を誰かが通っても見え

ないかもしれないが、誰かがエレベーターから降りて来れば見つかってしまうだろう。そうならないことを願いながら暗い中に身を潜めている。

どれくらい時間が過ぎたろうか、意識もボンヤリし始めて、今いるここは本当にこの世のことなのかと思ひ始めた頃、不意にガチャリとドアの開く音がして、懐中電灯の光が床や壁にチラチラと走る。そして無造作な足音がスタスタと近づいて来る。ドキリとして息を潜めていると、詰所にいた二人の職員が、それぞれの手に懐中電灯を持ってエレベーターホールの前を通り過ぎて行く。暗がりにいる真次郎には気付かない様子だ。

今だ……杖を突き出し、右足を引き摺って歩き出す。職員たちの足音は角を曲がって遠ざかっている。この施設はかなり広いし、何十人もの老人たちが眠っているのだ、そんなに早くは帰って来れない筈である。

詰所の窓からそつと中を見る。誰もいない。ドアを開いて中へ入る。浜矢が座って作業していたテーブルを通り過ぎ、部屋の奥に並んでいるロッカーへ行く。

端から扉に付いた名札を見ていくが、名札の付いていないロッカーもある。焦る気持ちを宥めながら見ていくと、あった。マジックの汚い文字で、浜矢と書いてある。しかし鍵が掛かっていればそれまでだろう。カシャン……開いた。

中にシャツとズボンがハンガーで吊るされている。ズボンは青色をしたジーパンで、シャツは薄いオレンジ色で襟の付いた半袖である。如何にも若い男が着そうな感じの物だが、そんなことは言われてられない。

それを左手で引っ張り出して自分の肩に掛け、扉を閉める。さあ外へ出なければと杖を突き、右足を引き摺って出口へと向かう。職員たちが何か忘れ物でもして戻って来たら……もしくは部屋のベッドの細工がバレてしまったら……と思う気持ちを抑え、詰所を出て廊下を歩き出す。

職員たちの影は何処にもない。エレベーターホールへ向かい、下へ降りるボタンを押す。エレベーターの横に表示された数字の列の一階に光が灯っている。その光が二階、三階と登ってくる。

早く、早く来い……頼むから、あの男たちが戻って来る前に……。エレベーターは四階に辿り着き、チンと音がしてシャーッと扉が開く。途端に中から光が溢れ出て一気に辺りが照らされる。焦って杖を突くと転んでしまうので、気を付けながら急いで乗り込み、すかさず扉を閉めるボタンを押す。扉がしまると、一階のボタンを押す。

見つからなかったろうか……エレベーターの扉が開閉した音を聞かれなかったろうか……。

三階、二階と表示は下り、一階に着くとシャーッと音を立てて扉が開く。扉の外は真っ暗である。辺りを確認しようにも真っ暗なので何も見えない、とにかく外へ出なければと歩き出す。リハビリで原先生と中庭へ出た時の、外へ出るあのドアのある方へと歩いて行く。

背後でエレベーターの扉が閉まると完全な暗闇に包まれてしまう。自分の歩いている脚さえ見えない。平衡感覚も失われてフラフラとよろけそうになりながら、それでもなんとか進んで行く。

コツン……タツ、ズズズ、コツン……タツ、ズズズ……。

暗闇に目が慣れてくると、中庭へ出るドアがあると思われる辺りのもっと先に、明かりの灯った部屋がある。警備員か誰かが常駐しているのかもしれない。とにかく前へ行くしかないと歩を進めて行く。

四階の詰所で盗んだ浜矢の洋服は肩に掛けたままだ。着替えるのは何処か誰にも見つからない場所に行つてからにしようと思う。

左側に中庭に面した窓を見ながら歩いて行く。なかなかドアが見つからない。まだかまだかと歩いて、やっと見つける。ドアの脇に取り付けられた機械を開くと、文字盤が明るく光る。

「1、2、3、4、E」ボタンを押すとジーッ、ガチャッ！ と音

がしてロックが解かれる。杖をドアの脇に立てかけ、ドアノブをひねり、外へ押し開くと、外の空気が流れ込んでくる。

ドアを開いたまま身体で押さえ、杖を取り、外へ突きだして左足を踏み出す。支えていた身体を離すとドアが自動的に戻り、ガチャツと音を立てて閉じる。

ドアの閉まる音に気付いた誰かが追って来るのではないか。早く遠くへ歩いて行かなければ。と杖を前へ突き出して行く。コツツ：：左足を踏み出し、ザツ、右足を引き付ける、ズズ：：また杖を突く、コツツ：：夜の闇に包まれている中庭を歩く。

良かった：：そう寒くはない。もう十月も終わりに近いのだが、まだ冷え込んでいく気配はなく、清々しい空気に身体の細胞が蘇えつつしていく感じた。

見上げると建物の遥か頭上にまん丸だが小さな月が光っており、辺りを照らしてくれている「ああ、月だ：：」と言葉を漏らしながら、真次郎は先を急ぐ。

コツツ、ザツ、ズズ：：コツツ、ザツ、ズズ：：。

暗くてよく見えないが、ここは地面が煉瓦を敷き詰めたような石畳になっており、左足を出す時になるべく宙に浮かせて踏み出さないと僅かな凹凸にサンダルを履いた足を引っ掛けてしまいそうになる。

中庭の真ん中が大きな丸い花壇になっている周囲を回り、建物の切れ目になっているところを目指して歩く。真次郎が出てきた建物と別棟の建物間に通路があり、通れる様になっているのだ。

コツン：：ザツ、ズズ：：コツン：：ザツ、ズズ：：。

石畳の地面に杖を突く度に音が響く。もし左右にそびえ建っている施設の窓から誰かが見下ろせば、真次郎が歩いているのを見つけてしまうだろう。

早く、もっと早く：：と急いだ余り、石畳の凹凸に左足を引っ掛けてバランスを崩してしまい、倒れそうになる。マズイと思って態勢を立て直そうとするのだが、なかなか重心が整ってくれない。あ

っと思う間もなく左足でケンケンするように脇の植え込みに近付き、そのまま低い仕切りを超えて頭から植込みの中に倒れ込んでしまう。ドサーッ……瞬時に顔が草と土にまみれる。草の臭いが鼻を突く。それは記憶の中にある臭いだ。そうだ、コレはジャングルを歩いた時の臭い……。

……くそう、早く立ち上がらなくては、こんなところで寝ている訳にはいかないんだ。俺は、行く……何としても、俺は起きなければならぬ。

ガサゴソと地面に左手を突きながら、どうにか上体を起き上げさせる。浜矢から盗んで肩に掛けていたシャツとズボンにも、汚れて土が付いてしまった。拾い上げると振るい、足にぶつけて土を払い、また肩に掛ける。

乗り越えてしまった植込みの仕切りの外に左足を出し、左手で地面を押して立ち上がろうとする。だが上手くバランスが取れない。

ヨイショ、ヨイショと身体を揺すりながら、ようやくバランスを取って身体が持ちあがる。植込みの外に身体を出して石畳にゴロンと転がる。

地面に腰を降ろした格好になる。さあここから立ち上がらなければならぬ。杖を使って身体を引き上げるのだ。杖をつかんだ左手に力を入れ、弾みを付けて立ち上がろうとする。

ヨイショ、ヨイショ……せーの！ それっ……。

グラグラとよろめきながら、何とか左足一本で立ち上がる。バランスを取って呼吸を整える。前方へ杖を突き出し、左足を前へ踏み出す。そして後に残った右足を引き寄せ、また杖を突き出す。コツン……ザッ、ズズ……コツン……ザッ、ズズ……一歩、また一歩……。

やっと中庭を過ぎ、建物と建物の間にある通路へと来る。石畳は終わり、ここからは舗装されたコンクリートの地面になる。

建物の間を抜けると、施設の玄関に車を乗り付ける為のエントランスへ続く道があり、その先に門が見える。そこまではまだ遠く、

二十〜三十メートルはありそうである。門は閉まっている様だが、ここからは鍵が掛けられているのかどうかまでは見えない。とにかく行くしかない。倒れない様に気を付けながら歩いて行く。

ベッドのある居室を出てからここまで来るのにどれくらいの時間が掛かったろうか。エレベーターの脇に隠れていた時間も含めて、少なくとも職員たちが二回の見回りに来る間が過ぎているのだから、二時間以上は掛かっているだろう。

振り返って見ても施設の中はひっそりと静まり返っている。この様子だと真次郎が寝ている様に施したベッドの細工はまだ見つかっていないらしい。

でもそういえば、職員が最初の見回りに来た時は、寝たフリをしている真次郎の毛布を持ち上げて確認していた。次の見回りではアレをしなかったのだろうか。

もう見回りで発見されることが無いのだとすれば、このまま朝七時の起床時間まで誤魔化せるのかもしれない。そう思うと、初めてまんまとしてやったりという様な気持ちが湧き上がってくる。

……でも、まだまだ喜ぶのは早いぞ。あの門を出なくては。どうか鍵が掛かっていないように……。

ズルズル……ガチツ、ズザツ。ズルズル……ガチツ、ズザツ……。急がなければと思うが、焦ればまたバランスを崩して倒れてしまう。真次郎にはこのスピードで精一杯なのだ。落ち着いて、確実に一歩ずつ足を進めながら、急いで行くしかない。

ようやく門のところまで辿り着く。想像していた様な、真ん中から左右へ開く観音扉の様な門ではなく、アコーディオンの様に横に伸び縮みするスライド式の門になっている。

鍵は掛かっているのか、近くへ来て、門の左端に着いているレバーの様な物を操作してみると、カチャンと音がしてロックが外れる、そのまま左手で右の方へ押しやると、すんなりと開き、人が通れるくらいの隙間が出来る。

真次郎は門の外へ一歩を踏み出す。夜の闇の中に見知らぬ街が広

がっている……なんだ？ 身体の中から、何か大きな興奮がせり上がってくる。

空気が変わった。真次郎の身体を包み込むこの空気は……「娑婆」という言葉が頭に浮かぶ。そうだ、コレは長く捕らわれの身だった自分が、初めて解放された気分なのだ。

ビュウーと風が吹き抜ける。踊り出しそうなくらい胸の中が弾んでいる。自分の足で、こうして施設の外を自由に歩くのは何年振りなのだろう。

……沙奈さんの言うには、俺はこの施設に来る前、四五年間も刑務所にいたのだと言う。それからボケてしまって、ここへ来てから八年。だから、俺がこうして自分の足で外に出て歩くのは、五十年以上振りのことなんだ……これが外だ……俺は、やっと自由になった。今やっと自由の身になった！ 俺は自由になって、俺のやりたい事をやる時が来たんだ。

辺りには暗い中に沢山の家々が立ち並んでいる。もう深夜の一時〜二時くらいにはなっていると思うのだが、まだ明かりの灯っている窓も見える。アスファルトの道は静かで、ところどころに立っている電柱についた街灯が道路を照らしている。

……何処か大きな道へ、車が沢山走っている様な大きな道路へ出なくて。

今の時代にもタクシーという物があることは施設のフロアーで観たテレビで確認している。真次郎の計画は、どうにかこの住宅街を抜けて、何処か大きな車道へ出る。そこでタクシーを拾い、運転手に預金通帳を見せて、代金は必ず払うからと言って神戸まで乗せて行って貰おうということである。

電車等で行く方法もあると思うのだが、真次郎には何処に駅があるのかも、どの電車に乗って行けば良いのかも解からない。出来ることならタクシーに乗って、運転手にあの若い職員に教えて貰った旅館の住所を見せて、連れて行って貰えたらと思う。

ここが東京の杉並区というところであることは解かっている。果たしてここから神戸まではどれくらいの距離があるのか、かなり遠いのではないかと思う。

お金さえ払えばタクシーは何処へでも連れて行ってくれるのではないかと思うが、もしかしたら神戸なんて遠すぎるからダメだと言われるのかもしれない、もしそうなら行けるところまで行って貰い、そこからまた別のタクシーに乗って行くしかないと思っっている。

ここから神戸までタクシーで幾らくらい掛かるものなのか解からないが、きっと何十万円も掛かるということは無いだろう。

俺には五百万もの金があるのだから、きっと日本中何処へでも連れて行って貰えるはずだ。

一歩ずつ歩く自分の足元を見つめ、ヨタヨタと歩いている。するとまたアスファルトの地面が土色に変わり、道の脇には緑の草が茂っている。辺りは野生の草むらと木々に覆われて行く。コンクリートの建物が立ち並ぶ風景が、鬱蒼たる夜のジャングルに変わっている。

着ている物はボロボロの軍服となり、月明かりを頼りに真次郎は歩いている。時折り暗闇の中にうずくまっている戦友がいる。

「……大丈夫だから、先に行ってくれ」と力の無い声で戦友が言う。……あの戦友はそう言ったけれど、あの戦友には自分がもう歩けないということが分かっていたんだ。それは俺にも分かっていたのに。俺はあの戦友を置いたまま歩き出してしまった。

その時は、そうすることも仕方が無いのだと思っていた。どうしようもないのだと納得してもいた。しかし、内地へ帰って来てから何年もその罪悪感にさいなまされて来た。でも、それでも何年かするうちには忘れていたのに、何故今俺はそれを思い出すのか……。

一緒に歩いていたのに倒れてしまい、そのまま動けなくなってしまう戦友もいた「はあ、はあ……俺は大丈夫だから、後から行くから……お前は先に行ってくれ」アイツもそう言っていたけれど、俺には解っていた。コイツももう歩けないんだ。

それでも俺は歩いて行った。あの時は仕方がないことだと思つた。でも俺の心はしつかりと覚えているんだ。思い出したことは他にも沢山あるのに、一番強烈に覚えているんだ。

あれは何処の国でのことだったのか。何処の国との戦争だったのかも解からないクセに、思い出される。俺に妻の話をした戦友。子供の話をした戦友、妹の話をした戦友もいた……。

……そうだな、お前たち、お前等はみんなあの時のあの場所で、今も歩くことも出来ずに泣いてるんだな。俺だけが、こうして歩ける様になつて済まん。でもな、俺は行くよ、俺は、まだ生きてる。お前等の分まで俺は、俺のやりたいことをきつと成し遂げてやるからな。

まだまだ何処までも家が立ち並ぶ住宅地を歩いて行く。不意にブオーとエンジンの音がして前の角から強い光が伸びてくる。驚いて見ると一台の自動車が曲がってくる。そのまま凄いスピードで真次郎の脇を走り抜けて行く。

……あの車が出てきた、あの角の方に大きな道路があるのかもしれない……そう思い、車が出てきた角を曲がって行く。やがてゴゴーと沢山の自動車が走っている様な音が響いてくる。勘を頼りにそちらの方へと近付く様に角を曲がって行く。

遂に道の前方を次々に車が横切つて行くのが見えてくる。やつと大通りに出た。こんな夜中だというのに双方向に凄い勢いで見たこともない自動車が走り去って行く。

神戸に行くのはどちらの方角なのかも解らない。とにかく今いる側でタクシーを止めなければと思う。テレビで見て知っている。タクシーは屋根の上に電気を点けている。見ていると時々屋根の上に光る電気を点けて走っている車がある。アレがタクシーなのだ。今度電気を点けた車が来たら手を上げて合図してみよう。

暫く待っていると、ビュンビュンと通り過ぎる車の後方から、屋根に電気を点けた黄色い車が走って来る。真次郎は左手を出来るだ

け高く上げて、掌を振る様にしてみる。だが、その車は真次郎のこ
となど全く目に入らないという風に走り過ぎてしまう。

……あれ、ダメなのか、何がいけないのか。

何故止まってくれないのかは分からない。気を取り直してまた次
を待ち、遠くから走って来るのを認めると出来るだけ車道に近付き、
左手を上げて手を振る。

キキーンツツ！ タイヤの軋み音を立てて、真次郎の立ってい
る場所から少し通り過ぎてしまったが、そのタクシーは止まる。真
次郎のいるところまでバックして近付いて来る。そして後部座席の
ドアがひとりでにカチャリと開く。

「……」

このまま勝手に乗れば良いのだろうか、佇んでいると「乗るんで
すか乗らないんですか」とぶっきら棒に言う声が響いてくる。

「の、乗ります……」

と言ってヨタヨタと車に近付き、車の中のシートに尻を乗せて入
ろうとするのだが、車内に右足を引っ張り上げることが出来ずに戸
惑ってしまふ。

そうしているとボタンと音がして運転席から下りた男が車の後ろ
へ回り込んで来る。

四十歳くらいだろうか、緑色の背広を着ており、懐かしい匂いが
している。少し考えるところそれは煙草の匂いだった。

「大丈夫ですか御爺さん。ああ土だらけじゃありませんか。ちよつと
待って、まだ乗らないで下さい」

と言って半分乗り掛かった真次郎の身体を外へ出し、肩や尻につ
いている土を。パタパタと手で払う。

その間もタクシーの脇をかすめる様にして次から次へと凄い勢い
で車を通り過ぎていく。

「貴方寝間着のままじゃありませんか、大丈夫なんですか」

「す、すみませ……ん」

土の汚れを払ってしまうと、もう一度真次郎の尻をシートに乗せ、

右足を持ち上げて中へ入れる。左足は自分で動かせるので真次郎は車内へ入れるが、サンダルが落ちてしまう。運転手はサンダルを拾い、ポイと放り込む。

そして押し込む様に真次郎を車の中へ入れ、ボタンとドアを閉める。車の後ろを回って運転席に乗り込む。

「どちらまで行かれますか」

「こ、神戸まで……」

「神戸？ 神戸って、あの神戸パンとかじゃなくて、ホントのあの神戸ですか？」

「はい……」

運転席から振り返って真次郎の顔をまじまじと見つめて、運転手は言う。

「神戸の何処ですか？」

真次郎は首に下げている袋からメモ用紙を取り出すと、運転手に渡す。

「そ、その旅館……まで」

運転手は真次郎に渡されたメモを見ている。

「宝塚市、玉瀬……武田尾温泉……」

そしてまた真次郎のことをまじまじと見る。

「お客さん、失礼ですけど、こんな時間にタクシーに乗って神戸までって、何か事情でもありませんか」

「……」

「お身体もあんまり健康そうじゃないですけど、大丈夫なんですか？」

「は、はい……大丈夫です、よ」

「でも神戸まで行くとなると6〜7時間は掛かりますよ」

運転手は真次郎が本当にそこへ行くつもりだとは受け止めていない様子である。

「それに運賃も凄く掛かりますけど」

「い、幾らくらい……ですか」

「そうですねえ、そんな長距離やったことないから分かんないけど、高速代も入れて十万か、ヘタすりゃ二十万以上いくと思いますけど」

「だ、大丈夫……です。時間掛かっても……お金も、あります」

と言って首の袋から預金通帳と印鑑を出し、運転手に渡す。渡された運転手は通帳を開いて見る。そして最初のページに押してある届出印と渡された印鑑の模様とをまじまじと見比べている。

「て言うかお客さん、キャッシュカードは持ってないんですか？」

「キ、キャッシ……？」

「持ってないんですか、それじゃお金は銀行の窓口で下ろすしかないですよ。だけど朝の九時にならないと銀行は開かないですからね、その時間だと今から出発したらもう神戸に着いちゃってますよ」

「そ、そうな……んです、か……」

運転手は真次郎の渡した預金通帳のページを捲ったり裏返したりしてまじまじと見る。

「まあでもコレつい最近もお金引き出してる記録が残ってるし、大丈夫かなあ」

「……」

「しかし御爺さん随分おカネ持ちなんですねえ」

「は、はあ……なんとか、お願いします……連れて行って下さい……」

「神戸か……なんだか信じられない話だけど、もし本当だったら勿体ないからな。でももし何かの間違いだったとしても、乗せて走った分の料金はしっかり頂きますからね」

「は、はい、お願い、します……」

運転手は通帳と印鑑を真次郎に返すと前に向き直り、ハンドルを回す。グラリと車が少し動く。運転手は窓から顔を出して、横をすり抜けて行く車の列を見ている。タイミングを計り、グインと車を走らせる。瞬間辺りが後方へと動き出し、真次郎は眩暈を覚える。

……麻里恵、俺はきつと行くからな……麻里恵に会えば、きつとすべてが分かるんだ。……俺がこの五百万の金のうち、最初に持つ

ていたという二百万をどうやって手に入れたのかも、時々脳裏に見える血飛沫を浴びて叫んでいる女の子のことも、何故俺が殺人を犯したのかも。そして俺が誰なのかも……。

「えーっと神戸だから、用賀から乗って東名高速、名神か……」

運転手は独り言の様に呟きながら車を走らせている。

「けどこんな夜中に神戸までおひとりで行かれるなんて、そーとー急な用事なんですねえ」

「……は、はい、人に会いに……行くもんですから」

「寝間着を着替える暇も無かったんですか」

「は、はあ……」

まだ運転手は真次郎に対して、少なからず不審を抱いている様子である。

「あ、あのう……ここで服を、着替えても……いいですか」

「え、はい、いいですよ」

真次郎は施設から着たまま出てきたパジャマを左手だけでなんとか脱ぎ、盗んで来た浜矢職員の青いジーパンとオレンジ色のシャツを、シートに寝転んだりして悪戦苦闘しながら身に着けて行く。

土だらけになっているパジャマはもういらないので、丸めておいて後で何処かに捨てて貰おうと思う。

車は大通りから高速道路へ入り、真次郎には見たことも無い広々とした道を快調に走って行く。

運転手は真次郎に話し掛けてくることも無くなり、まだ苦勞してシャツのボタンを留めている真次郎のことは気にも止めない様に黙って運転している。

長い時間が掛かり、やっとボタンも留めて着替えが終わると、ようやく一息ついて、シートに身体を横たえる。ぼーっと窓外を過って行く景色を眺めている。この広い道には信号もない。只々走り続けていくことが不思議になり、運転手に訊ねてみる。

「あのう、この道路は……信号が無い、のは何故です……か」

「えっ、コレは高速ですから、信号は無いですけど。あの、神戸まで行くとなると当然だと思って高速に乗っちゃいましたけど」

「こうそく……?」

「はい、高速道路ですけど」

「そうですか……」

「車の運賃の他に高速料金が掛かっちゃいますけど、良かったですかね? もし高速乗らないで行ったら倍くらい時間掛かって料金も高くなっちゃいますので」

「ああ……はい」

真次郎には運転手の言うことが良く理解出来ない。だが運転手がそう言うのならそうなのだろうと思う他はない。きつとこの「高速道路」という物は自分の知らない間に作られた特別な道路なのだろう。

走っている道路の向こうには、行けども行けども高いビルが立ち並び、キラキラと光る無数の灯りが流れて行く。一体この街は何処まで続いているのか、この世界はこの世のことなのか……。

そんなことを思いながら窓を眺めていると、自分は本当にあの施設から逃げ出すことに成功したのだという実感が沸き上がってくる。真次郎がいなくなっていることは、きつと七時の起床時間になるまで気付かれないうだろう。その頃にはもうかなり東京を離れてしまっているに違いない。

少しウトウトしただろうか、ふと気が付くと窓に広がる空が明るくなってきたおり、夜が明けてきたことを告げている。

「あ、あのう……今はどの辺り、ですか……」

黙って運転している運転手に聞いてみる。

「静岡県に入ったところですよ」

「あっ……」

窓の先には遠く青い海が広がっている。真次郎は思わず息を飲む。海……海……そうだ、アレは海だ。ああ、懐かしい。俺は海を知

っている。戦争に行く時も、帰って来た時も、そうだ。俺は船に乗って海を渡って行ったんだ。

やがて道路がもつと海に近付き、窓の外の海が膨らんでいく。車は大きく弧を描いて海沿いを走っている。運転手は「ここは清水の港ですよ」と教えてくれる。

海に沿って走る窓外を見ると、真次郎の脳裏に記憶が蘇ってくる。そうだ……俺も昔、この道を自分で運転して走ったんだ。窓の隙間から匂ってくる潮の香りも、あの頃と同じだ。

真次郎はトラックを運転している。そして、フロントガラスの外にこの港の光景を見ていた。この風景、広がる海……過ぎて行く清水港の風景に懐かしさが込み上げてくる。

……俺は、この道を何度も走っていた。繰り返し繰り返し、トラックで荷物を積んで東京から神戸へ行き、そしてまた神戸から、荷物を積んで東京へ走った。それはきっと、それが俺の仕事だったからだ。それは、刑務所に入る前の。

俺は孤独だった。一人ぼっちで、家族もなくて。ただハンドルを握ってた。助手席には同僚がいたと思うけど、誰だったのかも思い出せない。途中そいつと運転を交代しながら、自分が運転しない時は寝ていた。

無意識にそんなことが脳裏に展開されてくると、真次郎は一人で運転しているこの運転手とも交代しなければならぬ様な気になってくる。

「あのう、運転手さん……大丈夫……ですか？」

「えっ？　はあ、ありがとうございます。大丈夫ですよ心配しないで下さい。でもちよつと、もし良かったら、後で三十分くらい休憩させて貰っても良いですかね」

「はあ、どうぞ……勿論そうして、下さい」と答える。

それからまたしばらく運転手は黙って運転を続ける。そして少し細くなった脇道へ逸れてスピードを落とし、広い駐車場へと入って行く。

広々とした駐車場には、朝早いせいも空いているところが沢山ある。運転手はその中の一つの枠に車を止めてサイドブレーキを掛け、エンジンを止める。

「それじゃここで少し休憩させて貰いますね、その間はメーター上がらないようにしときますんで」

と言ってハンドルの脇にある数字の表示された機械を操作する。

「あ、ここは……何処ですか」

「浜松ですよ。もう神戸までの半分以上来てますから」

「そうですか……料金は、ここまでで……幾らくらい……掛かっていますか」

「え、結構掛かっていますね」

運転手は数字の表示された機械を見ながら考えている。

「コレと高速代も足すと、もう九万以上いっちゃってますね」

「そうですか」

運転手は思っていたより料金が高くなっていることに恐縮した様に言うが、ここまで神戸までの半分が九万円で来たのなら、あと九万で目的地に着けるのだと思えば、何も問題はないと思う。

「それじゃ、三十分くらい止めてますんで、その間にお客さんもお手洗いとか行かれて下さいね」

と言ってドアを開くと外へ出て行く。真次郎もトイレに行っておこうと思い、ドアを開いて身体をひねり、左足を外へ踏み出す。身体を外へ傾けながら杖を突き、車内から右半身を引っ張り降りして外へ出る。

広い駐車場の前にレストランの様な店や売店があり、その脇にある白い建物がトイレの様だ。真次郎は杖を突きながら駐車場を横切ってゆつくりと歩いて行く。

トイレの中は杉並区の施設とは比べものにならないくらい広くなっており、ズラリとならんだ個室スペースのひとつに入ると、左手だけで上手くズボンとリハビリパンツを膝の下まで下げ、便座に座る。

用を足し終えて外へ出て来ると、広い駐車場にまばらに停まっている車の、どれに乗って来たのが解らなくなってしまふ。

……ええつと、どの車だったろう。そうだ、タクシーだ、タクシーに乗って来たんだから……ああ、アレかな。アレだきつと。

ようやくタクシーを見つけて近付いてみると、椅子を後ろに倒して、運転手が鼾をかいて寝ている。やっぱりコレだと思い、ああ良かったと後のドアを開けてガチャガチャと乗り込む。

見ると運転手を買って来て食べたと思われるパンかサンドイッチの袋や飲み物の空き缶が置いてある。真次郎も空腹を感じているのだが、預金通帳はあっても現金が無いので何かを買って喰べるといふことが出来ない。運転手が起きるのを待って当座の金を貸して貰うしかないと思う。

十分くらい休憩すると言っていた運転手は、一時間を過ぎても全く起きる気配がない。その鼾を聞いていると、かつて自分がトラックを運転している時に、隣で同僚が寝ていたことが思い出される。さつき見た清水の港の風景に感じた懐かしさ。そしてこの男の鼾で思い出される同僚運転手の鼾。

……俺は、トラックを運転する仕事をしていた。そして、東京から神戸に向かって走っていたんだ。そこで俺は麻里恵という女と出会ったのか。麻里恵、もうすぐ解かる。お前に会えば……。

その後も運転手は寝続けて、一向に起きる気配は無い。しかしこの先また今までと同じくらい運転して貰わなくてはならないのだし、無理に起こしてしまうのも悪いと思い、真次郎は腹が空くのも我慢してじっと待っている。

待つということにそれ程の抵抗を感じないのは、自分は永年生きて来たので今更急ぐこともないということなのか、ここまで来た以上はもう誰にも連れ戻される心配も無いという余裕からなのか。何よりまだ遥か遠くにある桜華園という旅館まで行く為には、この運転手だけが頼りなので、少しは時間を浪費しようとも機嫌を損ねてはいけないと思う。

外がすっかり昼の様に明るくなると、運転手がようやく目を醒ます。すみませんと恐縮するが、真次郎は怒りもせず現金が無いことを説明して金を貸して貰い、頼んでパンと牛乳を買って来て貰う。

ようやく出発したタクシーは再び高速道路を走り出し、真次郎は後で運転手を買って来てくれたパンをモグモグと食べる。

暫く走ると運転手が口を開く「お客さん、もう銀行が開く時間なので、もし良かったら一度高速を降りて銀行に寄らせて貰ってもいいですかね。疑う訳じゃないんですけど、神戸までですとかなり高額な運賃ですから、やっぱりお持ちの現金を確認させて貰いませんか」とちよつと心配なもんですから」

「あ、そうですか。いいですよ……それなら是非、そうして……下さい」

そう答えると、運転手は長いカーブをグルグルと回る道へ入り、高速道路を出て信号機のある普通の道路へと入って行く。

「お客さんのお持ちの通帳の銀行があるところを探しますので、ちよつと待って下さいね」

そう言うとし街地の道路を走り廻り、鉄道の駅の様なところへくると車を停める。

「ちよつと交番で聞いてきますので、待ってて下さい」と言って車を降りて行く。

戻って来ると車を走らせ、すぐに小さな駐車場へ入り、車を停める。

「お客さん、すぐそこにお客さんがお持ちの通帳の銀行があるんですけど、一緒に歩いて行って貰えますか」

「あ、はい……勿論、いいですよ」

車を降りて、運転手と共に銀行へ向かう。小さな商店街の中に綺麗なガラス張りの店があり、横の看板には確かに真次郎の通帳と同じ銀行の名前が書いてある。

グインと開く自動ドアを通過して中へ入ると、広いフロアーに長椅

子が並んでおり、まばらに人が座っている。前方に横に広く延びたカウンターがあり、番号で仕切られている中に制服を着た女の人が座っている。

運転手は真次郎を長椅子に座らせると「整理券を貰って来ます」と言ってカウンターの横にある機械へ行き、ボタンを押すと出てきた小さな紙を持って戻って来る。その紙を真次郎に見せる。

「この番号が呼ばれたら、一緒に窓口に行きますので、そしたらお客さんがお持ちの通帳と印鑑を出して、お金を降ろして貰える様に頼んで下さい」

「はい、分かりました……」

間もなくピンポンという機械の音と共に女性の声でその番号が呼ばれ、運転手は真次郎を促して窓口へ連れて行く。窓口へ着くと真次郎はシャツの中から首に下げたビニール袋を引っ張り出し、通帳と印鑑を窓口の女性に差し出す。

「あ、あのう……この通帳から、お金……を、降ろしたい……んですが」

「はいかしこまりました。それではこの用紙に金額をご記入して頂けますか」

と女性から用紙とボールペンを差し出されて、真次郎は左手でボールペンを取るが、手がブルブル震えてしまう。

「私が代わりに書きましようか」と言って運転手がペンを取り、受付の女性に説明する。

「私はタクシーの運転手なんですけど、今この方を東京からお連れして来てまして、この人料金を払うのに預金を降ろさないと払えないと仰るものですから、お手伝いしてるんですよ」

受付の女性はちよつと黙り、運転手を見つめる。
「そうですよねお客さん」

と運転手は真次郎にそのことに間違いないことを確認する様に求める。

「は、はい……そうです。そうなん、です……」

「作用でございますか。承知いたしました」と受付の女性が答える。運転手は真次郎に「降ろす金額は幾らにしますか？」と聞いてくる。

「タクシー、の……料金は、幾ら……ですか」

「そうですね、今十万くらいですから、ここからの高速料金と宝塚市まで行くのと合せても二五万まではいかないと思いますけど」

「それじゃ……五十万、降ろして……下さい」

「そんなにですか」

「他に……も、いろいろ、お金が……掛かると思うので……」

「そうですね、分りました」

と言って運転手は用紙に金額を記入して、受付の女性へ差しだす。「それではご用意出来ましたらお呼びしますので、そちらにお掛けになってお待ち下さい」

と言われて、二人はもう一度先ほどの長椅子に腰を降ろす。

「相沢様、お待たせ致しました」

と呼ばれて運転手と真次郎は受付へ向かうと、受付の女性は一万円札の束をプラスチックの皿に乗せ、通帳と印鑑を添えて真次郎に差し出す。

「五十万円と通帳とご印鑑です、ご確認下さいませ」

真次郎は運転手に「代わりに……数えて、下さい」と頼む。

「はい、分かりました」と運転手は答え、真次郎によく見える様に札束を扇状に広げ、端から一枚ずつ「一、二、三、四……」と声に出して数えて行く。それを見ながら真次郎は、ああ自分には確かにこれだけの金があるのだと実感して行く。

「はい、確かにありますね、それじゃ目的地に着いた時に料金は精算させて頂きますので、コレは通帳と印鑑と一緒にお客さんをお持ちになって下さい」と運転手は受付の女性に聞えよがしに言う。

そして現金を女性と一緒にくれた封筒にしまうと、通帳と印鑑と一緒に真次郎の首の袋に入れていく。その時袋の中に少し縁が削られたステンレスのスプーンが入っているのに気づき「なんでスプー

ンなんか入れてるんですか？」と不思議な顔をして訊ねる。

「コレは……大事な……もの、ですから」と真次郎は答えてスプーンを受け取ると、ジューパンのポケットに差すが、長い柄が収まり切れずにポケットからはみ出してしまう。

真次郎は袋をシャツの中にねじ込む。五十万の現金が増えた分袋は大きくなり、シャツは胸元が不自然にボコツと膨らんだ格好になる。

「ありがとうございました。お気を付けてお帰り下さいませ」

と愛想よく言う女性に送り出されて、二人は銀行を出る。

真次郎は運転手に礼を言う「あ、ありがとうございました……ごさい、ました」「いーえ、こちらこそ、安心しましたよ。私タクシーの運転手になってこんなに長距離のお客さん乗せたの初めてですから、良い経験になりますよ」心なしか運転手は前よりずっと機嫌が良くなった様に思える。真次郎が引き出した現金を見たお陰だろうかと思う。

運転手は、真次郎が杖を突いて歩くのが遅いことにも嫌な顔ひとつせずに、歩調を合わせてゆっくりと歩き、駐車場まで戻る。

「ここは、どの辺りなんですか？」と尋ねると「もう大阪には入ってますからもう少しですよ」と運転手は答える。

後部座席に真次郎を乗せ、運転席に乗り込むと、運転手は最初我真次郎が見せたメモ用紙をもう一度見て、ダッシュボードに取り付けられた小さな画面のある機械に、メモに書かれた住所を打ち込んで行く。

「それは、何……ですか」

「これはカーナビと言って、目的地の住所を打ち込んでおくと、そこまでの道順を教えてくれる機械なんですよ」

「……」

一体どんな仕組みでそんなことが出来るというのか、真次郎には驚くより他はない。

「それじゃ、出発しますね」

と言って機械を操作し終わると左手でギアを入れて車を出す。し

かし、走り出してから一向にギアを入れ直す様子が無いことに初めて真次郎は気付き、コレもおかしいと思って見ている。

ローギアで発進させたらスピードが上がると共に重いギアにチェンジしていく筈なのに、運転手は最初にギアを入れたきりずっと変えようとしない。

それも不思議に思ったが、きっと時代が変わり、車の構造というものも変わってしまったのだろうと思う。

元来た街中を走り始めると「二十メートル先、左折です」と先ほど運転手が住所を入力した機械から女の声が出たので驚いて見る。運転手はその通りに左に曲がるとまた「次の交差点を右折です」と喋る。運転手は機械の指示に従ってハンドルを切って行く。

そうするうちにタクシーは再び高速道路に乗り、神戸を目指して走り始める。

神戸が近くなったのだと思うと、それに触発されてか、今まで思い出せなかった記憶が意識の上に浮かんでくる様な気がする。

仄かに思い出される記憶によれば、かつては東京から神戸までトラックで来るのに、一日では来れなかったのではないかと思う。

それと、施設にいた頃から時折り断片的に見えていた、かつて麻里恵と一緒に行ったのではないかと思う場所について、運転手に尋ねてみる。

「あのう……この辺りで、山の上から……港、が見える、ところ……がありますか？」

「山の上から港ですか？ そりゃ六甲山じゃないですかね、夜景が綺麗だって有名ですよ」

「六甲……山ですか」

タクシーはまた大きなカーブを回って違う道に入ったりしながら、高速道路を数時間走り続ける。そしてまた脇道に入るとスピードを落とし、信号のある普通の街路へと出る。

運転手は機械の発する女の声に従って角を曲がったりしながら、市街地を走り抜けて行く。

そうして徐々に山の中へ登って行く様な道路を進み、やがては道の両側が山で囲まれた中を走り始める。

「さあお客さん。もうすぐですよ」

もうすぐ……もう近くに、麻里恵はいるんだ。

また何か記憶に呼応する様な物が無いかと真次郎は一心に景色に見入っている。車は山の中を曲がりくねった細い道を右へ左へと揺れながら走り、眼が回りそうになってくる。

まだかまだかと思っていると、道の上に大きく「武田尾温泉」と書かれたアーチが現れ、そこを潜ると河を渡る橋になっている。車は橋を渡り、さらに河に沿った道を走って行く。

見ると紅葉になっていている木々に囲まれた中を河が流れている。とても美しい所だと思う。

真次郎はこの風景をかつて見た筈なのだと思う。何かを思い出せそうな感じはするのだが、具体的なことを思い出すことは出来ない。河の流れはやがて狭くなり、小さなせせらぎの様になって行き、その周囲に懐かしい風情の家屋が並んでいる。

車はスピードを落として狭い路地を進んで行く「まもなく目的地に到着です」という女の声と共に、広くなった場所へ出る。

そこには何十年前も前の家屋であろう古い旅館がある。車はその前に停車する。

「お客さん、着きましたよ」と運転手が真次郎を振り返って言う。

見るとその旅館の玄関の上に「桜華園」と書かれた木の看板がある。

……桜華園……来た。俺はやつと来たんだ。

「ありがとうございます……」

真次郎はここに来るまでに掛かった運賃と、高速道路の料金、それに立て替えて貰ったパンや牛乳の代金等も足して計算して貰う。金額は二二万円を超えている。

シャツの中からビニール袋を引っ張り出し、その中から金の入った封筒を出す。運転手に渡し、ここまで無事に連れて来てくれたお

札の意味も込めて、その金額に三万円くらい上乗せして二五万円を受け取ってくれと運転手に言う。

「あ、いやーそんなに上乗せして貰っては申し訳ないですよ」と恐縮しながらも運転手は二五枚の一万円札を数えて、残りを真次郎に返す。

「今夜はここにお泊りなんですネ、お帰りはどうなさるおつもりなんでしょうか？」とニコニコして訊ねてくる。

あわよくばまた東京までの帰りも真次郎を乗せて行きたい。と考えているのであろう。

そう思っただけで真次郎は気付く。ここからまた東京まで帰るなどということは全く考えてもいなかった。ここに来て麻里恵に会えば、もうそれだけで良い。その後のことは何も考えていない。

「いえ、もう……いいんです。ここまで来られた……のだから……後のことは……何も、解りません……」

「そうですか、分りました」

と言って運転席を降りると、車の後ろを回って後部座席のドアを開き、真次郎が降りるのを手伝う。

「それではお気を付けて」と旅館に向かって行く真次郎を名残惜しそうに見送ると運転席に乗り込み、ドアを閉じて走って行く。

第三章

1

ここに、この旅館に、麻里恵がいるんだ……。

真次郎は無意識にジーパンの上からポケットに入っている削りかけのスプーンを握り締めている。何故そうしているのかは解らない。でも何故かそれは手放してはならない大切なお守りである様に感じ

ている。

コツン……タツ、ズズズ……コツン、タツ、ズズズ……。
杖を突いてゆつくりと、開け放たれている玄関へ入って行く。誰もいない。中は広く、磨かれた木の柱や梁があつて、如何にも何十年もの月日が経つたであらう歴史を感じさせる。

それは真次郎の生きた時代に寄り添って建っていた様な親しみを覚える造りである。玄関の奥に長い廊下が続いているのが見える。

「ごめん……くだ、さい……」

「はい」奥の方から声がして小走りに仲居の着物を着た女が来る。「いらつしやいませ、ようこそお来し下さいました」と愛想良く頭を下げたその顔は、かなり老け込んでいる老女である。今聞いたその声が身体中に電流の様に流れていく。指の先から足の先までが小刻みに震える。

老女と眼が合った途端に心臓の鼓動も激しくなる。真次郎は口を開く。

「あのう……」

「はい、お泊りのお客様でしょうか」

「……」

その老女は、真次郎が杖を使つてかなりヨロヨロしていることと、他に連れの者がいないことに戸惑いを感じた様に言う。

「おひとり様でしょうか？」

「あの、う……こちらに、麻里恵、という人が……いると、思うのです、が……」

「……お客様のの中にですか？」

「いえ、ここで……働いて、る筈……なんで、す」

「ここで働いてる？ 苗字は何と仰るんですか」

「それは……多分、三浦……三浦というんだと……思うんですが」
老女はちよつと驚いた様な顔をする。

「……失礼ですが、お客様の名前は何と仰るんですか」

「相沢、相沢……真次郎……です」

ドターンと音がして、その仲居の老女が倒れてしまう。

その音を聞き付けた他の仲居が来て「あら、女将さん！ 女将さんどうしました？」と倒れた老女を抱き起す。

奥からまた別の仲居と男性が走り出て来る。

「女将さん……大変だ、救急車を呼んで！」

真次郎は呆然としている。何故倒れたのか、もしかしたらこの女が麻里恵なのか、俺の名前を聞いたから倒れたのか、それとも何かの病気で倒れたのがたまたまタイミングが合ったのか。解らない、この女の名前は何と言うのか聞いてみたいが、それどころではない騒ぎになってしまっている。

「脈はあるかい？」 「うん、ちゃんと息はしてるよ」と従業員たちの声飛び交う。

「あ、あのう……すみま、せん。私は……」

従業員たちの後ろから声を掛けるのだが、皆それどころではなく、全く振り向いてくれない。

仕方なく真次郎は後に下がり、玄関の隅で成り行きを見守っているしかない。

程なくしてサイレンの音が道を登って来たかと思うと救急車が到着し、降りて来た隊員が倒れた老女の容態を確認する。

この老女が麻里恵なのか、このまま病院に連れて行かれてしまうかもしれない、その前に話くらいは出来ないのか。

隊員が救急車の後部扉を開いてガチャガチャとストレッチャーを降ろして来る。隊員たちは老女をストレッチャーに乗せる。

「大丈夫だよ」「女将さんしっかりして」従業員たちの声に送られるながら、老女は救急車に乗せられる。

ボタンと扉を閉めるとサイレンを響かせて、救急車は先ほど真次郎がタクシーで来た河沿いの道を走って行ってしまふ。

救急車が行ってしまった後、気が付くとひとりの仲居の女が真次郎の近くに立っている。さっき倒れてしまった女程ではないが、こ

の仲居もかなり老けている。初老な感じである。

「あのう、お客様、突然のことで大変失礼致しました」

「は、はい……」

「失礼ですが、今日はお一人様でご来館頂いたのでしょうか」

気のせいかな、その女は何か辺りをはばかり様にして、小声で話し掛けてくる。

「は、はい……一人ですが……あ、あのう、こちらに、麻里恵という人が、働いておられると……思うのですが……私は、その方にお会い、しに来た。のです……」

「……あの、失礼ですが、お客様のお名前は」

「あ、相沢……真次郎といい……」

「お部屋へご案内しますのでどうぞ」

違和感がある。今この女は真次郎の言うことを遮る様に言った。

真次郎の腕をつかみ、引っ張る様に力を入れてくる。

真次郎は促されるままに杖をついて三和土へと近づく。東京の施設から履いて来たサンダルを脱いで、おぼつかない足取りでどうか三和土に上がると、女は真次郎の足元に館内用のスリッパを揃えて置く。

真次郎は履こうとするが、足元が定まらずによろめいてしまう。

女が横へ来て真次郎の右腕の脇の下から腕を通して身体を支えてくれる。だが、その支えてくれている女の腕がブルブルと震えている。見ると顔も強張っている様に見える。

どうにかスリッパを履いて廊下へ進む。奥まで続く長い廊下に客室のドアが並んでいる。

女は一番手前にあるドアを開け「こちらへどうぞ」と言って真次郎を中へ入れる。

「すみません……」

と言いながら部屋に入ると、女はボタンとドアを閉め、ガチャリと鍵を掛ける。

スリッパを脱いで上がると中はすっきりした六畳の和室に木製の

座卓が置かれている。その向こうには外を流れる小川に面して二畳程の板の間があり、小さなテーブルを挟んで藤椅子が置かれている。「どうぞおおくつろぎ下さい」

「あ、あの……う、俺は足……が曲がらない、ので、床には、座れないから……」

「そうですか、それでは窓際の椅子の方へどうぞ」

と促し、大きなガラス窓の前にテーブルのある板の間へと真次郎を連れて行く。

真次郎が椅子に近付こうとした時、グインと頭上が回転し、ガコンと音がして真次郎は倒れている。

何が起こったのか、頭から痛みが沸き上がってきたかと思うと顔面にサラサラと血が流れてくるのが分かる。

ドカツ、ドカツ！ 背中が蹴飛ばされて、テーブルの脚に割れた頭が打ち付けられる。

「あなた、今更、何しに来たのよ！ はあ、はあ、何だって今更……こん畜生っ！」

それはこの部屋へ案内してきたあの女の声なのか、背中を蹴る足の衝撃に凄い憎しみが籠もっている。

カラカラッ……と音がして何かが転がったかと思うと、口から入れ歯が飛び出している。

うごめいて真次郎は身をよじる。ドカツ！ ドカツ！ 今度は胸が打ち付けられる。

「ああ、ああ……」

胸を打ち付けられて息が出来ない。何が起こっているのか解らない、されるがままになっている。頭と、胸と、身体を激痛が覆い、意識が朦朧としてくる。

「うう……ああ……」頭から真次郎の残り少ない命の様に血が流れていくのが分かる。そのまま訳が解らなくなってくる。

ガチャガチャッ……コンコン。失い掛けている意識の中で、誰かがドアを開けようとしてノックする音が響いてくる。

「若女将、いらつしやいますか、東京のお嬢さんからお電話が入ってます」

背中を蹴っていた女が慌てた様にドアへ走って行き、鍵を解いて開く。

「こつちも大変なのよ！ お客様が転んで頭から血が出てるから、もう一度救急車を呼んでちょうだい！」

しばし様子を見ている間があつたかと思うと「は、はいっ」と慌てて返事をしてその女が部屋から出て行く。ドタドタと廊下を走って行く音がする。

何が起こつたのか解からない。自分がどうなっているのかも解からない。ただ意識は朦朧として、何も分からなくなっていく……そのまま全てが闇に包まれてしまう……。

2

真次郎の目にうつすらと視界が戻ってくる。ここは何処なのか、白い天井がある……東京の施設に戻っているのか……いや、自分はまだ死んだのかもしれない。でもスースーと自分が呼吸している音が聞こえている。俺は生きているのか……。

視界の上に誰かが来て俺の顔を覗き込んでいる……優しそうな女の顔。マリ、麻里恵だ……マリ……会いたかったよ……。

「相沢さん、相沢さん大丈夫ですか……」

マリが俺を呼んでるんだ。やはりここはあの世なのか……。

「マ、マリ……何処にいた……の？ 探したん……だよ」

「気が付きましたか？ 相沢さん、私のこと分かりますか？」

真次郎に意識が戻って来る。

あつ……これは、マリじゃない、この人は、沙奈さん……沙奈さんじゃないか。でも何故沙奈さんが？ そうか、やっぱりここは東京のあの施設なんだ。俺は、折角神戸まで来たのに、結局連れ戻されてしまったのか。

真次郎はベッドに寝ており、知らぬ間に浜矢のジーパンとシャツも脱がされ、パジャマに着替えている。

「相沢さん、相沢さん、もう……心配したんですよ！」

そう言って沙奈はベッドの上に紐でぶら下がっているボタンを押す。

見ると沙奈の横には、あの旅館で客室に真次郎を案内した仲居の女が立っている。

……俺の頭はどうなったのか、真次郎はそっと左手で触ってみると包帯が巻かれている。

……あの時、俺は誰かに突き飛ばされて、転んでテーブルに頭をぶつけて、それで怪我をしたんだ。その後も誰かに背中を何度も蹴られて……あれは誰にやられたのか、あの部屋に誰かが隠れていたのか？ それともこの仲居の女がやったのか？ しかし何故俺があるなことをされなければならぬんだ……何か俺がここへ来てはならない理由でもあったというのか。

それに何故沙奈さんがここであの旅館の女と一緒にいるのか、訳が解らないまま考えていると、ドアを開けて白衣を来た女が入ってくる。

「あの、今日を開けて、意識が戻ってるみたいなんですけど」

と沙奈が白衣の女に言う。

「もしもし、大丈夫ですか、私のことが見えますか？ 相沢さん、

この指を見て下さい」

とその看護師は真次郎に言うと、目の前に人差し指を立てて、左右に動かしていく。思わず真次郎はそれを眼で追う。

「私の声が聞こえますか？ 聞こえたら頷いて下さい」

そう言われ、真次郎は縦に顔を振る。

続けて看護師は真次郎の腕に大きな腕時計の様な機械を巻き付けてスイッチを入れる。するとグイーンと音がして腕が締め付けられる。

沙奈はずっと心配そうにその様子を見ている。その横では旅館の

女が何か神妙な顔をしている。

暫くして看護師は腕から機械を外し、その数値を見て言う。

「大丈夫ですね、頭の怪我の方もレントゲンの結果、骨には異常は無かったみたいですので、安静にしていれば腫れが引いて傷口も塞がりますよ」

「はい、ありがとうございます」

と旅館の女が言っ頭を下げると、看護師も軽く会釈をして部屋を出て行く。

「さ、沙奈さん……君は、どうして……ここに？」と訊ねる。

「相沢さん。なんて無茶なことするんですか！ 今朝施設で行方不明になったって聞いて、もしかしたらって思っ、連絡したんです。でもまさか、私が話した実家の旅館に、本当に来てるなんて……電話したら母がそれらしい人が訪ねて来たって言うから。驚きましたよ。こんな大怪我までして。でも無事で本当に良かった。施設では大騒ぎになってるんですよ」

「……こ、ここは、何処ですか？」

「ここは宝塚市にある病院です」

「……」

真次郎の頭に、筋道を立てた考えが浮かんでくる……俺は昨夜東京のあの施設を抜け出して、タクシーに乗ってここまで来た。そしてやっと桜華園という旅館に辿り着いて、出てきた老女の仲居さんに麻里恵のことを訊ねたら……そうだ。あの倒れてしまった仲居さんはどこにいるんだ。あの人がやはり麻里恵だったのではないのか？

あの人は救急車に乗って行ってしまっ、それからここに居るこの仲居さんに部屋に案内されて、誰かに怪我をさせられて……そうだ。そして俺も病院に運ばれたんだ。

そして沙奈さんは、朝東京の施設で俺がいなくなったので桜華園に電話をして、俺がこっちへ来ていることを知った。そしてわざわざ東京から駆け付けてくれたって訳か……。

神妙な顔をして黙っていた旅館の女が、側へ来て真次郎の顔を見る。

「でも本当にご無事で何よりでした。お部屋で倒れられた時には本当に驚きましたよ」

「……俺が、倒れた？ 違う、アレは、誰かが後から突き飛ばしたんだ。やはりこの女ではないのか？」

「東京で娘が勤めている施設にいらした方なんですよね、何か娘がいらぬことを言ったばかりに、遙々訪ねて来て下さったんですね。本当に申し訳ないことを致しました」と言って深々と頭を下げる。

「……沙奈さんが娘？ この人は、沙奈さんの母親なのか、するとつまり、麻里恵の娘だということか？ そうだ、俺の目の前で倒れたあのお婆さんの仲居さんは、他の仲居から女将と呼ばれていた。やはりアレは麻里恵だったのか……」

「相沢さん。私施設に電話して来ますね、先生のお話じゃ三日間は安静にしてた方が良いつてことですから、それまでここに入院して、動いても大丈夫になってから、連れて帰るつて施設には報告して来ます」

そう言つて沙奈は部屋を出て行く。

病室には真次郎と旅館の女だけになる。女は凄く怖い顔をして真次郎を睨みつける。

「……おい、貴方ふざけないでよ、今更何をしに来たつていうのよ？」

「……」

だがそう言われても、真次郎には何のことだかさっぱり解らない。「いや、俺は……ただ……」

「全く貴方は、こんなにヨレヨレになってまで東京からやって来るなんて、なんて執念なのよ！」

ガッシャーン！ 気がつくつと真次郎はベッドから引き摺り落とされてる。

女は床に落ちた真次郎の上に馬乗りになると、両手で真次郎の頭を抱え上げ、そのまま床に叩き着ける。

ガーン！

脳天に響く衝撃が炸裂する。

ガーン！ ガーン！ ガーン！

「はう、ああつ、ひあつ……」

女は黙って繰り返し頭を打ち付けていく。頭の傷口がまた開いたのか、みるみる包帯が血で湿っていくのが解かる。今度こそ殺されてしまうと思う。

ムギユギユツ……女は立ち上がり、真次郎の顔を踏み付ける。
……やっぱり、やっぱり旅館でもこの女がやったんだ。この女……麻里恵の娘が……。

「ねえ、何を考えてるのよ！ もう私たちのことはそつとしておいて下さいよ。お願いだから……」

と言って尚一層の力を込めて顔を踏み潰す。潰されている口の隙間から血が流れて床に広がっていく。

「ふあ、ふあの……」真次郎は必死に口を開く。だが顔を踏まれていたので言葉が明瞭に発音出来ない。

「なんですか相沢さん」

「お、お願い……しま、ふ。麻里恵……に、お会わへ、願へ……まへん、で、ひようか……」

「会ってどうするつもりなの？」

「どう、ふる……って、何も……たら、私、のこと、を……麻里恵に、教へ……て、欲ひい……から」

「貴方のことを、教えて欲しいって？ どういうことよ」

「お恥ずかひ……い、こと……でふが、俺……は、自分……の、ことが、思い出へ……なひ……んです」

「……それは本当なの？」

「は……はい」

女は考える様に黙る。

「……」

心なしか足の力が弱まった様な気がする。女は踏まれている真次郎の顔を上からじっと見つめる。そして足を外すと真次郎の脇にしゃがみ込む。

「本当に何も覚えてないの？」

「……はい」

「それじゃ聞くけど、麻里恵って人と貴方とはどういう関係だったの？」

「……それが、全く……何も、記憶に、無い……んです」

「それじゃどうしてここまで来たのよ、貴方は旅館に来て、麻里恵という人に会いに来たって言ったじゃないの」

「それは……頭の中に、その名前だけが……あって、それが誰なのか……は思い出せなかった。だから……麻里恵に会って……俺と、どういう、関係だったのか……を、麻里恵に、教えて、貰いたくて……それで、来た……んです」

「……それは本当なの？」

「はい、旅館の名前……は、沙奈さん……が、教えてくれたから……それだけを頼りに、来ま……した」

「そうですか……」

真次郎の話すことを聞いて何か考えを変えたのか、女の顔つきが違っている。

「……相沢さん。貴方のことは私も沙奈から伺っておりますけど、残念なんです。貴方が思い出しにしておられる麻里恵さんという方と、私の母とは名前は同じでも全くの別人で、何の関係もない人間なんですよ」

「……嘘だ！ 今更何を言ってるんだ……真次郎の頭に直観が走る。あの旅館で、気を失って倒れていく老女の姿が再生される。あの老女は……俺の名前を聞いて倒れたんだ。アレは、あまりにも驚いて気を失ったんじゃないのか！

……いや間違いない、俺の名前を聞いて倒れたんだ。名前を聞いて

て、俺を見たから倒れた……俺のことを知ってるんだ。あのお婆さんは、やっぱり俺の中にいる麻里恵なんだ。

この麻里恵の娘だと思われる旅館の女は、先ほどの怒りを込めた口調から一変して、優しい仲居さんの様な口調になって言う。

「遠いところを折角来て頂いたのに申し訳ないのですが、きつと貴方の思い出の中にいる麻里恵さんは、ここじゃない何処か余所にいる方なんだと思いますよ」

もう、騙されないぞ……真次郎は頭の中で必死に考えて、筋道を立ててみる。

……この人は、沙奈さんのお母さんで、麻里恵の娘なんだ。そして、この人は俺を殺そうとした。そして麻里恵のことを、俺の記憶の中にいる麻里恵とは別人であると嘘をついている……。

……何故だ！ 俺はそれ程、ここへ来ちゃいけない人間だったのか？ この人にとって、俺は有無を言わさず殺さなければならぬ程、招かれざる客だったというのか……。

ガチャリとドアを開けて沙奈が入ってくる。

「どうしたの！ 相沢さん！」

「ベッドから落ちたのよ、早く看護師さんと呼んで」

「何やってたのよお母さん」

「自分で動いてベッドから落ちたんだよ」

そう言いながらまた真次郎のことを凄い目で睨み付ける。

「ナースコールは？」

「えっ？」

「もうくお母さんたらさつきもコレ押したら看護師さんがすぐ来てくれたじゃない！」

沙奈はまたベッドの頭上に下がっているナースコールのスイッチを押す。

やがて看護師が駆け込んで来る。床に寝て頭から出血している真次郎を見ると驚いて沙奈に手伝わせ、両腕を抱えて真次郎を起こす。頭の包帯が赤く染まっている。二人は真次郎を支えて病室を出る。

と、治療室へと真次郎を運んで行く。

パツクリと開いてしまった後頭部の傷口を医師が縫合する間、真次郎を殺そうとした沙奈の母親が医師に説明している。

「急にベッドの上で暴れ出して、床に転げ落ちたんですよ」

……違う、この女が俺を引き摺り落として、殺そうとしたのだ……しかし今この医者にそう言っても、多分信じて貰えないだろう。何しろこの女が俺を殺さなければならぬ理由が無い。説明しようにも俺にも解からないのだ。何よりも俺はボケて勝手に施設を抜け出して徘徊し、こんな遠い所まで来てしまったボケ老人という認識で見られている。

それよりも何故俺を殺す必要があるのか、そっちが知りたい。俺はこの女に何をしたらと言うのか。

ふと見ると、医師に真次郎がベッドから落ちたことを説明している母親の顔を、沙奈が不審に満ちた目でじっと見つめている。

真次郎は治療を終えると沙奈と母親に支えられて、再び元の病室へと戻される。

「大丈夫ですか、いきなりベッドから落ちたので、驚きましたよ……」と言いながら、沙奈の母親は様子を伺う様にしてじっと真次郎の顔を覗き込んでくる。

真次郎は何も言わない。沙奈と母親が話し掛けてもただ虚ろな目で、二人の顔をながめている。

それを見て安心した様に母親が言う「驚きましたけど、でもご無事で何よりでしたね」

沙奈はそんな母をじっと見つめて口を開く。

「……ねえお母さん。もしかして母さんが相沢さんをベッドから落したんじゃないの？」

母親の動きが止まる。

「……何言ってるの。そんなことする訳ないじゃないの」

「だって、考えてみたら、旅館の部屋で倒れたっていうのも。母さんがやったんじゃないの？」

「なんでよ、何の為に私がそんなことしなきゃならないのよ。バカなこと言うもんじゃないよ」

「だって、転んで頭を打ったにしては怪我が酷すぎるもの……」

「どうして私がそんなことするのよ」

「それは……何か相沢さんのことを、恨んでることがあって」

「な、何言ってるのよ！ バカなこと言うもんじゃないよ……」

と言いなながらも、激しく動揺しているのが解る。

「……ねえ、お母さん。私、相沢さんをお祖母ちゃんに会わせてあげたいんだけど」

瞬間母親はギリリとした様に身体を震わせ、沙奈の顔を見る。

「……どうしてよ。何の関係もないのに」

「例え関係なくなたって、相沢さんの思ってるマリさんとお祖母ちゃんが別人だったとしても、こんなに苦労してここまで来たんだから、別人なら別人だっていうこと、相沢さんにもちゃんと納得させてあげた方が良くと思うのよ」

「そんなことは絶対にダメだよ」

「どうしてよ」

「どうしてもよ」

「だから何ですよ！」

「……」

「どういうつもりなの？」

「なにがよ」

「本当に何も関係ないの？」

「だから何がよ？」

「相沢さんとお祖母ちゃんだよ」

「当たり前じゃないか」

「じゃどうして殺そうとしたの？」

「だからそんなバカなこと言うんじゃないよ！」

「そんなに相沢さんとお祖母ちゃんを会わせちゃいけない理由でもあるの？」

「無いよ」

「だったら会わせてもいいじゃない」

「ダメだよ」

「だから何で？」

「だから何でもだよ」

「だって何の関係もないんでしょ」

「勿論だよ」

「嘘！」

「……」

母親は何か弱気になったのか泣きそうな表情になり、懇願する様に言う。

「……沙奈、私がお前に隠し事なんてしたことがあったかい？」

「だって……」

「……何よ」

「……ねえお母さん。たとえ相沢さんの勘違いだったとしても、私は相沢さんにお祖母ちゃんと会わせてあげたいのよ。だって、こんな思いまでして、一人ぼっちで、無茶してこんなに遠くまで来たんじゃない。だから、勘違いだったなら勘違いだったってこと相沢さんに納得して貰ってから、帰った方がいいと思うのよ。お祖母ちゃんとはたまたま同じ名前だっただけで、相沢さんと深い関係があった麻里恵さんとは別人だっていうことを」

「……」

「だって本当に関係ないなら別に会ったって何も問題無いじゃない？」

「……」

母親は追い詰められた様な表情になり、震えているのか強張っている。

「……ねえ、何があったの？ 私もう解ったよ。ねえお母さん。も

う誤魔化そうったって無理だからね。相沢さんが思ってた麻里恵さんて人は、本当にお祖母ちゃんのことだったんでしよう？」

「違うよ」

「嘘よ！」

「そんなのお前には関係のないことだろう」

「なんでよ」

「もう遠い昔のことなんだから」

「でも相沢さんはまだしっかり生きててここにいるじゃない」

「……」

「ねえどうして！　なんで教えてくれないの？」

「ねえもう、勘弁しておくれよ……お祖母ちゃんのことには、お前が関わることはないんだから」

「嫌だ」

「なんでよ」

「だって私は、相沢さんの力になってあげたいんだもの」

「このお爺さんがどうしたって言うのよ」

「相沢さんは……本当に麻里恵さんという人のこと愛してたんだよ。私はそのこと良く知ってるから、羨ましかったの、男の人から、こんな風に生涯思われる女性がいるなんて」

「この男は愛してなんかいないわよ！」

「どうしてよ！」

「……」

「ねえどうして？　相沢さんはお祖母ちゃんのこと愛してなかったっていうの？　どうして？　そんなの信じられない。だって相沢さんは私のことお祖母ちゃんと間違えて、いつも愛してる愛してるって、手を握って涙流してたんだよ」

「……」

「ねえ、お母さん。お母さんだって本当は相沢さんのこと知ってるんじゃないの？」

「……」

「ねえ、知ってるんでしよう。もう誤魔化し切れないよ。観念しなよ、もう私は騙されないからね」

「……お前バカじゃないの？ 何でそんな男にお祖母ちゃんのこと教えたのよ！ 騙されてるのよ、この男がどんな人間だか解ってないんだよ」

「どんな人間って、どういうこと？ やっぱり母さんは相沢さんのこと知ってるんだね」

「……」

「ねえ、黙ってないで答えてよ、相沢さんとお祖母ちゃんはどういう関係だったの？」

遂に観念した様に母親は、ベッドで虚ろな目をしている真次郎の顔を覗き込んで言う。

「貴方は……もう本当に、何しに来たのよ！」

「だからそれは相沢さんにも、解らないんだって。相沢さんは自分のことが解んなくて、だから、それを知りたいから自分が名前だけを憶えてたお祖母ちゃんに会いに来たんじゃない」

「そんなのは嘘だよ、それじゃうる覚えの人に会う為にわざわざこんな遠いところまで苦労して来たっていうの？ そんなこと信じられないよ」

そう言われても、真次郎には本当に解らない。自分と麻里恵とがどんな関係だったのか、それを一番知りたいのは真次郎自身なのだ。ぼくつと横になっている真次郎が言葉を発する「貴方は……」。急に喋り出した真次郎に母親はギョツとした顔をする。

「貴方……は俺と、麻里恵が、ど……ういう関係、だった……か、知ってるんです……ね？ 知ってる……んなら、教えて、下さい」

「貴方は本当に、本当に解らないの？」

「……」

母親は真次郎の顔をまじまじと見る。しかしどんなに見られても真次郎にさえ、どんな顔をしていいのかも解からない。

そして、母親は遂に何かを見極めたのか、それまでの猜疑心に満

ちていた表情がスツと緩み、何か安堵した様な穏やかな顔になる。そして言う。

「そう……じゃこの人は、うろ覚えにお祖母ちゃんのことを覚えてはいても、自分が何をしたのかってことまでは思い出せないってことなのね」

「そうだよ」

「そう……」

そして母親はしばし考え込む様な表情をした後、よしという様にひとつ頷いて、沙奈に言う。

「……沙奈は、本当にこの男がどういう人間なのか知りたいのかい？」

「だから相沢さんもその為に来たんだって言ってるじゃない」

「それじゃ教えてあげるわよ……この人はね、あなたのお祖父ちゃんを殺した人なんだよ」

真次郎は目を見開く。

「そんな……」

真次郎の脳裏に、血しぶきを上げて倒れていく人の姿が再生される。そして「きゃー」と叫びをあげて顔に鮮血を浴びる少女。

血しぶきを浴びて泣いている少女の顔が、沙奈の母親の顔に重なっていく。

「……そうか、この人は……あの女の子なんだ……。お祖父ちゃん……今この人はお祖父ちゃんと言った……お祖父ちゃん。つまり沙奈さんのお祖父ちゃん。この人の父親、麻里恵の夫だということか。そうか、俺の記憶の中で血を噴き出して倒れていく人は、麻里恵の夫だったのか、俺は……麻里恵の夫を殺したのか……」

「殺されたって？ お祖父ちゃんが？ お祖父ちゃんは戦争に行つて亡くなったって言ったじゃない、戦争から帰って来たの？ それから殺されたの？」

「そうだよ」

「私そんなこと全然知らなかったよ」

「お前が知らなくてもいいことだったんだよ」

真次郎は呆然として沙奈と母親の言い合いを聞いている。そしてその内容を理解している。

「相沢さんは、何でお祖父ちゃんを殺したの？」

「それはお祖母ちゃんを自分の物にしたかったからだろう。この人の身勝手なんだよ」

「ねえ、どんな成り行きでお祖父ちゃんは殺されたの？ それまでお祖母ちゃんと相沢さんはどんな関係だったの？ どうして相沢さんはお祖父ちゃんを殺さなくちゃならなかったの？」

「……………」

「お祖母ちゃんにとって、相沢さんは自分の夫を殺した憎い相手だったっていうこと？。でも相沢さんはこんなに愛してたのに、お祖母ちゃんにとっては単なる横恋慕してきたストーカーみたいな人だったってこと？ お祖母ちゃんにとって相沢さんはそんなに嫌な存在だったの？」

「だからもう解ったろう？ 怪我が治ったらサツサとその人を連れて帰りなさいよ」

「嫌だ。だって、そんなのあんまりじゃない」

「あんまりだったって悪いのはこの人の方だろう。ホントのことなんだからしょうがないじゃないか」

「相沢さんはお祖母ちゃんと何処で知り合ったの？」

「もうそんなことどうだっていいじゃないか」

「よくない！ だって相沢さんはこんな身体なのにこんなに遠くまで一人で来て、やっとお祖母ちゃんのところを辿り着いたのに……………」

「だからそれが迷惑だって言ってるんだよ」

「だから殺そうとしたの？」

「……………なんだって？ バカなこと言うもんじゃないよ」

「そうなんです。旅館のことだって……………」

「だからそれはテールブルに頭をぶつけたから……………」

「背中に沢山痣があるのだから、施設にいた時は無かったもの、転

んだあとでまたお母さんが蹴ったりしたんじゃないの？」

「何言ってるのよ」

「私警察に言うよ」

「バカなこと言うもんじゃないよ！」

「私ホントに言うよ。今のままだったらただの事故で済むかもしれないけど、昔お祖母ちゃんと相沢さんに関係があったってことが解ったら、警察の人だって本気で調べてくれるかもしれないじゃない」

母親は怒りに満ちた目でブルブルと震えながら、沙奈のことを睨む。

「……アンタって人は、一体母さんと、自分のお祖父ちゃんを殺したその人と、どっちが大事なんだよ」

「どっちでもないよ、ただ私は昔何があったのか知りたいだけ、お祖母ちゃんと相沢さんは何処で知り合ったの？ だって知り合わなきゃ好きになるわけもないじゃない。それじゃお祖母ちゃんはどうなの？ 相沢さんのことが好きだったんじゃないの？」

「だからそんなことはもう済んだことなんだから、どうだっていいじゃないか」

「相沢さんとお祖母ちゃんはどうな関係だったの？ お母さん知ってるんでしよう？ 教えてよ、もう私だって大人なんだから教えてくれたっていいじゃない！」

「……」

母親はじつと沙奈の顔を睨みながら、何か考えあぐねている様子である。そしてまたふうつと観念した様のため息をつく、病室に置かれている椅子に腰を降ろす。

「よし……もうそれじゃ、私が覚えていることと、私が今までにお祖母ちゃんから聞いたことを、全部話してやるから、そこへ座んなさいよ」

沙奈はもうひとつある椅子を母親の前に置き、向い合う様にして腰を降ろす。

母親は頭の中を整理する様に考えながら、沙奈に話を始める。

「……それはまだ戦争が始まる前の、もうずっとずっと昔のことだけどね、元々この人とお祖母ちゃんとは、アンタも通ってた長町小学校に通ってる同級生だったんだよ。その頃はまだ尋常小学校って言ってたけどね」

……長町小学校……真次郎の脳裏にその名前がこだましていく……広い校庭が見えてくる。小学生の真次郎は校庭を駆けずり回っている。青い空と、遠くに山々が見える。あれは六甲山だろうか。振り返ると横長の木造校舎に教室が並んでいる。

沙奈に話している母親の声が続いている「……この人は悪くってね、お祖母ちゃんをよく苛められたって言ってたよ。お便所に閉じ込められて、ドアの上からホースで水をかけられたりしたって言ってたよ」

小学生の真次郎は麻里恵を木造の便所の個室に閉じ込めている。押さえて中から出られない様にして、ドアの上からホースでジャバジャバと水をかける。

中で「いやだ！ やめてよ」と麻里恵が言っても真次郎はやめない。中から出て来た麻里恵はびしょ濡れになっている。それでも麻里恵は怒らない「もうくやめてよ」というだけで、困った様に笑っている。

他にも捕まえて来たバツタを背中に入れようとしたり、お弁当のオカズを取ってしまったたり、真次郎の脳裏に、小学生時代の麻里恵を苛めている数々の悪行が映し出されていく。

でも麻里恵は真次郎に何をされても怒らない。机に落書きをしても、教科書を取り上げて校舎の外へ放り投げてしまっても「もうく何でそんなことするのよ」と困った様に言っっては取りに行く。

真次郎がどんな悪さをして、麻里恵が怒らないので、真次郎の

悪さは一層度を増していく。靴箱から麻里恵の履いて来た靴を盗み、校庭の隅にある池に浮かべてしまう。靴は池の縁から離れて手の届かないところに浮いている。それを見た麻里恵は困って立ち尽くしたまま泣き出してしまう。

真次郎は笑っていたが、麻里恵が泣いたのを見ると仕方がないと思いい、裸足になってズボン濡らしながら池にジャブジャブと入っていく。

やっこのことで麻里恵の靴を取り、池の外へ投げてやる。麻里恵は「ありがとう」と言って靴を拾う。

そんな光景が次々と走馬灯の様に脳裏に映し出されて行く。沙奈に話している母親の声が続いている。

「小学校の頃はずくと苛められてたって言ってたけど、一度他所の学校の生徒に苛められそうになった時にね、この人が取っ組み合いの喧嘩をして助けてくれたこともあったって言ってたよ」

放課後の帰り道、他校の生徒が三人で麻里恵を通せんぼしている。それを見た時、真次郎はいつもは自分が苛めているのに、麻里恵が他の生徒に苛められていると思っただ途端にムカムカと腹が立ち、走り出して有無を言わせず殴り掛かり、そのまま三人と取っ組み合いになる。

「早く、マリちゃん逃げろ！」

麻里恵は走り出して角を曲がる。相手が三人なので思う様にやっつけることが出来ない。

真次郎は地面に倒されて上からのし掛かられてしまう。三人は良様に真次郎の顔を殴る、足で踏み付けにする。

「ちくしよう、ちくしよう」

と暴れながら見ると、麻里恵が曲がった角から顔を出して心配そうに見ている。

散々にやられた後、三人は行ってしまったが、真次郎は自分が負けたことが恥しくて、麻里恵が出て来て「大丈夫？」と声を掛けても無視してズンズン歩いて行く。

「小学生の頃はそんな感じだったらしいけど、小学校を卒業した時に、この人は二年間の高等小学校へ行って、お祖母ちゃんは五年間の高等女学校へ入ったから、別々になっちゃったんだよ。でもね、この人の父親は植木屋の職人さんで、この人も高等小学校を出てからは植木屋の見習いになって、ウチの旅館にも時々お庭の木の剪定に来てたらしいのよ」

「庭の、剪定……十四歳になった真次郎はモミジの木に立て掛けた梯子に登り、選んだ小枝を手で折っては、下に落としていく。そこは麻里恵の実家である桜華園の庭である。他の木でも同じように職人が作業している。その中には真次郎の父親もいる。」

「それでちょうどお祖母ちゃんが旅館にいる時に、この人が梯子に乗って枝を切ってるのを見つけてね、お祖母ちゃんが窓から手を振ったら、この人も手を振り返してくれたんだけど……」

真次郎が梯子の上で枝を切っている時、ふと見ると旅館の二階の窓から十四歳の麻里恵が手を振っている。学校から帰ったところなのか、女学校の制服を着ている。驚いて笑いながら真次郎も手を振り返す。

「でもね、この人は後でそれを見ていたお父さんから殴られてたつて言ってたわ」

真次郎が梯子を下りて来ると、後からいきなりゴツンと頭を殴られる。見ると父親である「コラッ！ 旅館のお嬢さんに気安く手なんか振るんじゃない！」

殴られたところを手で押さえてしょんぼりしていると、物陰から麻里恵が父親や他の職人たちに見つからない様に、そっと手を振り、口の形が「だいじょうぶ？」と言っている様に動く。真次郎は強がつて笑顔を作り、大丈夫だという風にそっと手を振る。

「でもそれから何年かしてアメリカとの戦争が始まって、それがだんだん激しくなるに連れて、食べ物も無くなって、旅館の経営も苦

しくなっちゃったんだよ。戦争が始まって三年くらい経った頃、お祖母ちゃんが十九歳の時に、旅館に出入りしてた伊丹町の造り酒屋の谷本さんのところへお嫁に行くことになってね」

「十九歳って、お祖母ちゃんはそんなに早く結婚したの？」

「昔はそれが当たり前だったんだよ。谷本さんの息子さんは兵隊さんで中国に行ってたんだけど、満洲から一時帰国してまた南方へ出發することになってたから、その間にお嫁さんを貰わなきゃならなくて、祝言もかなり慌しかったらしいよ」

「ふう〜ん」

「それからこの人も、十九歳で徴兵検査を受けて、お祖父ちゃんと同じ部隊で神戸の港から船に乗って行ったんだよ」

グオン、グオン〜ゴ〜ゴゴゴゴゴゴ……。

地鳴りの様に船のエンジン音が響く。軍服を着た真次郎たちを乗せた輸送船はユラリと動き出し、港を離れて行く。真次郎は大勢の兵隊たちと共に、狭い船室の中でギューギューに詰まって座っている。

これから一体何処へ連れて行かれるのか、上官からは南方にある島だとしか聞かされていない。神戸の街も何度も空襲されているので、敵の飛行機を見たことはあるが、まだ実際に戦場で敵と戦ったことはない。

兵隊として戦地へ行くことは当たり前のことなので、もう日本へは帰れなくても仕方がないと思っている。恐いとか行きたくないという気持ちも浮かぶこともない。それはすし詰めになって座っている他の兵隊たちも皆同じだろうと思う。

「なにしろお祖父ちゃんは一週間しか神戸にいられなかったからね、祝言を挙げたお祖父ちゃんとお祖母ちゃんの新婚生活は、三日間しか無かったのよ」

「三日間って、そんなの酷い」

「でも当時は出征する前に慌てて結婚する人が多かったから、そん

なの珍しいことじゃなかったんだよ。それでもお祖母ちゃんは妊娠してね、お祖父ちゃんが戦争に行ってる間に私が産まれて、お祖母ちゃんはお祖父ちゃんが無事で帰って来るのを信じて待ってたんだよ。お祖父ちゃんは戦地から何枚も葉書を送ってくれたらしいよ。日本の為に自分は死ななきゃならないのに、お祖母ちゃんと私を残して行くのが心残りで、自分は死んでもずっと二人のことを見守ってるって、遺書みたいな内容ばかりだったらしいよ」

母親の話をお祖母は神妙な顔をして聞いている。

「それから戦争が激しくなると、神戸もどんどん激しく空襲される様になってね、お祖母ちゃんがお嫁に行って住んでた伊丹町の谷本酒造の家も酒蔵も焼かれてしまって、お祖母ちゃんはまだ赤ん坊だった私を連れてお祖父ちゃんの親戚の家へ避難したらしいよ。けど食べ物もろくにないし、厄介者みたいに扱われてね、その頃の話を聞くと、ずい分苦労したらしいわよ」

「ふうん」

沙奈は母親の話聞きながら、遠い昔に思いを馳せている様子がある。

「その頃お祖父ちゃんの方は南方の戦地で大怪我をしてね、そのまま終戦になって、船に乗って帰って来たんだけど、船着き場に辿り着くまで担架に乗せられて運ばれて、ろくな食べ物も無いし、何日も山の中のジャングルを歩いて、大変な思いをして帰って来たらしいわよ」

「……ジャングル……そうだ。俺も歩いた。何日も何日も……」

「きつとこの人も、同じ思いをして来たんでしょねえ」

真次郎の視界にジャングルが広がる。そう、それは良く知っている。何度も見ているあのジャングルだ。

「……もう何日も草の根や木の芽しか食べていない。そして何日もこうして草木の生い茂る中をさ迷っている。軍服もボロボロである。それでも歩くしかないから、俺はこうして歩いている。」

「……途中で道端にうずくまっている戦友を見つけて声を掛ける」

おい、大丈夫か？」そいつは顔も上げずに「……大丈夫だ、後から行くから……先に行ってくれ」と言う。こいつはもう歩けない。ここに置いていたら、そのままここで死ぬんだろう。それでも、俺は自分だけ歩いて行く。だって自分だけで精一杯じゃないか……。

沙奈の母親の話は続いている。

「それでお祖母ちゃんが親戚の家で私を連れて苦労してるうちに、やっと終戦になってね、それからふた月くらいして、お祖父ちゃんたちを乗せた復員船が神戸に着いたんだよ。お祖父ちゃんは大怪我して担架に乗せられてたけど、お祖母ちゃんは何しろ生きて帰って来てくれたことが嬉しくて、おいおい泣いたって言ってたよ」

真次郎も今、何日も海の上を揺られてやっと戻って来た神戸の港へ、他の戦友たちと共にタラップをガチャガチャ鳴らしながら降りて行く。

「それがね、その時は声を掛けなかったらしいんだけど、実はこの人も同じ船に乗っていて、後から聞いたらその時お祖母ちゃんがお祖父ちゃんにしがみついて泣いてるのを見たんだって言われたらしいんだよ」

タラップから栈橋へ降りる。出迎えに来た沢山の人が見つめている中を、復員した兵隊たちは皆ボロボロの軍服をまとい、足取りもおぼつかない調子で歩いて行く。

見ると先に担架に乗せて降ろされていた伍長さんがいる。その身体に赤子を背負った女がすがり付いて泣いている。

……ああ、あの人は確か怪我の具合が大分悪くて、船の中で寝たままずっと唸り声を上げていた人だな……無事に帰り着けて良かったな……。

と思っただけを側を通り過ぎながら、ふと寄り添って泣いている女を見てハッとすると。

……あれ？ この人は……この人はマリちゃんじゃないのか……。

担架に乗せられた夫の身体に顔を伏せて泣いているので横顔しか見えないが、よく見ると確かにそれは麻里恵である。

マリちゃん……そうか、マリちゃんはこの伍長さんの奥さんになつていたのか。背中に背負つてる赤ちゃんはまだ一歳くらいかな、旦那さんは怪我をしたけど、でも生きて帰って来れて良かったね。思いがけずこんな形で再会したことに、切なさや懐かしさがない交ぜになつている。

真次郎は泣いている麻里恵の側を、声も掛けずに通り過ぎるとそのまま歩いて行く。真次郎は思う。ああ、本当に日本に帰って来たんだ……。

「どうしてその時は声を掛けなかったの？」

と沙奈が母親に質問する。

「さあねえ、きつと夫婦が涙の再会をしてるから、自分が邪魔しちやいけないとも思つたんじゃないのかねえ、ねえ相沢さん？」

とベッドに寝ている真次郎に言うが、真次郎は解かっているのかいないのか、宙を見つめたまま黙っている。

「それでね、そのまま相沢さんは自分の家があつた場所まで歩いて戻つて行つたらしいんだけど……」

真次郎はまだ焦げ臭い匂いが漂う中を歩いている。街があつた筈の土地が、一面荒涼たる瓦礫の山になつている。一体何処が道だったのか、何処から何処までが一軒の家だったのか、どの瓦礫がどの家の物なのかも解からない。足の踏み場もなく焼け焦げた残骸が、何処までも地面を覆い尽くしている。

「神戸もすっかりやられてたからねえ、この人の家も全焼して無くなつてしまつてたんだよ」

辺りにはまだ燻ぶつているのか煙を立てているところもある。真次郎はボロボロの軍服のまま、ゲートルを巻いた足で歩いている。

時おり残っている電柱に書いてある番地や、崩れてしまつている見覚えのある建物をたよりに、道を辿って行く。

……確かこの辺り……そうだ。確かに、ここだ。家は燃えて無くなつているけれど、焼け残つた布団の切れっ端の柄に見覚えがある。玄関と便所の穴がある場所も合つてる……ここに間違いない。

「でもね、家にいるはずのご両親と妹さんが見つからなくて、この人は方々に聞いて回ったらしいよ」

真次郎は近くを歩いている人に尋ねる「すみません。私は相沢という者ですが、ここに住んでた人が何処にいるか知りませんか？」だがその人は返事もせずに行ってしまう。

また別の人に尋ねる「あおう、ここにあつた家に両親と妹がいた筈なんですが、相沢と言います。何処にいるかご存じないでしょうか？」するとその人は「隣町にある小学校の校庭に避難してるかもしれないよ」と教えてくれる。

「そうですか、ありがとうございます」と言っただけで真次郎は教えられた方向へトボトボと歩いて行く。歩く先にもずっと焦げた瓦礫が広がっている。

暫く歩いて、やっと広い校庭の様なところに人が集まっているのが見えてくる。だが近付いて行って真次郎は愕然とする。そこには大きな穴が掘られており、その中に山積みになされた人々の遺体が燃やされている。

「……」

「でも結局ね、この人が散々聞いて回って分かったことは、空襲の時にご両親と妹さんが避難してた防空壕が爆弾で埋まってしまつて、中にいた人は全滅したらしいのよ。そのご遺体も全部茶毘に伏された後で、遺留品も何も残ってなかつたんだって……」

「そんな、酷い……」

沙奈が見ると、真次郎はぼくつとしている。その目には荒涼たる焼け跡が映っている。

真次郎はただ呆然として、瓦礫の中に佇んでいる。これからどうしたらいいのかも解からない。

「それから暫くしてお祖母ちゃんたちは谷本酒造の家を建て直して、お祖父ちゃんと一緒に住むようになったらしいんだけど、お酒を造る設備も焼けちゃったからね。すぐにはまた商売を始めることが出来なくて、酒蔵の職人さんたちを使って大阪や三宮に出来た闇市

にトラックで荷物を運ぶ仕事を始めたそうだよ。お祖父ちゃんの家は元々トラックでお酒の原料を仕入れたり、作ったお酒を配達したりしてたから、その時の伝手を頼りにずい分派手にやったらしいよ」

「ふうくん」

「その一方でこの人はね、南方の戦地で知り合った人の伝手を頼って、東京に行って運送会社に就職したんだよ」

運送会社……そうだ。俺は、一人で汽車に乗って東京へ出た。

駅のホーム。汽笛が鳴り響く。ガコツと衝撃があつて、ゆっくりと列車は走り出す。

真次郎は客車に座って窓外を見ている。生まれ育った神戸の街を離れて行く。メチャメチャに破壊され、黒い焼け野原になった神戸が流れて行く。もう何の未練もない、ここにいても、家族はいない。だが悲しくて涙がポロポロこぼれてしまう。

「さようなら……神戸」

と真次郎は呟く。見る見る後へと飛び過ぎて行く廃墟のような神戸に別れを告げる。戦争が神戸の街をこんなにも酷い風景にしてしまった。

「お祖父ちゃんたちは暫く闇市の仕事で荒稼ぎしてたらしいけど、でも四年くらいして占領軍が闇市を廃止にしちゃったからね、また家業の酒造りを始めるしかなかったんだよ」

「ふうくん。皆大変だったんだね」

「そうだよ。それからまた何年も掛かってようやくお酒の製造と販売が戦前と同じくらいの規模に戻って来たのよ。それで東京の間屋さんからも注文が来る様になってね。そしたら東京でこの人が働いてた運送会社で、東京から大阪まで荷物を運送するトラックの直行便が始まって、この人はその運転手になったのよ」

真次郎はトラックのハンドルを握っている。助手席では同僚が眠っている。潮風が匂う。フロントガラスには青い海が広がっている。……そうだ。これは清水の港だ。

真次郎はもう二度と、神戸へは帰らないと思っていた。思い出は

何も無い。全ては瓦礫になってしまった。でも、今こうしてまた神戸に近付いて来ると、否応も無く懐かしさが込み上げてしまう。

同僚が寝ている横でハンドルを握りながら、頬を涙が流れては落ちる。

「それでね、伊丹町のお祖父ちゃんの子会社から東京の間屋さんまで、お酒を運ぶのに頼んだ運送会社のトラックに乗って、この人が現れたのよ」

「それでまたお祖母ちゃんと会ったんだね」

「そうだよ……」

「オーライ！ オーライ！ オーライッ……」

真次郎は運転席から身を乗り出して後方を見る。同僚が声を上げながら手を回すのを見て、慎重にアクセルを踏んでトラックをバックさせる。

トラックは谷本酒造の酒蔵の中へ入って行く。出来るだけ一升瓶の入ったケースが積まれている側まで、トラックの荷台を近付けたい。

「オーライ……オーライ……はいストップ！」

エンジンを止め、手動ブレーキを引くとドアを開けて飛び降りて行く。

そして同僚と二人で瓶詰にされた日本酒のケースを荷台に積んでいく。木枠で作られたケースひとつに一升瓶が十本ずつ。それを荷台に隙間なく積み上げて行く。

今真次郎は、その時ケースの縁を握った手の感触も、そのひとつひとつの重みも感じている。額を流れる汗を拭う暇も惜しんで、次々にケースを積んで行く。

コツン……コツン……と音がするのでふと見ると、酒蔵の入口から誰かが入って来る。その男は杖を突いて、片足を引き摺って歩いている。

あつ……この人は、あの時の伍長さんじゃないのか！ 戦争が終わって帰って来た時、俺と同じ復員船に乗って神戸に着いて。怪我

をして担架に乗せられていた。その身体に子供を背負ったマリちゃんすがり付いて泣いていた……。

この人がこの社長なのか……とすると、マリちゃんもここにいらっしゃるって言うことか？ 何処に？

思わず辺りを見回しても見当たらない。ここは仕事場だから、奥さんがここへ来るということはないのかもしれない。

ようやく荷台への積み込みが終わって一息入れていると、真次郎たちに出すお茶をお盆に乗せて、三十一歳になった麻里恵が入ってくる。だが最初は真次郎にも分からなかった。その姿は、見る影もなくやつれて別人のようだ。

……この人が本当にあのマリちゃんなのか？

でも目を凝らしてよく見ると、真次郎には分かる。ああやつぱりこの人は間違いなく麻里恵だ。

あれから怪我をしたご主人と赤子を抱えて苦労したんだろうか、社長の奥さんと言ってもやつぱり戦後の混乱の中で、大変な目に遭って来たんだろうか。

じつと見つめていても、目が合っても麻里恵は一向に真次郎に気付いてくれない。それは一生懸命に給仕をしているからなのか、それとも長い年月が経っているので真次郎の顔も変わってしまったているからなのか。それとももう覚えていないのか。いや、そもそもこんなところに真次郎がいる等とは思ってもいないだろうから、無理もないのかもしれない。

小学生の頃毎日の様に苛めていた麻里恵。そして復員船が着いた時、港で泣いていた麻里恵が、今はこんな風になっていたのかと、言い知れぬ感慨と愛おしさが込み上げて来る。

真次郎は社長がいなくなってから機会を見計らい、思い切って声を掛ける。

「あろう」

「はい？」

麻里恵は運送屋の運転手が私に何の様なのかと、ビックリした顔

をして真次郎を見る。

「……失礼ですが、奥様。昔、長町小学校に通っていらつしやいましたよね？」

「はあ？」

「私の顔に見覚えはございませんでしょうか？」

麻里恵はきよとんととして、考える様な顔をする。

「実は、俺も同じ学校に通ってまして、奥様の隣の席に座っていたこともあるんですよ」

「えっ……」

「思い出せませんか」

そのうちに真次郎を見つめていた麻里恵の目はみるみるドンダリの様に見開かれていく。

「あっ……ああ！ 相沢君！ 相沢君なの？」

そう言って笑顔になると、途端にあの頃の麻里恵に戻る。

「そうだよ、マリちゃんだろう？ 俺同級生だった相沢真次郎だよ」「なんだく本当？ いやだどうしてたのよ」

と麻里恵は真次郎の手を取って喜ぶ。

「酷いよなあ、ちつとも分かっちゃくれねえんだもの」

「だってえ、まさかこんなところにいるなんて……」

病室で沙奈の母親の話す声が続けている。

「……お祖母ちゃんとこの人は元々が小学校の同級生だったから、その頃の懐かしさが手伝って、仲良くなってしまったのかもしれないね」

小学生の頃あんなに苛めてたのに、麻里恵はそんなこと微塵も気にしていない様子で、真次郎の手をとってぴよんぴよん跳ねながら、懐かしい懐かしいと言って笑っている。真次郎も物凄く嬉しくなつて、麻里恵の手を握る。

「おい！ 麻里恵！」と怒鳴る声が響く。二人は咄嗟に手を離す。

カツンカツンと杖を突く音を響かせて社長が現れる。途端に麻里恵は黙ってしまい、小声で「ごめん、また会えるわよね」と真次郎

に言つて社長の方に向き直ると「はい、只今」と返事をして、小走りにその場を離れて行く。

「……この人のいた運送会社はね、お祖父ちゃんの谷本酒造と契約してたから、それからこの人は月に二〜三回トラックで神戸の会社にお酒を積みに来る様になったのよ」

「ふう〜ん」

沙奈は興味津々といった顔で聞き入っている。

「それで、この人はお祖父ちゃんの目を盗んでお祖母ちゃんに手紙を渡したりしてね、二人で待合せして会う様になったんだよ。最初の待合せは三宮の花時計だったらしいわよ」

大通りの脇にある円い花畑が時計の文字盤になっている。長い針と短い針が既に約束の時間を過ぎていることを示している。

真次郎は神戸までトラックを運転して来たままの作業着姿で待っている。一緒に来ている同僚には知人に会うからと言い、同僚を残して一人で宿を出て来ている。

カチャンと音を立てて、また長い分針がひとつ動く。時間だけが過ぎてなかなか麻里恵は現れない。

これ以上なくらいの大きな時計を見てそわそわしていると、視線の先に駅の方から駆けてくる麻里恵が見えてくる。

麻里恵は精一杯に着飾って来た。お化粧もして、あの酒蔵で見たやつれた感じとは全く違っている。その表情が、出で立ちが全て真次郎に会うことの嬉しさに満ちている。真次郎は驚き、そんな麻里恵をお花みたいに綺麗だと思う。

「ごめん、待たせちゃって……」とハアハア息を切らせて笑う顔が眩しい。恥かしい様な気がしてまともに見ることが出来ない。

小学生の頃、いつも苛めて泣かせていた、あの麻里恵は大人になって、こんなにも綺麗な女になったのだ。

「そこから二人でタクシーに乗って、六甲山のケーブルカー乗り場へ行って、六甲山へ登ったのよ……」

山の中の急な斜面をゴトゴトと揺れながらケーブルカーが登って

行く。

真次郎と麻里恵は並んで座っている。こうして二人きりになると途端に会話が弾まなくなってしまう、ただ時々麻里恵が真次郎を見ると、真次郎も微笑みを返す。

頂上へ着くと外へ出る。すぐ側にある展望台へと歩いて行く。

麻里恵と並んで、展望台の縁に立ち、遥かに広がる神戸港を見下ろしている。心地良い風が微かに吹いている。並んで見ているマリの横顔、白い項。黒い髪が風でそよいでいる。

「そこでこの人は、実は復員船を降りた時にお祖父ちゃんにすがり付いて泣いてるお祖母ちゃんのことを見たってことを話したのよ」

真次郎は風に吹かれながら、遠い海を見つめて言う。

「あのなマリちゃん。俺あの日神戸港に帰って来た時、マリちゃんのご主人と同じ船に乗ってたんだよ」

「えっ、本当？」

「うん、あの時、マリちゃんご主人の身体に寄り添って泣いてたよね。あの時俺、本当に戦争が終わって帰ってきたんだなあと思ったんだよ」

「……」

「御主人は大怪我をしたけれど、こんなに思ってた帰りを待ってくれる人がいるなんて、ご主人が羨ましいと思ったよ」

そう言うと、麻里恵は黙って俯いてしまう。どうしたんだろうと顔を覗き込むと、ポロポロと涙を流している。でもその時はまだ、その涙が意味するところは解らなかった。

麻里恵には酒造会社を営んでいる立派なご主人がいる。真次郎は麻里恵が自分と恋仲になるだろうなんてことは全く思いもしていない。

麻里恵は綺麗で、大好きだったが、初めは幼い頃から知っている親戚の様な感情だった。

そう、真次郎にはもう家族と呼べる人は一人もいなかったから、その寂しさからも真次郎は麻里恵の優しさに魅かれていったのかも

しれない。

その次に会った時、真次郎と麻里恵はそれが当然のこの様にして、また六甲山に登る。

そこへ行けばまた、二人きりになれることを知っているから。二人並んで、港を見下ろして、そしてキスする。

「相沢君……相沢君……いけないわよ、夫のいる私を好きになっちゃいけないわよ……」

「マリちゃん……好きだよ」

真次郎にはもう解かっている。麻里恵のご主人は、あの社長は、戦争で怪我をした谷本伍長は、麻里恵のことを女中の様にコキ使い、辛く当たっているのだ。それはまるで、怪我で体が不自由になった苛立ちをぶつける様に、麻里恵に辛く当たっているのだ。

「いけない、いけないわよ……」
そう言われれば言われる程、真次郎は気持ちを抑えられなくなつて、激しくキスする。

麻里恵は「いけない、いけない……」と言いながら、遂には真次郎の激しさに応えてしまう。真次郎は夢中になって、麻里恵の柔らかい唇を吸う。

「……それからこの人は、東京からお祖父ちゃんのお酒を積みに来る度に、秘密でお祖母ちゃんと会う様になったのよ」

「ふうん……」

と沙奈は深く頷く。

「それからついにお祖母ちゃんは、お祖父ちゃんには東京にいる高等女学校の同級生の家へ行くって嘘をついて、東京の阿佐ヶ谷ってところに住んでたこの人のアパートに行ったのよ」

その日、前もって麻里恵からの手紙で来ることを知らされていた真次郎は、ノックの音に胸を躍らせてドアを開く。

「私、来ちゃった……」

そこには麻里恵が立って笑っている。真次郎はまるで世界が自分の物になった様な気がする。

部屋に入れるなり麻里恵を力の限り抱きしめる。麻里恵が「ちよつと、苦しいわよ」と言っても力を緩めない。

……好きだ、好きだ、好きだ、大好きだよ麻里恵……その一心で真次郎の身体の全部が一杯になる。

麻里恵の温もりを感じている。真次郎の心臓と、麻里恵の心臓の鼓動が重なり、ひとつになっっていく。

「ちよつと……苦し……い……」

真次郎の腕の中で戸惑っている麻里恵の唇を塞ぐ。夢中になっ
て唇を吸う。

「んぐ……んん……っ……」

二人の唇がクチュクチュと音を立てる。言葉は無くなり、そのまま
ま連れ合って、畳に転がる。

それまで二人が会っていたのはいつも外で、展望台ばかりだった
から、服を脱ぐのは初めてなのだ。ひとつずつブラウスのボタンを
外していく。麻里恵の白い肌が露わになっっていく。麻里恵の温もり
が、匂いが、生きた女の生々しさが六畳の部屋一杯に広がっ
ていく。

麻里恵の肌
に夢中になっ
て唇を擦り付
ける「あっ、あ
あ」と麻
里恵は呻く。見ると瞑った目から涙が流れている。

「マリ……どうしたの」

「嬉しい、嬉しいよう。でも怖い……」

「大丈夫だよ。これからはずっと、ずっと俺と一緒にいるからね。
マリ、好きだよ」

と言っ
て真次郎は麻
里恵の身体を
開き、自分自
身をヌルヌル
と麻里恵の身
体の中に入れて
いく。そうして
心も身体も、全
部が麻里恵と
一体になる。

「ああ……わあ……」

麻里恵は白目を剥いて呻きながら、真次郎の身体に手足を絡ませ、
ギョウギョウとしがみ付いている。その力に真次郎は、もう離さな
い、もう離れないという麻里恵の強い気持ちを感じる。

真次郎は麻里恵から受け止めたその意志を倍返しにして、麻里恵

の身体に撃ち込んでいく。

「マリッ、マリ、マリ、マリ、わぁーっ……っ……」

「ひいっ……ひいっ……」

真次郎と麻里恵の繋がりを中心にして、世界が回り出して反転する。真次郎と麻里恵はもう離れられない。

「……こんなことは下世話な話だけどねえ、お祖父ちゃんは怪我をしたせいで性的には不能者になってたんだよ。お祖母ちゃんはまだ三歳だったから、そんな時にこの人がチョツカイを出して、お祖母ちゃんも幼馴染みだと思って気を許しちゃったんだろうね」

「そんな、偶然そうなっちゃったってこと？」

「そうだよ。この人がまた神戸に来て出会うなんてことがなければ、そうはならなかったでしょうに」

「まあ、それはそうだけど」

「ふん、まさかアンタはまだ男と女のことを、運命だとかなんだとかって考えてんじゃないでしょうね？」

「だって運命には違いないでしょ」

「ふん、だからいつまで経っても子供だっていうんだよ」

「うるさいよ。それで？ それからどうなったの？」

「お祖母ちゃんはそれからもお祖父ちゃんに嘘をついては何度も上京したりしてたんだけど、この人もお祖母ちゃんにのめり込んで行って、遂にはお祖母ちゃんは私とお祖父ちゃんを置いて、この人のところへ行っちゃったんだよ」

「へえっ」

「阿佐ヶ谷にあるこの人のアパートで二人で暮らす様になって、お祖母ちゃんは駅前の商店街にあるスーパーでレジ打ちのパート勤めをするようになったのよ」

真次郎は都内や近郊までの日帰り運送の日は、仕事が終わると日本橋にある本社にトラックを停めて、そこから阿佐ヶ谷まで電車で帰って来る。

そして阿佐ヶ谷の駅の改札を出て来ると、スーパーの仕事を終え

て待っていた麻里恵が走ってくる。

麻里恵は銭湯へ行く為のタオルと着替えを用意して来ている。真次郎はそれを受け取り、そのまま手を繋いで商店街を歩く。

二人で商店街の途中にある風呂屋へ入る。出て来ると一緒にラーメン屋に入り、ビールを飲んで、餃子を食べる。風呂上がりの麻里恵はツヤツヤしていて、屈託なくキャツキャと笑う。真次郎は醤油ラーメン。麻里恵は味噌ラーメン。途中でドンブリを交換して食べる。

麻里恵のパートが早く終わる日には、麻里恵はアパートで手料理を作り、真次郎の帰りを待っている。夕方帰って来ると部屋の窓から煮物を作る匂いが漂って来る。そして包丁でトントンと野菜を刻む音。

麻里恵が注いでくれるビールを飲み、暖かい手料理を食べながら真次郎は思う……自分は使われの身の運転手で、家族もいない、これと言って生き甲斐もなく、これからの人生に何かを望むということもない。でも、俺には麻里恵がいる。それだけでいい、他には何もいらないと思う。

もし真次郎が運転手になって神戸に行かなかったら、再会することも無かった。真次郎と麻里恵は元々家柄も違うし、まともに一緒になろうと思っても、なれなかったに違いない。

六畳一間の布団で抱き合って寝る。マリの素肌。身体の温もり、心臓の鼓動……流れている汗、荒い息遣い。目を瞑ったまま、麻里恵が呟く。

「いいのかしら……」

「えっ？　何がだい？」

「……私たち、こんなことして……」

「いいんだよ」

「でも、晴美は大丈夫かなあ、今頃ひとりで泣いてるんじゃないかしら」

麻里恵は神戸に置いて来てしまった娘のことを心配している。

「大丈夫だよ、きつと晴美ちゃんは、お父さんに大事にされてるから、心配いらないよ」

真次郎は麻里恵にこのままずっとここに居て欲しいので、そう言っただけで宥めるしかない。

「でも私、やっぱり悪いことしてるんじゃないかしら……」

麻里恵は泣いて、真次郎の身体にしがみ付いてくる。

「大丈夫だよ。俺がついてるよ」

……そりゃ世間から見れば、俺たちは許されないのかもしれない、でも、もうそんなことはどうだっていいじゃないか。麻里恵は俺が守ってやらなきゃ、一人じゃ何も出来ない。俺が引つ張り出してやらなきゃ、ずっとあのまま不幸せな人生を歩いていんだ……嫌、それは違うかもしれない。俺がチョツカイ出しちまったばかりに、人生を狂わせちまったのかもしれない。そうだとしたら、悪いのは俺だ。

「マリごめんな。俺がお前に手を出しちまったばかりに、こんなに苦しませることになっちゃったのかな」

「そんなこと言わないでよ。私はこうしてるのが幸せなんだから。」

私、何も後悔なんてしてないんだから……」

そう言うときまた抱きしめる腕に力が入り、夢中になってキスする。このまま永遠に時が止まってしまえばいい、このまま二人で死んでしまってもいいと思う。

「でもね、それから二年経って、この人の家にお祖母ちゃんがいるってことが、会社の人にバレて、お祖父ちゃんのところ連絡が入ったんだよ」

「それで？」

「その時私は十五歳だったんだけど、お祖父ちゃんは私を連れて東京に行って、この人とお祖母ちゃんがいるアパートに乗り込んで」

「それで？」

「それで、お祖母ちゃんを連れ戻そうとしたら、この人に包丁で刺されたんだよ」

「！……！」

「あの時、この人は父さんの杖を蹴飛ばしたんだよ。そして、父さんが転んで仰向けになったところを、上から包丁で突き刺したんだ。こんな風に！」

と言つて沙奈の母親は立ち上がり、ベッドに寝ている真次郎の胸に拳をドンと叩き付ける。

「ウゲッ」と言つて真次郎が身をよじる。

瞬間「きゃああああ〜〜〜きゃああああ〜〜〜！！！！！」と叫んでいる一五歳の晴美の顔に真っ赤な鮮血が飛び掛かる。

「ちよつとお母さん何するのよ」と言つて沙奈が真次郎の胸に打ち下ろされた母親の拳をつかんで持ち上げる。

カツと見開いた真次郎の目に、鮮血を浴びて叫んでいる一五歳の晴美の顔が、現在の沙奈の母親の顔に入れ替わっていく。

……この人が……晴美ちゃんなんだ。……俺が殺した男と、マリの娘。沙奈さんのお母さん……。

「お父さん！ お父さん！」と叫びながら、十五歳の晴美は倒れた谷本の身体を揺すっている。

そして呆然と立ち尽くしている真次郎の顔を見上げる。血を浴びて真っ赤な顔で、物凄い目をして真次郎のことを睨む。

アパートのドアをドンドンと叩く音がする「相沢さん？ どうしました？ 相沢さん？ 大丈夫ですか」

開かれたドアから中を見た近所の住人は仰天して走って行く。暫くするとサイレンを鳴らしてパトカーが来る。外が騒然とした雰囲気包まれていく。

雪崩れ込んで来た警察官に、晴美が血みどろの顔のまま真次郎を指差して言う「この人が刺したんです」。

ベッドに横たわったまま目をうつろに開き、宙を見つめている真次郎の顔を、じっと睨む様に晴美が見つめている。

……そうか、俺は、この人の父親を殺してしまったのか。まだ子供だったこの人は、目の前で父親を殺されるなんて、どんなに悲しかっただろう。俺はなんて酷いことをしてしまったんだ。

真次郎の胸にとつもない後悔の波が押し寄せてくる。真次郎は自分の顔を見つめている晴美に向かって言う。

「俺は……マリの夫を、殺したの……か？ それじゃ、娘の貴方に……殺されても、文句はいえな……い」

晴美は驚いた様に暫し呆然とする。そして真次郎の顔を見つめて言う。

「貴方本当に、本当にそう思うんですか？ 自分が悪いって、そう思うんですか？」

「はい……本当に……に本当に申し訳、ありません。でした……俺は……何かを、謝らなければ、ならないと、感じてた。んです。謝らなきゃって気持ち、ずっとあった……それが、何なのか……分かんかった。でもやつと、分かり……ました。俺は、麻里恵に、ご主人を、殺してしまったことを……謝らなければ……ならなかった、んですね……」

……俺はそれ程までに。麻里恵の夫を殺してまでも、麻里恵を自分の物にしたかったのか。

……でも俺は、自分のしたことを後悔してはいなかった。きっと自分の取るべき行動として仕方が無かったんだ……。

脳裏に「これでいいんだ……これでいいんだ……」と呟きながら木材を電気カンナに掛けていている自分が蘇える。

それが真実なのだ。良くも悪くも自分の人生が解かった。合点がいった。

晴美はたたみ掛ける様に言う。

「解りましたよ相沢さん。でももう、謝るとかそんなことは結構ですから、どうかこのまま帰って下さい。もう今後は母のことには一

切関わらないで、そつとしておいてください、お願いですから」

……そうだ。俺は麻里恵には会わせて貰えなくても仕方がない。晴美さんには深く謝って、このまま帰るしかない。

「は、はい、解り……ました。俺は身の程……も知らずに、会わせてくれなんて、本当に……申し訳、ありま……せんでした。諦めて帰ろう……と、思います……本当に取り返しのつかないこと……をしました。貴方には、何と……お詫びしたら、いい……のか、も分かり……ません。本当に、ごめんなさい。これ……で俺が何故、刑務所……に入ってたのか……も分かり……ました」

そう話す真次郎をじつと見ている沙奈は目から涙を流している。

「相沢さん。相沢さんは、本当に私のことを、若い頃の麻里恵お祖母ちゃんと間違えて、お話してたんですね」

「……」

「相沢さんがお祖父ちゃんを殺したのは、お祖母ちゃんを自分の物にする為だったということなんです」

黙っている真次郎を横目に、晴美が口を挟む。

「分かっただろう。この人はね、私にとっては、父さんの仇なんだよ。アンタにとっては、お祖父ちゃんの仇」

「でも、そうだとしても、相沢さんはもう刑期を務めたんだから、警察の判断で釈放されたんじゃないの。もう許されたんじゃないの？」

「違う……俺は、こんな、か、身体になった……から、見放され……た。だけ……だ」

「相沢さんは確かにお祖父ちゃんを殺したのかもしれないけど、それだけお祖母ちゃんを好きだったことでしょ？ それならお祖母ちゃんだって、相沢さんに会いたいと思ってるかもしれないじゃない」

「何言ってるの！ まだ分かんないのかい！ お前は自分のお祖父ちゃんよりもこの人に味方するっていうの！」

「沙奈さ……ん。もういい……んだ。施設、へ帰ろう。俺はもう、

解かったから、これで、いい……んだ。俺は、あそこ……で死ぬ……
……それでいい……」

その言葉を聞いた晴美は、ホツとした様に安堵した顔で真次郎を見つめる。だが沙奈は諦めずに晴美に言い募る。

「私、今初めて解ったの」

「何がよ？」

「お祖母ちゃんが、どうしていつも、ひとりでいる時は物静かで、今にも消えてしまいそうなくらい儚ない感じがしたのか、不思議だった。なんでお祖母ちゃんは、いつも自分がそこにいるのが申し訳ないみたいにしたのか。身体を小さくして、悲しそうに笑ってた。お祖母ちゃんも、もしかしたらずっと相沢さんのこと思ってたんじゃないの？」

「そんなことある訳ないじゃないか」

「どうしてよ。お祖母ちゃんは相沢さんのことを好きになってしまったから、相沢さんがお祖父ちゃんを殺すことになってしまったことを、自分のせいだと思って、自分が悪いのになって思っ、罪の意識に苦しんでたんじゃないの？」

「そんなの違うよ！」

「それじゃお祖母ちゃんには何も罪は無かったっていうの？ お祖母ちゃんだって母さんとお祖父ちゃんのことおっぽり出して相沢さんのところに行ったんじゃない。お祖母ちゃんにだって罪はあるじゃない」

「沙奈、お願いだよ。もうお願いだから許してよ。ねえもう許してやっておくれよお願いだから」

「許してって、変じゃない？ どうして？ だって殺したのは相沢さんなんでしょう？ それで何故お母さんが許してなんていうの？ 相沢さんはもう充分自分のしたことが解って、反省して帰ろうって言ってるんじゃない」

「だからもうお願いだから、もうお終いにしてよ」

そう言いながら晴美はボロボロと涙を流す。その言葉は泣き声に

なっている。その声を聞いていると真次郎には、また申し訳ないことをしてしまったという思いが込み上げてくる。

病室に晴美がすすり泣く声が響き、沙奈も黙ってしまふ。沈黙が流れる。沙奈が気持ち落ち着けて話し始める。

「……ねえお母さん。恐いことだけど、相沢さんは、お祖父ちゃんを殺してでも、お祖母ちゃんと一緒になりたかったんでしょ？ お祖母ちゃんだって、駆落ちするくらい相沢さんのことが好きだったんだから。また会いたいと思ってたのかもしれないじゃない。相沢さんだってもうこんなヨボヨボのお爺ちゃんなんだから、私会わせてあげてもいいんじゃないかと思うの」

「そんなことしたら、お祖母ちゃんまた気を失って、下手したら今度こそ死んでしまうかもしれないよ」

「最初はきつとびっくりし過ぎて気を失ったんだよ。でも落ち着いてからちゃんと話しておけば、大丈夫かもしれないじゃない」

「違うよ、死んじゃうよ、今度こそ死んじゃうよ。お祖母ちゃん死んじゃうよ」

懇願するように言う晴美を余所に、沙奈は真次郎に話し掛ける。

「ねえ相沢さん。今お祖母ちゃんもこの病院の中にいるんだよ。今私がお祖母ちゃんのいる病室まで連れて行ってあげるから、ね、一緒にいこうよ」

「ダメだよ！ お祖母ちゃんはまだ意識も戻らないんだから」

「それじゃ寝顔だけでも見せてあげてもいいじゃない」

「沙奈さん……」

「なあに相沢さん」

「……ダメだよ……俺には……マリアに会う、資格は……無いから……」

「……分かりました。それじゃ相沢さん。お祖母ちゃんの意識が戻ってから、聞いてみて、もしお祖母ちゃんが会ってもいいって言ったら、会ってもいいでしょう？」

「いや……」

「お医者さんが言うには、お祖母ちゃんは精神的なショックを受けて一時的に意識を失ってるだけだから、点滴して意識が戻れば大丈夫だって仰ってるんです」

「だけど……そんな……」

「相沢さん。私は無理にでも相沢さんをお祖母ちゃんのところまで連れて行くからね」

「沙奈！ アンタはどうして私の言うことが解らないの！」

「だって、会うのが本当に嫌かどうかお祖母ちゃんに聞いてみなければ分からないじゃない！」

「だからもう、お祖父ちゃんのことはお祖母ちゃんに思い出させたくないって言ってるじゃないか！」

「そんなこと、もう相沢さんに会っちゃったんだから思い出しちゃうてるでしょう？」

「もうやめておくれよお願いだから」

「だってお母さん。お祖母ちゃんだってホントは相沢さんに会いたいと思ってるかもしれないと思わない？」

「そんなことある訳がないじゃないか。だったら何で見た途端に気絶したんだよ」

「だからそれは、突然だったからビックリしたんだよ。私が前に電話で相沢さんのこと話した時も、お母さん本当はお祖母ちゃんに相沢さんのこと言わなかったんでしょ」

「当たり前じゃないか」

「だから、まさかここに相沢さんが訪ねて来るなんて思ってもみなかったから、ビックリして倒れちゃったんだよ」

「お祖母ちゃんが今更この人に会いたいなんて思ってる訳ないよ」

「どうして解るのよ！ 私ね、こんなこと言っちゃ悪いけど、相沢さんもお祖母ちゃんも、もうこの先そんなに時間が無いと思うの。だからね、最後に悔いが残ら無い様に。人生にやり残した後悔が無い様に会わせてあげた方がいいと思うんだよ」

晴美は顔を激しく横に振ると、沙奈が訴えることを吹っ切る様に

して言う。

「お前が何を言ったって、この人は父さんの仇なんだから、絶対に
お祖母ちゃんに会わせる訳にはいかないよ！」

そう言われた沙奈は、真次郎の顔を見て尋ねる。

「ねえ、相沢さん。相沢さんはお祖父ちゃんを殺してでも、お祖母
ちゃんと一緒になりたかったんですよね。それくらいお祖母ちゃん
のこと愛してたんだよね、そのことは私がよく解ってます。だから
もう一度お祖母ちゃんに会いたいと思ったんですよね。それだけで
すよね、お祖母ちゃんに謝りたいんですよね。今更お祖母ちゃんに
何かして、苦しめてやろうなんて気持ちがある訳ないですよね」

「……沙奈さん。俺は……もういい、もう……何も望まない……も
ういい……いいんだよ」

「何がいいんですか！ せつかく施設を抜け出してまで、ここまで
来たんじゃないですか、駆け落ちしたくらいなんだから、お祖母ち
ゃんだって相沢さんに会いたいと思ってるかもしれないじゃないで
すか！」

「ごめん、なさい……沙奈さん。俺は悪いことを、しまし……た。
本当に、ごめんなさい……こんなところへ、来なければ、よかった
……んです。本当に、ごめんなさい……ごめん、なさい……」

「うっ……くっ……くっ……うううううう……」
驚いて見ると、晴美が突然呻き声を上げて、身体を前へ折り曲げ
て椅子からドタリと転げ落ちる。

「うう、うううう……ああああ……」晴美は泣き崩れる。病室の
中に号泣する声が響き渡る。

驚いて沙奈は晴美を見る。

「ああああああ……もう、いいじゃありませんかあ
もういいじゃありませんかあ……お願いですよ。もう許して
下さいようお願いだからあああああ……」

「許してって、何が？ お母さん、おかしいでしょう。許して欲し
いのは相沢さんの方なんじゃないの？」

「ごめんなさい！ ごめんなさい相沢さん……貴方を恨むだなんて、まったく逆ですよね……でも私は、折角ここまで来た貴方を殺そうとまでしました。ああもう絶対に……私は、私は許して貰えませんがよねえ……」

「お母さん。どういうことなの？ 許して貰えないって？ どうしたっていうの？ なんでそんなに泣いてるの？」

「ごめんなさい……はあごめんなさいごめんなさいい……い……い……」

「だからどうしたって言うのよ！」

「お祖父ちゃんを殺したのは……お祖父ちゃんを殺したのは、この人じゃなかったんだよう……この人じゃ……」

「えっ、相沢さんじゃなかったって、どういうこと……？」

「うっ、うっ、うっ、ううううう……」

泣き崩れた晴美はくぐもった声を出して呻きだす。言葉を発することが出来なくなっている。

「……ねえお母さん。説明してよ。お祖父ちゃんを殺したのは相沢さんじゃないって、どういうこと？」

「……」

俯いたまま黙っていた晴美は、ようやくむっくりと顔を上げると、疲れ果てた顔をして沙奈を見つめる。

「……解ったよ。それじゃもう、本当のこと話すから……でも、これから話すことは、絶対誰にも言わないって約束してくれるかい？」

「……そんなの聞いてみなくちゃ分からないけど」

「……それじゃ話す訳にはいかないよ」

そう言われて沙奈は考える顔をする。

「……分かったよ。そのことは誰にも言わないって約束する。けど、それを聞いたからって相沢さんをお祖母ちゃんに会わせるのをやめるかどうかは分からないからね」

晴美はじっと真次郎の顔を見つめる。何か決心を固めるように目を瞑り、深呼吸をする。そしてひとつ大きく頷いて眼を開くと話始める。

「それじゃ話すから……私の父さんは確かに殺されたけど、本当はね、父さんに包丁を刺したのは相沢さんじゃないのよ」

「それじゃ誰が刺したの？」

「……」

「ねえ誰よ！」

「だから……お祖母ちゃんだよ……」

「……どういうこと？」

バリバリバリガガーン！

真次郎の中に雷鳴が轟き渡り、目の前が真っ白になる。身体に電流が駆け巡る。それは麻痺している筈の右半身にも伝わり、全身がビクビクと震える。

……お祖父ちゃんを殺したのはお祖母ちゃん……お祖父ちゃんを殺したのは……俺じゃなく、沙奈さんのお祖母ちゃん、マリ……麻里恵が刺した……。

真次郎のアパートで、あの男が、谷本が片手で麻里恵の腕をつかみ、外へ連れて行こうとしている。嫌がる麻里恵の顔を谷本は何度も殴りつける。麻里恵が暴れて、弾みで谷本の杖を蹴飛ばし、谷本が倒れる。

恐怖に引き攣りながらそれを晴美が見つめている。

麻里恵は流しから包丁を持って来て、転んだ谷本の上に馬乗りになる。

真次郎は叫ぶ。

「バカ！ やめろー」

麻里恵は振り上げた包丁を突き下ろす。

ズブツ……。

「ぎゃあ……！！！！」

谷本の絶叫が響き渡る。

「麻里恵……っ！」

小さな部屋で、向かい合っている刑事が机をバンと叩く。

「お前がやったんだろが！」

「違いますよ、俺じゃない！俺じゃないよ！」

病室のベッドで真次郎の目は相変わらず虚ろに宙を見ている。だが脳裏には晴美の言葉がもたらした衝撃が電流の様に駆け巡っている。細分されていた記憶の細胞が繋がり、全てがせり上がる様に蘇えってくる。

「ねえお祖母ちゃんが刺したって、どういことよ……」

晴美の言ったことが理解出来ないという様に、混乱しているのか沙奈は頭を抱えて晴美に尋ねるが、晴美は答えに窮した様に沙奈を見つめる。

「……ねえ、お祖父ちゃんを殺したのは、お祖母ちゃんだったの？

それじゃ何で相沢さんが逮捕されたの？ だって、相沢さんは四五年も刑務所に入ってたんだよ。ねえ母さん、それってどういうことなの……私怖い……身体が震えてるよ……」

「許して……ねえ、もう許してくださいよ相沢さん……」

真次郎はただ、虚ろな目をして遠くを見ている。

「どうしてよ！」

「それは……警察が勝手に相沢さんが犯人だと決めつけて……」

「そんな訳ないでしょう！ だってお祖母ちゃんが刺すところを、お母さんだって見てたんですよ。なんでそれを警察に言わなかったのよ」

「だって、もしあの時、私の母さんまで捕まってしまったら、まだ中学生だった私はどうすれば良かったのよ、一人じゃ生きてくことも出来なかったじゃないか」

「でもそんなこと」

「それに私は、お父さんが死んじゃったのを見た時は、誰よりもこ

の人のことが憎いと思っただよ」

「だけど、自分がやってない罪を着せられて、相沢さんは、人生の半分以上も刑務所に入れられてたんだよ。酷すぎるじゃない。相沢さんの人生はメチャクチャになったんじゃないか！」

倒れた谷本から流れ出る血液が、狭いアパートの台所に広がっていく。胸元から谷本が自分で引き抜いた包丁が落ちている。その刃にも木の柄にも血がベツトリと付いている。

真次郎はただ呆然と立っている。麻里恵は側に座って泣いている。晴美は谷本から嘔き出した血を浴びたままの顔で、真次郎の顔をじっと睨んでいる。

サイレンを鳴らしてパトカーが来る音がする。外は騒がしい、駆け付けて来た警察官がドカドカと入ってくると、狭い部屋が一杯になる。

「この人がやったんです。この人です。この人です……」
と晴美が真次郎を指差して言う。

「違う、何言っただ。俺じゃないだろう、何言っただよお前は！俺じゃない、刺したのはその女だよ、俺じゃないよ！」

「事情はちゃんと説明して貰うから、取りあえず出て、一緒に来て貰うから」

両側から二人の警官が真次郎の腕をつかみ、そのままアパートの部屋を出る。辺りに集まっている住民たちにジロジロと見られながら、停めであるパトカーへ乗せられる。

……そうだ。あの時はまだ。まさか俺が犯人にされて何十年も刑務所に入れられることになるなんて思ってもみなかった。

俺がやったんじゃないってことは、調べればきつと解かって貰えるだろうと思っていた。

何よりも麻里恵が、自分がやったことを警察に話すだろうと思っただ……。

「刺したのはマリですよ！」

狭い取調室で、机を挟んで座っている刑事に真次郎は訴える。

「何言ってるんだ。お前が刺したって、奥さんも言ってるぞ」

「……そんな！ そんなのおかしい。刺したのはあの女だよ、俺じゃないですよ！」

「そんな言い逃れが出来ると思うのか。中学生の娘さんがな、ハッキリお前がお父さんを刺すのを見たと言ってるんだよ！」

「違うよ、あの子は母親のことかばってるんですよ！」

「まだ言い逃れしようとするのか、お前みたいに卑怯な男は見たことがない」

「誤解ですってば」

「それじゃこの写真見てみる」

と刑事は机の上に数枚の写真を並べて見せる。それには引き伸ばされた指紋が写っている。

「よく見てみるよ、これは谷本さんを刺した包丁の柄についていた指紋を写した物だ」

写真に写っている指紋を指差しながら刑事は説明する。

「コレが谷本さんの指紋。お前がいう様に谷本さんが胸に刺さった包丁を自分で引き抜いた時に着いたと思われる。それからコレがお前の指紋。コレは握っていた指の向きからして突き刺す様な持ち方をしていたと推定出来る」

「だからそれは……」

「黙って聞け！」

「それから奥さんの指紋は、その一番下にある。つまり奥さんの指紋は普段料理をする時に使っていて着いたものであり、その指紋の上から被さる様にしてお前の指紋が着いている。さらにその上に谷本さんが自分で引き抜いた時の指紋が着いてんだよ」

「だからそれは、谷本さんが刺さった包丁を抜こうとするから、俺は抜かない方が良いと思ってそれで……」

バーンと刑事が机を叩く。

「下手な言い訳するんじゃないやねえよ！ この卑怯者が！」

「……」

そして次に預金通帳を広げて見せる。

「コレ解るな、お前の預金通帳だろ？」

「……」

「ここ見てみるよ。事件の起きる直前に入金されてるこの二百万の金はどうしたんだ？ お前が谷本さんから脅し取った金なんじゃないのか？」

「脅すって、どうしてですか」

「だから、金を渡せば奥さんを返すとか何とか言って、脅して取ったんだろう？」

「違いますよ、コレは、人から貰ったんです」

「ほう、誰からだ？」

「……」

「言ってみろよ！」

「……」

「答えられないか」

「……とにかく、刺したのは俺じゃないんだから帰して下さいよ！」

「ふざけるなっ！」

……なんとという理不尽なのか。真次郎は一刻も早くこの狭い部屋から出たいと思う。

「とにかく俺じゃないんだよ！ お願いしますから！ もう帰らせて下さいよ！」

思い切って立ち上がると、隅にいた警官が両側から腕をつかむ。

「離せ、このバカ野郎が！」

腕を振り解こうとするが、警官たちは力づくで腕をねじ上げ、真次郎の身体を床に叩き着ける。

「くっそう、俺じゃない！ 俺じゃないんだよ！ 何で分かんねえんだよ、放してくれっ！」

警官たちは無理やり真次郎の腕に厚い布の袖を通し、拘束する為の服を着させようとする。逃れようとする腕の関節が折れそうに

なる。

「痛っ、痛いつ、いてててっ……」

「暴れるな、大人しくしてないと腕が折れるぞ」

と言って警官たちは背中にねじ上げた真次郎の両腕を拘束服の袖に通してしまおうと、そのまま両腕が上下から背中に回した状態のまま動かせなくなる。

気が狂いそうな怒りが全身に込み上げてくる。

「うおっ！ うおーっ！ やめろっ！ 放せっ！ 放せバカ野郎ーっ！」

聞く耳を持たない警官たちはそのまま真次郎を取り調べ室から引っ張り出し、廊下を引き摺って行く。

「ちくしょっ、くそう。やめてくれ、やめてくれお願いだよーっ」

真次郎の声は泣き声になっている。そのまま留置室へ放り込まれる。地面に顔が擦り付けられる。両手が背中に回ったままなので起き上がることが出来ない。

ガシャンと音を立てて扉が閉められる。コツコツと警官たちが離れて行く足音が響く。

「うおっ！ はあっ！ ううっ！ わあっ！ わあーっ！」

「あああああああ」
身動きが出来ない暗闇であらん限りの力で絶叫する。泣いても喚いても無駄だということを身体が理解出来ない。もがけばもがく程度顔が汚い地面に擦り付けられる。

晴美の話の聞いている沙奈の身体が小刻みに震えている。

「でも……それじゃお祖母ちゃんはお祖母ちゃんはどうして本当のこと言わなかったの？ 自分がやりましたって、相沢さんじゃなくて、自分が刺したって言わなかったの？」

「それは、私が言うなって言ったからだよ」

「どうしてよ」

「だからお祖母ちゃんまでが捕まっちゃったら、私はこの先どうし

ていいか分からなかったからだよ。それにあの時は、私は一番悪いのはこの人だと思ってたんだよ」

「だけど……」

「だから警察の事情聴取の時も、私はお母さんと一緒じゃなきゃ嫌だって言ってるね、私はまだ中学生だったし、母さんもショック状態で只でさえ喋れる状態じゃなかったから、私は母さんに言ったわよ、絶対何も喋らないでって、私が全部話すからって。それで私は、相沢さんが刺したところを見てた話をして、裁判でもそのまま相沢さんがやったってことになったのよ」

「だけど……」

「だから悪かったって謝ってるんじゃないか！ 相沢さんが刑務所に入った後もお祖母ちゃんはずっと言ってたわよ、本当のこと言わないと相沢さんに申し訳ないって、警察に言わなきゃ悪いって、でも私がね、そんなことは絶対に言っちゃダメだって、言わせない様にしてたんだよ」

「そんな……だけど、お祖母ちゃんは、お祖父ちゃんのことそんなに憎んでたの？ お祖父ちゃんは、そんなに酷い人だったの？」

「……」

「……ねえ、お祖父ちゃんて、どんな人だったの？」

「私の父さんはね、いつも怒ってる、私のこと可愛がってくれたことなんて一度もなかったよ」

「いつも怒ってるって、どうして」

「だから怪我のせいなんだよ。元は大人しい人だったらしいけど、戦争に行って身体が不自由になってから、人が変わって、怖い人になっちゃったんだよ」

「……」

「地元でも有名な造り酒屋の息子さんで、戦後は闇市商売だったけど、お酒造りを再開してからは、また羽振りが良くなって、財産はあったけど、身体の自由が利かなくなったからね。何より男性としての機能がね、今思えば、それをお母さんに当たり散らすことで鬱憤

を晴らしてたんじゃないかと思うのよ」

「そんなの酷い、戦争で怪我をしたのはお祖母ちゃんのせいじゃないのに」

「父さんは母さんのこと奴隷みたいにコキ使って、何か少しでも気に入らないことがあるとすぐ怒って、母さんのことをよく叩いてたよ。私は怖くてね、父さんとはまともに話も出来なかったんだよ」

「お祖母ちゃんは、そんなにいつもぶたれたの？」

「殴られて、蹴飛ばされて、そのうち殺されちゃうんじゃないかって、私はいつも震えてた」

「酷い、自分の奥さんを殴るなんて」

「お祖母ちゃんは、ずっと我慢してたんだよ。でも私はお祖母ちゃんがひとり泣いてるところを見つけてね、聞いたことがあるんだよ。なんでお父さんはあんなにいつも怒って、お母さんのこと苛めるのって。そしたらお祖母ちゃんはね、父さんの方がずっと辛い思いをしてらっしゃるのよ、だからね、これくらいのご事情は辛抱しなきゃいけないだよって」

「酷いよ、お祖母ちゃんあんなに優しいのに、可哀相……」

六甲山の展望台で、真次郎は麻里恵の顔にそっと手を触れている。よく見るとアゴの脇や、おでこの生え際が痣になっている。

「酷すぎるじゃないか。マリちゃん可哀相に……」

病室で晴美の話は続く。

「でも母さんが一番嫌だったんじゃないかと思うのは、会社にお客さんが来た時に、父さんが母さんにお酒や料理を持って来させるんだけど、その時父さんはお客さんの前で凄く威張ってね、お母さんのことをコレはダメな女ですとか、役に立たないんですとか言ってるよ。私はまだ子供だったけど、その時のお母さんの顔はとても悲しそうだったわよ」

「そりゃそうだよ。そんなじゃお祖母ちゃんだって逃げ出したくないよ」

「それがね、父さんは母さんにあんなに酷いことしてた癖に、母さんがいなくなると今度は警察に捜索願いを出したり、興信所に頼んで母さんの交友関係を調べたりして、もう必死になって探したんだよ。それでも近所の人には女房に逃げられたなんて言うて恥ずかしいと思っただらしくって、妻は病気で入院してると嘘をついてね。でも一人でいる時はお酒飲みながら、麻里恵、何処に行ったんだって、もう泣きべそかいてちゃって。まさか自分の会社に入ったりして運送屋の運転手と母さんが幼馴染みで、そんな関係になってるなんて、夢にも思っただけじゃなかったからね」

「でもお祖母ちゃんが逃げちゃって、母さんは置き去りにされたんでしよう？ 母さんはお祖母ちゃんのこと恨まなかったの？」

「そりゃ寂しかったわよ、でも私だってまだ中学生だったけど、子供ながらにお母さんのこと可哀相だと思っただけからねえ、それよりも、もしお母さんが見つかって戻って来たら、また父さんにどんな目に遭わされるのかと思うと、その方が心配だったわよ」

「ふうん……」

「でもそれから二年経って、ようやくお祖母ちゃんがこの人のところにいるって分かった時は……もう父さん怒り狂ってね、そりゃもう恐ろしかったわよ。本当にお祖母ちゃん殺されちゃうんじゃないかと思ったわよ」

「お祖母ちゃんが相沢さんのところにいるってことは何で分かったの？」

「もうこの人は会社を辞めて神戸には来なくなっていて、代わりにトラックを運転して来る様になった運転手の人が教えてくれたんだよ。でもその時はもう阿佐ヶ谷のアパートも引っ越して違う所に移ってたんだけどね、父さんは東京の興信所に頼んで居場所を突き止めたんだよ」

「ふうん……」

ベッドの真次郎は眼を見開いている。その頭では晴美の話す内容を全て理解している。

そして、麻里恵の夫を刺したのが自分ではなかったということを知った時、鳴り響いた雷鳴によって繋がり、照らし出された自分の記憶と晴美の話す内容とを照らし合わせている。

そして、真次郎には全てが解った。自分がいつもそうしなければならぬと思ひ、食事の時に盗んでは削っていたスプーンは、麻里恵に突き刺す為だった。

……そうか、そうだったのか……俺がここへ来たのは、麻里恵に恨みを晴らす為だったんだ……。

ジーパンのポケットに入れておいた筈のスプーンはあるだろうか。通帳と印鑑の入った袋は真次郎が施設で盗んで着て来た浜矢の衣服と一緒にベッド脇の台の上に置かれている。横目で見ると衣服の上に少し光っている小さな棒状の物がある。あつた、アレがきつとスプーンだ。

……俺は刑務所の中で、何十年も掛かって、アレを麻里恵に突き刺してやる為に、ずっと先端を削っていたのだ。

沙奈が真次郎を見て言う。

「相沢さん……このことは、長い間相沢さんが刑務所に入れられていたのは、お祖母ちゃんの罪を着せられてたんだってことは、覚えてなかったんですか？」

「この人はねえ、本当にもう昔のことが解らなくなっちゃってるみたいだけど、本当は、心の奥底では、お祖母ちゃんのこと恨んでる筈なんだよ」

「そんな……ねえ相沢さん。相沢さんがここに来たのは、お祖母ちゃんに恨みを晴らす為だったの？」

……その通りだ。

でも真次郎は、そのことを口に出しては言わない。

「解つただろ、だからどうしてもこの人をお祖母ちゃんに合わせる訳にはいかないんだよ」

「でも、あんまり酷いじゃない……お母さんは、相沢さんの人生を奪ってしまったんだよ。取り返しをつかないことをしたんだよ」

「……」

「ねえ解ってるの？ もう謝っても取り返しがつかないんだよ！」
「解かってるよ……だけどねえ、母さんが父さんを刺してしまったのは、相沢さんだって悪かったんだよ」

「どうしてよ」

「だって、そもそも相沢さんがお祖母ちゃんにチョツカイを出して、駆け落ちまでさせたからそんなことになったんだろ」

「そりゃそうだけど」

「それに、そうまでしておいてこの人は結局お祖母ちゃんのことを捨てようとしたんだよ」

「捨てようとしたって？ どういうこと？」

6

晴美は真次郎の顔を見る。心を覗き込もうとでもするかの様にまじまじと見る。

「ねえ相沢さん、貴方がお祖母ちゃんのこと捨てようとしなかったら、あんなことにはならなかったんじゃないですか？」

その言葉がまるで納得出来ないという様に沙奈が聞く。

「どういうこと？ だって愛し合ってたんじゃないの？」

「お祖母ちゃんはその時、相沢さんに追い詰められてたんだよ」

「どういうことよ」

晴美は沙奈には答えず、真次郎に対して問い詰める様に言う。

「ねえ相沢さん、貴方が本当に最後までお祖母ちゃんのことを大事にしてたなら、あんなことにはならなかったんじゃないですか？」

「……」

真次郎はじっと黙って天井を見つめたまま答ええない。

「それは本当のことなの？」と沙奈が晴美に訊ねる。

「駆落ちしてから相沢さんとお祖母ちゃんの生活はね、結局上手くいかなかったんだよ」

「どうしてよ？」

「東京の阿佐ヶ谷で、相沢さんとお祖母ちゃんと一緒に住み始めたけど、正式に結婚出来る訳じゃないだろう。勿論子供だって作れないし。お祖母ちゃんも相沢さんの会社のお得意さんの奥さんなんだから。会社の人たちにも隠してひっそり暮らしてるしかなかったんだよ。でも相沢さんに上司から取引先のお嬢さんとの縁談話があったね、でも当然受ける訳にはいかないし、断るしかなかったんだよ。でもそうしたらその話が他の同僚のところへ行って、その人が結婚したんだけど、したらその人は相沢さんよりも後輩だったのに、相沢さんを追い抜いて出世してね、相沢さんはそんなの平気だって言ったららしいけど、内心はやっぱ悔しかったんだと思うよ」

「……そうだ。そんなこともあった。そうだ。確かにあのことは、俺と麻里恵が行き詰まる原因のひとつだったのかもしれない……」

「そのうち今度はまた別の同僚の人に、相沢さんが女の人と一緒に暮らしてるってことを嗅ぎ付けられてね、そこまでは良かったんだけど、その女は誰だったことになって、相沢さんが決して紹介しようとしなくても余計に怪しまれてね、とうとうアレは神戸の谷本酒造の社長の奥さんじゃないかって、噂になって、それで慌てて相沢さんは会社を辞めてアパートも引っ越したんだよ。それで転職して、今度はずっと規模の小さい運送会社の社員になったんだけど、そこでは自分よりも若い先輩に苛められてね、給料もずっと低くなるし、その上お祖母ちゃんも誰かに見つかるのが怖くなつて、外へ仕事に出ることが出来なくなつて、生活が苦しくなつちやつたんだよ」

「でも、そんな生活が苦しくたって、我慢してやっっていけば良いじゃない」

「そんなこと言ってもね、実際に職場で苛められたり、お金に困ったりすれば気持ちが荒んで人にも優しく出来なくなるものだろう」

「まあそれは、そうかもしれないけど……」

「それでね、相沢さんは自分がこんなに酷い境遇になつてるのは、

お祖母ちゃんと一緒にいるせいだって、思う様になって」

「そんなの半分は自分の責任じゃない」

「終いには働かないで一日中アパートの部屋にいるお祖母ちゃんのことを疎ましくなってきたんだよ」

「酷い……それじゃまるでお祖父ちゃんと同じじゃない……」

と言って沙奈はジロリと、今までとは違った目で真次郎を見る。

……真次郎は六畳間の卓袱台でビールを飲んでいる。麻里恵は隅に座っている。

「お前みたいに一日中家でゴロゴロしてるだけの女の為に、何で俺だけこんな苦勞しなきゃならねえんだよ」

「……すみません。私も出来ることなら働きたいと思うんだけど、でもまた誰かに見つかったらと思うと、怖くて出られないんですよ」

「俺が外でどんな思いしてるか解かってるのか！」

「はい、本当に、どうもすみません……」

苛立ち紛れに真次郎はビールのコップを壁に叩き着ける。麻里恵は顔を覆ってシクシクと泣いてしまう。

……そうだ。その通りだ。あの頃俺は、酷かった。自分が不遇なのを全部麻里恵のせいにして、辛く当たってた。俺はそうやって麻里恵のことを追い詰めた。

「それにお祖母ちゃんは、それは家に置き去りにして来た私に許して欲しいって気持ちからの言い訳じゃないかと思うんだけど、私のことが心配になって、毎日泣いてばかりいて相沢さんに怒られた。って言ってたよ」

……それは嘘ではない。

真次郎の脳裏に、泣いている麻里恵の姿が浮かぶ……家に置いて来た晴美のことが心配だと言って、あの頃麻里恵は毎日泣いていた。メソメソ泣いてばかりいるので、俺は一層イライラして怒鳴っていた。

「そんなこと言ったって、しょうがねえだろう？　晴美ちゃんをここに連れて来る訳にもいかねえし、だったらお前が帰るしかねえじ

やねえか？ それも出来ねえくせにメソメソしやがって」

「だって、今更帰れる訳ないじゃないの！」

「それじゃもう二度と晴美ちゃんのことくどくど言うのやめろよ、解ったのか！」

夫と娘を捨ててきた麻里恵としては、今更後戻りは出来ない。なので真次郎がどんなに辛く当たっても我慢して生活を取り繕うしかない。そんな麻里恵に真次郎は一層甘えて、辛く当たった。

どうせコイツは俺の為にならどうなっても良い女なんだから……と思っていた。

どんなに辛く当たっても、麻里恵は真次郎から離れようとしなない。真次郎に捨てられない為に、本当は辛いだろうに我慢して、せつせと真次郎の身の回りの世話をする。

しかしそのことは、結局は自分の身を守る為だけにしているのだろうと真次郎には思われて、益々疎ましく思われる。

その頃になるともう麻里恵の身体を求めることも無い。散々やり尽くして飽きてしまったのと同時に、関係を持ち始めた頃よりも張りの無くなつた麻里恵の身体に食傷気味にもなっている。

それでも麻里恵は真次郎の身体を求めてくる。それはきっと麻里恵にしてみれば、そのことによって真次郎に自分に対する愛情が残っているのかどうかを確認する行為なのだろう。そして真次郎に少しでも喜んで貰えれば、自分への思いを繋ぎ止めておくことが出来るのではないかと思っているのだ。

でも真次郎は、そんな麻里恵の気持ちも知らずに、仕事を終えて疲れて帰って来た時に求められて、邪険に突き放してしまう。そんな時夜中にふと目を覚ますと、麻里恵が背中を向けて泣いている。

「そ、そうです……俺は、確かに……マリアにひ、酷いことを……しました」

黙っていた真次郎が言葉を発する。それを聞いた晴美は尚も追及する。

「でもそれだけじゃないでしょう？」

「はぁ……」

「貴方は、お祖母ちゃんのことほったらかして、若い女と浮気したでしょう！」

「……」

……真次郎が転職した小さな会社のプレハブで帳簿を付けている女の子。由紀……真次郎が出先から戻り、駐車場にトラックを停めて入って来ると、顔を上げてニッコリと笑い「お疲れ様です」と声を掛けてくれる。

眼鏡をして事務服を着ていると野暮ったく見えるけれど。よく見るとまだ子供っぽさが残る可愛らしい顔立ちの中に、微かに芽生えた女の色気が感じられる。

「この人はねえ、会社の事務員だった若い女の子と浮気してたんだよ」

……確かにそんなこともあった。しかしそんなことまで知っているなんて、これまでの長い年月の間に麻里恵は、本当に全てのことを晴美ちゃんに話していたんだな……。

事務員だった由紀は他の社員に接する時よりも、真次郎に接する時の方が愛想が良く、嬉しそうにしている様な気がする。

自分が勝手に思っているだけかとも思っていたのだが、仕事終わりが一緒になった時に「飯でもどうだい？」と誘ってみると「本当ですか？ 行きます行きませう」と嬉しそうに言っついて来る。

でも他の同僚に見つかるのは嫌だと思い、駅から少し離れたところにある食堂で飯を喰いながらビールを飲む。真次郎はこの会社でも独身であるということを通して通しているので、由紀にも勿論麻里恵のことは話していない。

「相沢さんはまだ結婚なさらないんですかあ」

コップを傾けてビールを飲む由紀の白い喉元に見入ってしまう。まだ二十代の前半で、三四歳の麻里恵に比べてずっと若い。若いから酒の回るのも早いのか、二〜三杯飲んだだけで白い肌がほんのりピンク色になって、喋り方も甘ったるくなっている。

「相沢さんったら結婚したらもう他の女の人と遊ばなくなっちゃう
と思つて、実はいろんな女泣かせてるんじゃないんですかあ？」
と言つて顔を寄せてくると、真次郎の中に激しい欲情が沸き上が
つてくる。

店を出ると由紀は真次郎の腕をつかんでくる。真次郎はわざと駅
とは方向の違う暗い道の方へと歩いて行く。

前後に人氣が無いのを確かめてギョツと抱き締める。口を近付け
てキスする。

ムンとした温もりのある柔らかい唇をブチュブチュと吸う。まだ
小娘だと思つていたのはとんでもないことで、自分から口を押し付
けてベロベロと舌を絡ませてくる。

その次からは由紀のアパートへ行き、肉体関係になる。

真次郎は由紀に入れ込んでいく。それは自分の不遇な境遇を振り
払う様に、また麻里恵に当て付けてやろうという底意地の悪さから。
でも、真次郎は本気で由紀を好きだった訳ではない。結局は自分
の欲求を満足させるにすぎなかったのだ。

……頭ではそのことを分かつてたのに。俺は酷い男だった。

「その上貴方は浮気してることお祖母ちゃんに隠そうともしなかつ
たでしょう」

……そうだ。俺は麻里恵にわざと浮気していることが解る様な態
度を取つた。

朝出掛ける時に「今日は早く帰れるから」と言つておいて、實際
に帰るのは日付けが変わった夜中になってから。しかもシャツの胸
元に由紀の口紅が着いていても素知らぬ顔をして帰つて来た。

「お祖母ちゃんは、ご飯の用意して、何時になつても自分も食べな
いで毎晩貴方の帰りを待ってたんですよ」

もう先に寝てるだろうと思つてアパートに近付くと、部屋に灯り
が点いている。黙つてドアを開くと当たり前の様に「お帰りなさい、
お疲れ様でした」と明るく言う。そして卓袱台には食事が用意して
あり、布巾が掛けられている。

俺は口もきかずに洋服を脱ぎ捨て、卓袱台の前にあぐらをかく。

俺の脱いだ服を片付けている麻里恵の動きが一瞬止まる……ああ、口紅に気が付いたな……と思う。だが麻里恵は何事も無い様にそのまま服を片付けてしまう。

俺は冷蔵庫からビールを取ろうと立ち上がり、台所へ向かう。麻里恵が「あ、ビールなら私が……」と言うのを無視してビールの栓を抜き、持って来ると卓袱台のコップを残して他の料理を全部畳の上になぎ払ってしまう。

麻里恵は急いでゴミ箱と雑巾を持ってくると、撒き散らされた料理を片付ける。

……俺がこんなに酷いのに、何故責めないんだ？ 真次郎はビールを飲みながら、そんな麻里恵の殊勝な態度にむしろ疎ましさを感じている。

そもそも麻里恵は人に怒ったり、責めたりすることが出来ない女なのだ。小学生の頃から、どんなに苛めても、困った様に笑ったり泣いたりするしか出来なかった。そして子供時代にあんなに酷いことをした俺と大人になって再会しても、懐かしがって喜んでくれさえした。そんな女だから、俺は好きだったんだ。

由紀とのことは飽くまで浮気だから、と割り切っている。そのことはきつと麻里恵も理解してるのだろうなんて、俺は身勝手に思っていた。

「貴方にそんなことされて、お祖母ちゃんがどんなに辛い思いをしたか解かりますか？」

……解かる。今は、でもその時には解からなかった。解かる様になったのは刑務所に入ってからだ。あまりにも考える時間があり過ぎて、それまでの麻里恵のことを考えているうちに、俺にはやっとなら解った。

あの頃の俺には、麻里恵がどんなに悲しい思いをしているかなんてことには考えが及んでいなかった。

俺は不運な自分の境遇を嘆いて、麻里恵に辛く当たることと憂さ

を晴らそうとしていた。

しかし俺がそうすればする程麻里恵は一生懸命俺の世話をして、いつも笑顔を絶やさない。

そうやって麻里恵が俺との間を取り繕おうと必死になって尽くせば尽くす程、俺は辛く当たる。

「母は家族を捨てて貴方のところに行ったんですよ。なのに貴方に捨てられたら、もう母には生きていく場所なんかなかったじゃないですか！」

その通りだ……麻里恵には他にいくところがなかった。それはそうだ、夫と娘を捨てて飛び出して来てしまったのだから、今更帰る訳にもいかない、そもそもあの酷い夫に見つかることを恐れているので、帰れる訳がない。

だから、どんなに俺に邪険にされても、ここにいるしかない。我慢してるしかない……。

酔っぱらって俺がそのまま寝てしまっても、翌朝になるとちゃんと俺は寝間着に着替えて、布団に寝ている。麻里恵が寝ている俺の服を着替えさせ、布団を掛けてくれたのだ。

俺は麻里恵に出て行けとは決して言わない。辛く当たる一方で俺は、麻里恵がこうしているのは俺の責任だし、麻里恵がここにいるのは当たり前のことなのだと思う。

それはある意味惰性に陥った結婚生活みたいなものだったのかも知れない。俺は勝手に、これからもずっと一緒にいるのだろうと思っていた。

「だけどねえ相沢さん。それでもお祖母ちゃんは、貴方にどんなに酷いことをされても、それでもお祖母ちゃんは、貴方のことが好きだったんですよ」

そうだろうか……本当に？ あの頃俺は、麻里恵が俺に愛想を尽かさないのは、ただ他に行くところが無いからだろうと思っていた。「貴方の為に何もかも捨てて来たお祖母ちゃんが、貴方に大事にされないことがどれだけ悲しかったと思いますか？」

……そうか。麻里恵にしてみれば、俺の為に全てを捨てたのだから、俺にも全てを捨てて自分のことを守って欲しいと思うのは当然のことだったのかもしれない。でも俺はそんな麻里恵の重圧に耐えられなくなってしまった。麻里恵の人生を受け止めることが出来なかった。俺は麻里恵にどれだけ心細い、酷い悲しみを与えてしまったのか……。

「そうでしょう相沢さん？」

「はい。思い……だしまし、た。そうで、す……」

「お祖母ちゃんはお祖父ちゃんのところへ戻るくらいなら死んだ方が良いと思ってたのに、お祖父ちゃんや貴方とお祖母ちゃんの居場所を突き止めて、私を連れてお祖母ちゃんを連れ戻しに行った時、貴方は何もしないでお祖母ちゃんを引き渡そうとしましたよね」

「……」

「だから、お祖母ちゃんはお祖父ちゃんに無理やり連れ出されそうになった時、咄嗟に台所にあった包丁を持って……」

「はい……全て俺が……悪かった……んです……だからもう……麻里恵のこと、恨んだり、して……いません……」

その言葉を聞いて晴美は立ち上がる。

「本当ですか？ その言葉は、本当なんですか？」

「は……はい……」

それを聞いた沙奈が口を開く。

「だけど、相沢さんは自分がやっていない罪の為に四五年も刑務所に入ってたんでしょう」

「それは……もう、いいんです……本当に、いいです。麻里恵に、あんなことをさせたのは、全て俺が、悪かった……ん、ですから……」

晴美も信じられないという様に問い質す。

「でも相沢さん。長い人生を無駄にされた恨みはそう簡単には消えないんじゃないんですか」

……当たり前じゃないか！ 消える訳がない……俺の人生だぞ！

消えるわけがないじゃないか！

真次郎の目に、ベッドの脇に通帳や印鑑と一緒に置かれているスプーンの鈍い光が見える。

「……ちくしょう……アレを、俺の恨みの籠もったアレを、何としても、麻里恵の胸に突き刺してやらなければ。俺は死んでも死にきれないぞ。生きているうちに……」

でもその為には、今この病院にいるという麻里恵の病室まで、何としても連れて行って貰わなければならない。その為には、この二人に、俺がもう本当に麻里恵のことを恨んでなどいないということを、信じて貰わなければならない……。

第四章

1

「本当なんです。俺は、長い間……刑務所に入っている間に……恨みは、消えた、んです……」

「でも、その言葉は、私にはちよつと信じられないです」

「本当……です。そりゃ最初は怒っていました。恨んでた、けど……」

ブォーンと音を立てて削られた木の粉が舞い上がる。機械の反対側から押された板がスベスベになって出て来る。真次郎は山積みになされた中から次の木材を持ち上げ、機械の位置に合わせて押していく。ギィーン……と甲高い音を立てて木材が削られていく。

「……それは最初のうちは……余りにも、酷いと思って……何で、俺が、こんなところへ入らなきゃ、ならないんだ……と思って。怒って、ました。だか、ら刑務官の先生にも、反発して……」

時空を超えて刑務所にいる真次郎が叫んでいる。

「だからそれはさっきアンタが先にやれって言ったんじゃないか！
若い刑務官の指示に従ってしたことを、年配の刑務官に咎められ
て、頭にきた真次郎は口答えをしている。

「何だと？ お前そんな口のきき方して許されると思ってるのか？」
「口のきき方もくそもねえだろうが！ そっちが間違ってるのに何
で俺が悪いことになってんだよ！」

ピーッ！ ピーッ！

年輩の刑務官が笛を吹くと、沸いて出た様にドカドカと四々五人
のトツケイ（特別警備隊）と呼ばれる屈強な刑務官たちが雪崩れ込
んで来る。そして四方から真次郎につきみ掛かってくる。

「何すんだよ！ 俺が悪いのかよ！」

トツケイたちは何も言わずに真次郎の手足を取り押さえっていく。

「何で俺がやられんだよ！ 何でだよ！ 放せよ、止めるバカヤロ
ーッ！」

他の受刑者たちは作業の手を止め、面白い見世物が始まったとで
もいう様に遠巻きに見ている。

トツケイたちは暴れる真次郎の手足を抑え込み、床に叩き伏せて
無理やりに拘束服を着せていく。

「放せっ、放せこの野郎っ！ アイタタタ……止めるーっ！」

腕を袖に通させようとするのに抵抗すると関節を逆にねじられ、
痛さに耐えられずに腕を通されてしまう。

「馬鹿だなあ、反抗したって同じなのに……」と受刑者の誰かが呟
くのが聞こえる。

真次郎の右腕は肩の上から、左手は腰から背中に回され後ろで結
ばれてしまう。

「うおっ、うおっ！ うおくくくおお……」

こうなってしまうと、もうどんなにもがこうが暴れようが一切腕
を解くことは出来ない。

トツケイたちは両側から真次郎の身体を抱えると作業場から引き
摺り出して行く。

そのまま廊下を引き摺られ、懲罰房に連れて来られると、部屋の床へ叩き付けられる。

ズザーン！

「ここで三日間頭冷やしてろ！」

ガシャンと扉が閉められ、ガチャガチャと扉を施錠する音が響く。拘束服を着せられて床に転がされると、自分ではなかなか起き上がる事が出来ない。

「ちくしょうくっ、ちくしょう、ちくしょうっ……放せっ、放せ、うわあああ、あああああー！ー！ー！！！」

どんなに叫んでも喚いても、耳を貸す者は誰もいない。それでも叫ばずにはおられない。叫ぶことで頭がどうにかなってしまうえば良いと思う。このまま気が狂ってしまえば、訳が解らなくなってしまうえば良いのと思う。

「わああああー！ー！ーひゃあああああー！ー！ー！！！！！！！」

どんなに叫び続けても、気は狂わない、正気を失うことはない。あるのはただ怒りだけである。

真次郎には、その時のことが、その時の自分がハッキリと今頭に浮かんでいる。

……施設で嘱託医の川柳先生は、失われた記憶はもう二度と思いつかせないと言ったけど、やっぱりまだあったじゃないか、頭の中に、俺の記憶が、まだちゃんと残っているじゃないか……。

今真次郎の目にはありありと自分が閉じ込められている懲罰房の様子が見える。叩き付けられた床の臭いも、拭うことも出来ずに顔を流れる涙の感触も蘇えっている。

「……そんな風に、俺は……何度も懲罰房……へ、入れられて……いました……もう……悔しくて、悲しくて……叫んでも、叫んでも誰も……聞いてくれない……んです……俺じゃないのに、俺がやったんじゃないのに……悪いのは、麻里恵なのに……」

そう話す真次郎の顔を、晴美は申し訳なくて堪らないという様子

で見ている。沙奈も居た堪れない顔をしている。

「その、時は……俺が、こんな思いを……しているというのに、どうして……麻里恵の、ヤツは……本当のこと、を言わない……んだ。と思って……ました」

そう言われて晴美はまた深く頭を下げる。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい……」

それから数日後に懲罰房から出された真次郎は、また作業場で木材を電気カンナ機に掛ける作業に戻っている。

「ちくしよう、ちくしよう、ちくしよう……なんで俺がこんな思いをしなきゃならないんだ。何で俺が、何で……」

工場の脇にある食堂で、他の受刑者たちと昼食を食べながらブツブツ言っていると、隣に座っている顔見知りになった受刑者が訊ねてくる。

「おい兄弟、どうしたんだよ？」

「実は俺はなあ、やってねえんだよ。俺は自分がやってねえのに罪を被せられて、身代わりになって捕まっちゃったんだよ」

「あーそうだったのか、それじゃ俺と同じだな。俺だって悪いことなんてひとつもやってねえんだぞ」

その受刑者は真次郎の肩をバンと叩いて言う。

「そんじやお互いに無実同志ってことで、仲良くしようじゃねえか、なっ、ワツハハハハハハ……」

刑務官の先生たちは勿論、他の受刑者たちでさえも、真次郎が本当は殺人など犯していないのだということを感じてはくれない。皆真次郎のことを、自分の欲の為に人を殺した悪人だという目で見ている。誰に何を言っても無駄なのだ。

余りの情けなさに、夜雑居房の中で他の受刑者たちと並んで布団にくるまりながら泣いている「うううう」と嗚咽を漏らしている。「うるせえぞ！ 黙って泣きやがれこのタコが！」と他の受刑者に怒鳴られる。

どんなに頭にきても、理不尽な状況に怒りを燃やしても、何もどうにもならない。どうすることも出来ない。真次郎の気持ちは無視されている。そして生活や作業等、全てにおいて強制される日々だけが過ぎる。

そうして真次郎の人生はどんどん無くなっていく。作業中に嫌気が差して、仏頂面をしているだけで「おい、一五七番、目付き悪いぞ、何か文句でもあるのか！」と刑務官に怒鳴られる。

何か言い返せば、また屈強なトッケイたちが雪崩れ込んできて、あの拘束服を着せられ、地獄の三日間になる。だから文句はあっても何も口に出さない。

嫌気が差すとかいうよりも、嫌気は常に差している。でもそれを他の誰にも表現してはならない。ここでは自分の思いを表すことは全て罰になるのだ。

他の受刑者たち六く七人と共に過ごす舎房の中での生活は、起床、トイレ、食事、工場での作業、就寝など、全て時間がすっかり決められており、その各々について細かく規則ややり方も守らなければならない。

自分の意にすぐわなないことがあっても我慢しなければならないし、他の囚人たちとも上手く付き合っていかなければならない。

ここでの真次郎は、あくまでも、人妻と駆け落ちをして、追って来た夫を殺害した罪人として振る舞わなければならない。

嫌でも、納得がいかななくても仕方がない。作業も、生活も、全てが遣り込められて、遣り込められて、それでもまた遣り込められる。どんなに泣いても喚いても、何もどうにもなりはしない。そのことを思い知らされるだけ。それが真次郎にとって「この世」というもののなのだ。

同部屋の受刑者たちと硬い布団を並べて眠る。朝は一分と違わずに飛び起きて、素早い動きで布団を畳み、着替えから洗面とトイレを済ませる。全員扉に向って正座して並び、扉から覗く看守の点呼に答える。

当番の受刑者が扉越しに配る朝食を受け取り、テーブルの上に並べて食べる。

食事を済ませると舎房の扉が開かれ、受刑者たちは廊下に整列し、刑務官に番号をかなり立てる。刑務官が掛け声を掛け始める。

「行進し開始つ、ヒダリッ！ ヒダリッ！ ヒダリミギッ、ヒダリッ！ ヒダリッ……」

その掛け声に合わせて真次郎たちは足踏みをしながら両手を大きく振り、声を上げる。

「オイッチニイ！ オイッチニイ！ オイッチニイ！ オイッチニイ……」

そのまま前へ進み始め、一糸乱れぬ行進で工場へと向かう。

その声は刑務所内のあちこちから立ち上がり、行進する足音と共に群衆の声が地鳴りの様な響きになり、刑務所内を覆い尽くしていく。

そのまま行進して工場へ到着すると、舎房で着ている服から工場での作業着に着替えるのだが、その際看守たちの見守る中で素っ裸になり、両手の平を開いて振り、両足を持ち上げて足の裏を見せる。同時に大きく口を開いて舌を上下に出して見せる。身体の何処にも何も隠してはいないということを確認して貰うのだ。

受刑者たちが「カンカン踊り」と呼んでいるこの儀式も、真次郎の自尊心を砕くのに大いに力を発揮する。毎日やっても決して慣れるということはない。

何も考えずに済ませてしまおうと思っても、全裸で両手を振り上げ、片足を上げて舌を出す瞬間にどうしても我に返ってしまう。

だがそのことで真次郎には、まだ自分の中に消すことの出来ない悔しさが残っているのだということを確認させられるのだ。

カンカン踊りは作業を終えて舎房着に着替える際にも行われる。つまり舎房から工場へ、工場から舎房へと何か武器になる様な物品の持ち込みを許さない為にされているのである。

朝更衣室で作業着に着替えると作業場へ入り、自分の受け持ちの箇所へ行く。そして担当官の「作業開始！」の掛け声と共に機械のスイッチを入れる。

受刑者たちは「オヤジさん」と呼んでいる全体の作業を指揮する担当刑務官の指示に従い、作業を分担している。

作る製品によって、使用する材木を運んで来る者、材木の長さや厚みを揃えて加工する者、仕上がった材料で図面通りに組み立てる者、サンダーという機械で表面を滑らかに擦る者、塗料で塗装する者等、それぞれの受刑者がいろいろな作業を受け持っている。

真次郎に割り振られている作業は電動ノコギリで長さや幅を揃えられた木材を電気カンナに掛けて厚みを揃える作業である。

ブイーンと唸りを上げて作動する機械の盤面に位置を合せて木材を乗せ、そのまま位置がズレない様に真っ直ぐに押して行く。

機械からスベスベになって出て来る木材を反対側で待っている受刑者が受け取っていく。

キーン……と甲高い音を立てて木材が削られていく。機械の横から噴き出された木の屑が空中に舞い散る。

真次郎は作業をしながらどうにも小便が我慢出来なくなってしまう、作業を中断する。前で作業を見守っているオヤジさんに手を高々と上げ、大声で叫ぶ。

「願います、願います！」

「よしっ、そこ！」

とオヤジさんに指を差された真次郎は「用便願います！」と言ってオヤジさんの前へ走って行く。

オヤジさんから渡される「使用中」と書かれた木札を持って便所へ行き、入口の上にその木札を下げ中へ入る。

一二時になると昼食になる。作業の日は工場の脇にある食堂で昼食を食べる。休憩が終わるとまた作業に戻り、夕方作業が終わると舎房に戻って夕食を食べる。九時に就寝。そしてまた朝起きて、作

業場に行き、夕方戻って飯喰って寝る……。

土曜日の午後と日曜、祭日は作業は休みであり、舎房で本を読んだり同部屋の受刑者たちと囲碁や将棋も出来るのだが、この時間も規則はしっかり働いているし、他の受刑者たちに気も遣わなければならず、自由は無い。

くる日もくる日も作業して、少しでも点呼の時間に並ぶのに遅れたり、布団の畳み方が悪いだけでも刑務官に怒鳴られる。それでもまた我慢して作業に行く。

受刑者たちには決められた時間にテレビを見ることくらいしか楽しみがなく、同部屋の受刑者同士は自分が犯した罪状等を互いに話して聞かせることが通例になっている。

だが真次郎の場合には、自分がやっていない殺人のことを自分でしたこととして話さなければならぬ。

それは苦痛で耐えられないことなのだが、話さないと仲間外れにされ、苛められることになってしまう。

同じ舎房の刑期を終えた受刑者が出所して、新しい受刑者が入って来る度にそれは続く。

そうして長い年月が過ぎて行く。それ等のことを真次郎は晴美と沙奈に訴える様に話していく。

「……それは、まるで……自分が、どんどん、無くなって、いく様でした……でも、そのうちに、怒っていることにも……疲れてしま……い……もう、どうにでもなれという、気持ちに……なって、いきま……した……」

最初のうちはいつそのこと発狂して何も解からなくなってしまうばい等と思っていたのだが、そうはならないことが解り、やがて怒ることにも疲れてしまう。

自殺も考えたが、他の受刑者もいる舎房では不可能なことは勿論、独居の懲罰房に入っても首を吊るせる様な紐状の物が無い。

工場での作業中に回転しているノコギリに首を突っ込むこと等も考えてみたが、作業中は前の高い場所からオヤジが受刑者たちの一

挙手一投足に眼を光らせているし、衝動的にそれをやる様な勇氣もない。

そうしているうちに月日は流れ、どんなに嫌だと思っていたことにも、繰り返していくうちに諦めが生じてくる。

氣力も萎えて、もうどうでもいいという感じになってくる。

工場での作業には熟練し、嫌々ながらやっている生活にも慣れが生まれてくる。

そんなある日刑務官から「お前には自分の犯した罪に対する後悔が全く感じられないんだよ」と言われる。

それはそうだと思う。真次郎にしてみれば、反省するも何も、やっていないのだから。やっていないことを反省しろというのも無理な話ではないか。

真次郎が長年勤めている間に、刑期を終えたり、仮釈放になった有期刑の受刑者が同じ舎房から出所して行く。

真次郎の様に無期懲役の受刑者にも、仮釈放になる望みはあるのだが、真次郎の場合戦争で家族が全滅しているので、身元を引き受けてくれる者がいない。

自分が犯した殺人の罪を、心から反省しているという態度をしているつもりでも、やはり本当に自分が殺した訳ではないので、反省している態度にも真実味が欠けてしまうのか、真次郎の服役態度が評価されて仮釈放の審査に登るということも無い。

勿論面会に来る者などはいないし、手紙をくれる者もない。真次郎にはこの理不尽を受け入れて平静を保っていることだけで精一杯である。

「……もう、何を訴えても、何を思っても無駄なのだ……と思いましたが。しかし……俺がここにいないければならないということは、これは一体何なのだ？　これは……神様に強いられた一生の懺悔なのか……と思う様になりました……ねえ神様、これが、俺がしてきたことへの、報いだって……いふんですか？　って問いかけたり、し

ました……」

真次郎はそんな風に考えていた。それが本当にそうなのかどうかは解からない、でもその時の真次郎にとっては、自分の生涯の意味とは何なのかと問われれば、何かを償う為だけにあるのだという様にしか答えられない。

まるで映画の場面が変わる様に、真次郎の中で記憶の場面が変わっていく。

その日真次郎は工場の脇にある食堂で他の囚人たちと昼食を食べている。献立はカレーライスで、皆がガツガツと食べている音が響いている。

食べ終わるとテーブルの隅に食器を集め、皿や器などと同じ種類の食器ごとに重ねて整理しておく。

その日は配膳の係になっている真次郎は、各テーブルごとにまとめられている食器を集め、炊事場の流しへ持って行き、水を出して洗い始める。

食器を洗いながらふとステンレス製のスプーンに目を止める。真次郎は自殺を考えていた時に、ナイフか包丁があれば手首が切れるのにも思っていた。

工場の食堂で使う食器はナイフやホーク等、先端が尖って武器になりそうな物は使われない。だがカレーの時に使うスプーンはステンレス製である。コレを削って先端を鋭利に尖らせることが出来れば、手首を切ることも出来るのではないだろうか。

顔を上げると流しの前の窓から外のグラウンドが見える。運動の時間に並んで体操をしたり、野球をしたりするところである。

もしこの窓からスプーンを放り投げておいて、その場所を覚えておけば、運動の時間に何気なく拾って服の中に隠し、舎房へ持ち込むことが出来るかもしれない。

刑務所では全てが規則でがんじがらめにされており、自分の自由になることは何もない。でも何かひとつでもいい、誰にもバレずに

規則違反なことをしてやりたい……。

それがあれば自殺出来るかもしれない、ということもそうだったが、最初の動機はそんなところだった。

でもスプーンのことは、麻里恵に突き刺すまでは晴美と沙奈には隠しておかなければならないので、思い出してもこの件は口に出さないでおく。

舎房と工場との行き来には例の「カンカン踊り」があつて工場を使う工具や木材の切れ端でも舎房へ持ち込むことは不可能だと思われる。

真次郎は次の運動の時間に、グラウンドでブラブラ歩きながら何気なく工場に併設された食堂の側を通り、炊事場の窓の位置を確かめておく。

……あそこが食堂の窓だから、この辺の草むらにスプーンを投げることが出来れば、運動の時間に拾うことが出来るかもしれない。

そして真次郎はその計画を実行し、まんまと一本のスプーンを舎房に持ち込むことに成功する。

だが、舎房の布団の中に隠しておいたスプーンが、工場の作業に出ている間に抜き打ちで行われた巡検で刑務官に見つかってしまった。真次郎は七日間懲罰房へ入れられ、同じ舎房の受刑者たちも共同責任ということで一ヶ月間テレビの視聴を禁止されてしまった。

懲罰が終わり、舎房へ戻っても、暫く他の受刑者たちは口もきいてくれない。

真次郎は晴美と沙奈にはスプーンの件を飛ばして、刑務所での生活について話を続ける。

「……刑務所は……冬は、ストーブも無くて、寒い……なんのつて、いつも、ガタガタ、震えて……いまし、た……それに夏は暑くて、何も、しなくても、舎房に、いるだけで……汗が、ダラダラ、流れて……息を、するの……も、苦しい、くらい……」

真次郎の脳裏に走馬灯の様に刑務所で過ごした日々が映し出され

る。

秋の運動会でリレーの選手になり、走っている自分。お正月の豪華な食事は沢山のお菓子もついて嬉しかったこと。規則違反をせずにいれば月に一回見られる映画鑑賞会のこと。その時に見た映画のシーンさえ脳裏に再現される。

それ等のことを淡々と晴美と沙奈に話していく。しかし、本当の意志を悟られてはならないので、本当に自分が最早麻里恵のことを恨んでなどいないと信じさせる為に、話してもいいことや、内容を脚色しながら話の筋を作っていく。

四五年間いた刑務所の中で唯一、真次郎が本当は殺人犯ではないという話を「そうかい、俺は信じるぜ」と、信じたフリをしてくれた受刑者がいた。

「……あの人は……確か傷害罪で……懲役、六年だったかな、今頃は どうしているだろう……」

同じ舎房で仮釈放になる受刑者に、他の受刑者が外で待っている自分の家族を訪ねて貰うことを頼んだり、ささやかなお祝いをしたりしている。真次郎だけは一人離れて、羨望を噛みしめている。

「……そうして、俺の時間は……無くなって、行きました……四十年代を過ぎて、五十代になっても……六十代も……俺の、人生は全部……刑務所の中、だけでした」

刑務所では、それが嫌でも、とうに飽きてしまっているというところで、他のことがしたいと思っても、それは意味のないことである。

刑務官にやれと言われたことをする。どんなに自分の意に反することを命令されても、逆らえない。あるのはただ我慢だけ。刑務所にいることは、我慢すること。我慢して、我慢して、ただ日々だけが淡々と過ぎる。

全ての屈辱に耐えた。いや、もう屈辱ということにさえ感心がなくなるくらい、自分を捨て去らなければ、ここでの暮しを続けて行

くことは出来ない。

そうした生活を送って行くに連れて、いつしか無意識のうちに気持ちの変遷が起きてくる。

「毎日……俺は我慢して……働いて、気を遣って、怒られない、ようにしました……飯を喰って、風呂に入って、寝る……それだけです。でも……それは、世間で……普通に暮らして、いる人だって……仕事を、していれば……同じ様に、少なからず……あることなんじゃ、ないか……と、思う様に、なり……ました」

理不尽にも慣れた生活を送っていくにつけ、きっと人が生きるのは刑務所の中も外もそう変わりはないんだと、真次郎は自分に思わせてしまおうと思う。

……そうさ、人の生きるとは概ねこういことなのだ。

「……俺は、もう……何かを考える、ということ……止めること……に……しました。だって……何を考えても、何も変わらない……考えても無駄なんです。俺は……ただの、機械の様になって、思ったり、考えたりすることは、もう止めよう……と思ひ、ました」

そうして絶望することにも慣れてしまうと、気持ちは大分楽になったのだが、それでも時間は有り余る程ある。考えまいとしても思考が勝手に動いてしまう。そうして真次郎は、今度は落ち着いて今までに自分のして来たことを振り返る様になる。

「……それは、何故、自分は……こんな状況に、なってしまったのだろう……ということでした。そりゃ……マリのことを、憎んではいるけれど……マリと、俺との、経緯を……順を追って、思い返してみると……幼い、頃に出会って……戦争から、戻って、また、会って、愛し合って……ああ、楽しかったな、あの頃は……」

話を聞きながら、沙奈はハンカチで目を拭う。

「そして……それから、俺が……マリ、にしたこと……を、考える、と……マリが、谷本さん……を刺す、原因を作ったのは、俺だったんじゃないのか……という、考えに……行き当たり、ました。実

際に、包丁を、刺したのは、マリだった……とはいえ、俺が、殺させたのも……同然だったのでは、ないか……という考えが、浮かびました……」

晴美も食い入る様に真次郎を見つめている。

「……いや、そんなことはない……とも思う。でも……そうすると、また自分の中に……激しい、苦しみが……生まれるので、それよりは……俺も、悪かったじゃないか……と思った方が……心が楽になる気がして……俺は、少しでも……楽になりたかった、から……」

話しながら気が付くと、真次郎はいつの間にか左手を宙に上げている。それを晴美がしつかりと両手で包み込む。

「……そうだよ、俺が……マリの人生を……狂わせちゃった……んだから。夫を、殺させたのは……俺だということも……出来るじゃないか……だから、俺が、こうして服役、しているのも……まんざらのを得てないとは……いえなんだ……そうだ、そうだ……」

だがそれは、自分の中に渦巻く恨みの苦しさを少しでも軽くする為に、自分を納得させなければいけないことから生み出した、自分を騙してでも生きて行く為の手段だったのかもしれない。

それを続けているうちに、思い込みにしろどうか自分が刑務所に入っているのは当然のことなのだという気持ちを作り出すことが出来る様になっていった。

「……だって、そうとでも、思わなければ……あんな、理不尽な所で……生きて行く、ことなんて……出来なかった……そうだ。そもそもマりに、谷本さんを殺させたのは、俺なんだ……から、俺が谷本さんを殺したのも……同然なんだから……俺が、こうして、刑務所に……入っているのも、当然のことなんだろう……と、思う様に、なり……ました」

晴美の目から涙がポロポロとこぼれ、それは握られている真次郎の左手に滴り落ちる。

そうして長い年月を経て行くに連れ、真次郎が当初言っていた「何で俺が……」という呟きがいつしか「これで良かったのか、こう

なるのが自然の流れだったのか？」という眩きになり。それが更には「こうなるべくしてなったのだ……」という眩きに変化していく。そして気が付くと「これでいいんだ、これでいいんだ……」と眩きながら作業している途端に「おい、一五七番、ブツブツ言うのやめろ！」とオヤジさんに怒鳴られる。

いつしかそれは、何故とか、どうしてその言葉を言い始めたのか、という理由を離れて、ただ今この瞬間に、こうしている自分を肯定する為の呪文として定着していった「これでいいんだ……これでいいんだ……」ただその言葉を繰り返すことで、真次郎は日々をやり過ぎして行くことが出来ているのだ。

そんな風に少しでも麻里恵のことを許そうという気持ち芽生えてくると、優しかった麻里恵との、楽しかった日々のが思い出される。

東京での日々。ドアを開けると神戸から逃げて来た麻里恵が立っていたあの光景「私、来ちゃった」と笑って言った顔。

夕暮れの商店街を歩いて銭湯へ行き、帰りにラーメン屋で二人で井を交換しながらラーメンを啜ったあの時……ああ、あのラーメンは美味かったな……。

刑務所に入るまでに真次郎はいろんな女とセックスをしたけれど、それは皆風俗店のプロやホステス等の水商売の女ばかりだった。本当に心も繋がっていると思っただのは麻里恵の身体だけだった。

一番フィットして、お互いのツボを心得ていた。あの壮絶に混じり合った感覚を、今も全身で思い出すことが出来る「ああ、マリ……」真次郎は麻里恵とのことを思い浮かべては舎房の硬い布団の中で自慰行為をするようになり、麻里恵が恋しい存在になってくる。

……ああ、可愛いマリ、俺だけのマリ、大好きだったよ……でも、もうそんなこと言っても信じてくれないだろうね。俺はお前を傷つけたんだから……。

「……でも……正直に、言うと……刑務所で、嫌なことがあったり

……自分には、絶対にない……仮釈放を、して行く……他の受刑者を……見たりすると、忘れていた……怒りが、一気に、ぶり返してしまう……ことも、ありました……」

……マリ！ ちくしょう！ あの女めえく！ 半分は俺がアイツをそこまで追い詰めてしまったのが悪いのだから、俺にも責任があるのは解る。だけど、やってもいけない罪を被って何故俺が刑務所に入らなければならぬんだ！

その考えが戻ってしまった時には、逃れられない逆上に襲われる。それは地獄の苦しみだった。

「……作業していて……抑えられない……怒り、が込み上げて、自分の、手を……動いてる機械に……突っ込んで……」

……あれは、刑務所に入ってから十年は経った頃だったろうか、もう四十代も半ばを過ぎて、五十に近くなった頃、絶望も諦めになって、一度は何も考えずに生活出来る様になっていたのに。ある日いきなりぶり返した怒りに耐え切れずに、やってしまった……。

「ぎゃあー！ー！！」

痛みに叫び声を上げて手を引き出すと、血まみれになり、小指が落ちそうになっている。

「大変です、オヤジさん！ 相沢さんが、大怪我です！」作業していた受刑者たちが集まり、真次郎は腕を抑えて蹲ってしまう。

真次郎は包み込んでいた晴美の手を振り解いて、左手で右腕を持ち上げて見せる。今もその傷跡が小指の付け根から手首にかけて伸びている。

「……コレ、が、その時の、傷です……」

と言つて晴美と沙奈に見せる。

……そうだ。俺が、またスプーンを盗んだのは、そのことがあってからだった。

真次郎は思い出す。また工場の食堂で炊事当番になった時、何年前にやったのと同じ方法で、またスプーンを盗んだのだ。そして今度は、作業中の巡検でも見つからない様に、舎房での隠し場所を

変えた。

それは便所だった。前々から考えて、便所の中の板壁の一部を取り外せる様にしておいた。スプーンはその中に隠しておく。舎房の便所は上がガラス張りになっていて、用を足している最中も上半身は外から見える様になっている。

真次郎は自分が用を足す時の、ほんの短い間だけそこからスプーンを取り出して、誰にも見えない様に足元の水が流れるパイプに擦り付けて先端を削ることにする。

その為になるだけ大便をしに行くのをゆっくり入っついていられる夕食後の余暇時間にすることにし、それでもせいぜい十分間くらいの間だけ、それも音がしない様にゆっくりとパイプに擦り付けていく。一度に削れるのはほんの僅かにすぎないだろうが、それでも毎回やっていれば少しずつでも削れてはいるだろう……何しろこれから何十年も先まで時間はあるのだから。

今回真次郎にそれをさせているのは、自分の首や手首を切ろうとということではなく、いつか麻里恵の胸にこのスプーンを突き刺してやろう。という思いだった。

それを使って将来現実にここを出て麻里恵のところへ行き、突き刺せる日が来るなどはとても思えない。だがそれでもその作業をやらずにはおれないのだ。

そうすること、ここで地獄の様に麻里恵を恨んでいる苦しみから少しでも逃れることが出来るのだ。

……例え何十年か先にでも、いつかコレで麻里恵の胸を刺し貫く時が来るかもしれない。

一度の用便で削れるのが例え一ミリの何十分の一かだとしても、俺はコレを続けることで、その日に近付いているのだ……俺はきつといつかここを出て、麻里恵に復讐してやるのだ。

真次郎はそのスプーンを尖らせて、麻里恵の胸に突き刺す瞬間のことをイメージして自分を慰める。毎日根気良く地道に削り、スプーンに思いを託していく。

……いつか必ず麻里恵を殺してやる！ 絶対にやってやる！ 返せ！ 返せ！ 俺を返してくれ！

そうして同じ舎房の受刑者たちにも知られることなく、便所でスプーンを削り、心が落ち着いてくるとまた「やっぱり俺も悪かったんだ」という反省に戻る……そんな堂々巡りを繰り返しながら、ただ日々だけが過ぎて行く。

「……それから、何十年も、年月が、進んで行くに、連れて、俺は……思うように、なった……んです。あの時、マリは、晴美ちゃんを家に置いて来たこと……を悪いと……晴美がきつと、寂しい、思いを……しているから……可哀相と言つて、泣いてた……だから。今度は、俺に、罪を被せて……しまった、こと……を悪いと、思つて、泣いて、るんじゃないか……つて」

晴美は再び真次郎の左手を握る。

「……マリは、一度も、手紙、もくれなかった……けど、でも俺に、は、マリの、気持ち……が、ちゃんと、解かつて、いた……」

それは長い刑務所生活を強いられる中で、真次郎の心が作り出した幻想だったのかもしれない。それは刑務所で生活する真次郎にとつて、初めて見出した救いだった。その確信が、真次郎の刑務所での日々の支えになっていった。

晴美がまたボロボロと涙を流しながら、ウンウンと大きく首を振つて頷く。

「そうですね相沢さん。その通りです。母さんは、本当に、毎日の様に、貴方に悪いことしたつて、泣いていましたよ」

それを聞いて、黙っていた沙奈が口を開く。
「でもそれじゃなんでお祖母ちゃんは本当のこと警察に言おうとしなかったの？」

「だからそれは私が行かせなかったからだよ。私がね、お母さんに頼んで、もう警察には行かないでくれて頼んだんだよ」

「……」

「もう……いいんです、よ晴美さん……俺には、分かる。マリは昔から……泣きべそだったから、今もきつと、自分の罪から……逃れることが、出来ないで。俺のこと、忘れること、も出来ないで……泣いているに、違う……って思って、ました……」

その時は本当に、そうだ、きつとそうに違うと思っていた。何よりもそう思うことは自分の慰めになった。

木材を電気カンナに掛けながら思っていた……今この瞬間も、アイツはきつと泣いているに違う。ざまあみやがれ。それでも俺の苦しみに比べたら屁でもないだろうが、あの女は、俺の為に一生泣いて暮らしていればいいんだ！

……そうさ、麻里恵は俺がいなければ何も出来ない、卑怯で弱い女なのだから……。

そんな風に憎んだり、恨んだり、許したり、そしてまた怒ったり、長い長い刑務所の暮らしの中で、真次郎の麻里恵に対する感情は変化していく。

いずれにしても服役中の四五年間、真次郎は片時も麻里恵のことを忘れたことはない。

そして麻里恵もきつと俺のことを忘れたことはないだろう。と思っていた。真次郎を自分の身代わりにしてしまった罪の意識に苛まれていることも分かっていた。

かと言って麻里恵は自分で名乗り出る勇氣もなく、本当のことを言っ警察に行く勇氣なんてある訳もない。そんな卑怯な自分を持って余して、結局は泣くことしか出来ないのだ。

罪を被っている俺に甘んじることではしか生きて行けずに、毎日泣いているに違うのだ。

「……俺には……マリの、気持ち、が……手に取る様に、分かりました。マリは、そういう……女なんです。俺は……よく知ってる」
そんな風に思っている間は、ここにいなければならない虚しさから逃れることが出来る。

だが、暫くはそんな風に思っ日々を過ごしても、またふと麻里

恵は本当に泣いているのか……という疑問が沸き上がってしまう時もある。

……もしかしたら全くの平気の平左で晴美ちゃんと楽しく笑って暮らしてるんじゃないだろうか……と思うとまたはらわたが煮えくり返り、激しい殺意が沸き上がってくる。

……でも今はもう憎しみに包まれてしまう時のことは話さずにいよう。許した時のことだけを話して、そして本当に俺が許していると思いつまらせて、そして何とか麻里恵のいる病室まで連れて行って貰わなければ、施設から持って来たあのスプーンを持って……。

「……俺は、思う様に、なり、ました……どれだけ、離れたところにおいて……何十年も、会うことが……出来なくても、俺は……マリと、一心同体なんだ、と……俺が、マリをよく、知っている様に……マリも、俺のことを、よく知ってる……俺たちは、今こうしている間にも……心が通じてるんだと、そう……思って、いました……」それは本当に思っていたことだった。小学生の時、苛めてた頃と変わっていない。麻里恵は優しい女だから。今も俺のことを思って泣いている。と思っていた。

……あの女は、罪の意識はあっても名乗り出ることは出来ない。卑怯な女、いや卑怯といつては可哀そうか、弱い女なんだ、アハハハハハ……。

……麻里恵は俺のことが大好きなのに、俺しか頼る者がいないのに、俺が背を向けたことが許せないんだ。今だって自分を蔑ろにした俺に振り向いて欲しいから、俺に甘えて罪を被せてるんだ。ならばお前の望み通りに、酷い目に遭ってやろうじゃねえか。お前を苦しめた仕返しにこんな目に遭っているのだという苦しみを、存分に味わってやろうじゃねえか……。

そして俺はきつと、いつかきつとここを出て、このスプーンを持って、麻里恵に会いに行くんだ……それが俺の、生きる目標になっていた。

最後に、もう真次郎が麻里恵を恨んでいないことを晴美と沙奈に

信じさせる為に、真次郎は頭で作った文章をこう話す。

「ようやく俺は……自分が刑務所に、入ってる意味が、解るようになった……んです。それは……俺が身代わりに、なってることで……麻里恵、の罪を償い、麻里恵を守ることになっている……同時にそれが、自分の……麻里恵に犯した罪の、罪滅ぼしなんだ……というこを」

それは確かに今考えて二人を騙す為に作った言葉ではあるが、自分の言っていることは嘘なのか、服役中に本当に思っていたことなのか、頭の中が混乱してくる。

不意に起きた混乱に戸惑って考えてみると、昨夜夜中に施設を脱走して来たので、毎朝飲んでいた川柳先生の処方した薬を今朝は飲んでいない。

麻里恵の代わりに刑務所に入れられたのだという事実を聞いた衝撃で一挙に明晰になっていた頭に、また少しずつ霞が掛かってきた様な気がする。

……あの薬の効き目が無くなってきているのだ。

急がなければならぬ、このまままた何も解からない元の状態に戻ってしまったのでは、ここまで遙々やって来た目的をやり損なってしまふ。真次郎にとって、それは生涯を賭けた目的なのだ。

コレを絶対にやり遂げなければ、俺の人生は報われない。でなければ、台無しにされた俺の人生が可哀相過ぎるじゃないか……。

必死になって真次郎は晴美に訴える。

「……俺が、マリに谷本さんを……殺させたような、ものだから……マリの代わりに……服役することで、俺は自分の、生きる道を……通したことになるんだと、弱いマリが、こんな辛い、刑務所生活を……勤められる訳も……ないのだから。麻里恵の、身代わりに……なり、責任を取った……ということが、自分の人生だと……思うように……なった。んです。それ……が人生、の目的……となり、服役生活……を真面目に……勤め、る……こと、が出来るように……なった、んです」

晴美は涙を拭いながら話に聴き入っている。

「……そうこう、しているうちに……年月は流れて、やがて……俺は、作業中に脑梗塞、になって……半身麻痺に、なりました。医療刑務所……に移されて、そこで頭がボケて……気が、付いたら……あの施設に、いたんです……マリは、自分の夫を、殺して……その罪を……俺に被せて、俺が、服役してる……というところに、毎日……怯えて、泣いてたに違いない……んだ。それを、許してやれる……のは、俺だけ……なんです。だから……今すぐに……許しに、行って、やりたい……んです」

晴美は泣きながらウンウンと頷く。そして「はい、はい解りました……」と言う。

「……よし、もう大丈夫だ。あと一押しで、きっと麻里恵に会うことが出来る。」

「俺……はもう、全然……マリ、を恨んでない……マリ、はきつ……と、俺、を……身代わり、にしたこと……に今も、心を、痛めている……だから。俺はもう……怒ってないと、言つて……やりたい……そもそも……俺が悪かったんだ……つて、謝つて……やりたい……許して、やりたい……」

「……殺してやる、殺してやる！ 麻里恵よ、待っている、今になってまさか俺がやって来るなんて思いもしていなかったろう。」

今俺が遂に、こんな身体になつてでも、お前に恨みを晴らしに行つてやるからな……。

2

「ウワァー……」

真次郎の話に聴き入っていた晴美は泣き崩れる。

「……本当ですか……本当ですか相沢さん……私は、貴方になんとお詫びすればいいのか……私の方こそ本当に取り返しつかないことをしてしまいました。ごめんなさい、ごめんなさい、それに私は

貴方が旅館に来た時……殺してしまおうとしたんですよ」

晴美の言葉を打ち消す様に真次郎は激しく顔を横に振る。

「いいんです……もう、いいんですよ……それは、許してます……
そうしようとした、貴方の、気持ちも……解ります。俺は、全部、
許して、るんです……」

「ごめんなさい……それに……ありがとうございます。貴方には、
本当に申し訳ないことをしました。決して許して貰えることではな
いけれど、取り返しがつかないことだと思えますけど、それでも、
許して下さいと言うんですね……」

「はい……」

「私はねえ相沢さん。母のことが可哀相でした。あの時、母が私を
置いて貴方の所へ逃げて行ってしまった時、そりゃ悲しかったけど、
でもそれまでずっと母が父に殴られるのを見てましたから。逃げた
のも仕方ないと思いました」

解かる解かると言う様に、真次郎も頷いて見せる。

「でもねえ相沢さん。貴方は覚えていないみたいだけれど、私はも
うひとつ、貴方に打ち明けなければならぬ事があるんですよ……」

「……えっ？」

……まだ何か、俺が思い出していない事があるというのか……も
うこれ以上他に何かあるというんだ……。

「打ち明ける事って、何よお母さん」

「実はね相沢さん。私の母が連れ戻しに来た父を刺してしまったの
は、最初に父が母を連れ戻しに行った時じゃなかったのよ」

「……」

「……えっ？ 最初について、どういうこと？」と沙奈が訊ねる。

「だからね、お母さんは、その前に一度お父さんに実家へ連れ戻さ
れてたのよ、その時は私は東京に行っていないの。お父さんがひと
りで行ったの」

……真次郎の脳裏で記憶が混乱してくる。映し出されている映像
では、麻里恵が連れ戻しに来た谷本に杖で殴られている。真次郎が

止めろというのでも聞かずに、振り上げてはバシバシと何度も杖を降り降ろし、背中と言わず頭と言わず殴っていく。

「やめて下さい谷本さん！ もういいですから、もう連れて帰って良いですから、お願いですからもうそれくらいにして……」

と言う真次郎に谷本が振り返り、ギロリと睨む。

「連れて帰っていいだ？ お前は人の女房を盗んでおいて、お前に良いなんて言われる筋合いはないわい！」

と言って真次郎に向って杖を振り下ろす。狭い部屋の中で真次郎は身体を交わして逃げる。谷本は足が不自由なので思う様に杖を当てる事が出来ず、部屋の中をガンガン叩いて壁や襖に穴を開けていく。

……そうだ。確かに、その時の光景には、晴美ちゃんがない。

谷本がビュンビュン杖を振り回すので、どんなに避けても身体に杖が当たってしまう。谷本は思う様に歩けないのだから、部屋にある卓袱台や座布団を投げ付けたり、隙を突いて足をなぎ払ったりすればいいという事は解かっている、真次郎にはそれが出来ない。それは自分に非があることは勿論なのだが、この場を我慢すれば、麻里恵と別れることが出来ると思ったからだった。

それと今思えば、自分は戦争から無事に帰って来たのに、重大な怪我をして帰って来た谷本を気の毒だと思う気持ちも少しはあって、反抗する気を失っていたのかもしれない。

そしてこうなってしまうのは麻里恵も観念して夫の元に帰るしかないだろうと思っている。それが一番良いのだと思う。

「真次郎さん！ 真次郎さん、助けて！」

「……ごめんな、マリ。俺たち、やっぱり無理だったんだよ。ご主人は本当にお前のことを心配して来て下さってるんだから、やっぱりご主人のところに帰るのが一番なんだよ」

「そんな……嫌だあ、私、嫌だあ」

「黙れ！ 黙れえっ！」

谷本は逆上して尚一層の力を込めて麻里恵の身体を杖で叩く。

ひとしきり暴れてしまうと、谷本は顔や手から血を流している麻里恵を、杖で追い立てる様にして外へ出そうとする。

「……嫌よ、嫌だよ真次郎さん……ねえ、お願い連れて行かせないでよ、ねえお願いだから」

真次郎は黙って見ている。

谷本は麻里恵をバシバシと叩いてドアへ追い立てる。そして遂に外に出すとバーンとドアを閉めてしまう。

……確かに、この時麻里恵は、谷本のことを刺したりせず、連れ戻されて行った。そして晴美ちゃんもそこにはいない……。

晴美の話は続く。

「それでね、神戸まで連れ戻されて二週間くらい経った時、また相沢さんのところへ逃げたのよ、その時は私を連れて……」

「どういうこと？ だってもう、お祖母ちゃんは相沢さんに捨てられてたんでしょ？」

「だからね、もう一度相沢さんの所に行って、関係をやり直して下さいってお願いしようって、私がお祖母ちゃんに言ったのよ」

「お母さんが？ またお祖母ちゃんと一緒に相沢さんのところへ逃げようって言ったの？ どうしてそんなこと言ったの？」

「そりやお祖母ちゃんが可哀相だったからだよ。お祖母ちゃんはね、相沢さんのところから連れ戻されてから、部屋に閉じ込められて、毎日お祖父ちゃんから酷く殴られて、可哀相で見えられなかったんだよ。それに私も、もうこんなお父さんとは一緒にいたくないって思ってたんだよ」

「それで？ 一緒に逃げたの？」

「そうだよ」

「それでどうなったの？」

「だからそれで……」

と言って晴美は真次郎を見る。真次郎の脳裏に、今まで再生されていなかった映像の断片がフラッシュの様に映し出されてくる。

谷本に暴れられて壁や襖に穴が開いたままの六畳間で、麻里恵と

中学生の晴美が真次郎の前に座っている。

「……何でまた逃げて来たりしたんだよ。折角元に戻ったのに、今度は晴美ちゃんまで連れて来やがって、何考えてんだ？」

それは夜が明けたばかりの早朝で、まだ真次郎は布団の上で寝間着姿である。

麻里恵の顔は、あの後更に谷本から酷く殴られた痕が見て取れる。目の上や唇が腫れ上がり、見ているだけで哀れである。

その時真次郎はこう思っている。……やっとなり麻里恵と縁が切れたと思っていたのに、今度は晴美ちゃんまで連れて戻ってくるなんて……厄介なことになっちゃったな……。

「また戻って来たりして、俺にどうしろって言うんだ？」

「お願いします。助けて下さい……」

「助けてって言われてもなあ……」

「……」

黙っている麻里恵の横で、晴美がおもむろに鞆の中から取り出した物を見て、真次郎は眼を見張る。

それは札束である。輪ゴムで縛られた一万円札の束。それを晴美は鞆から取り出して、畳の上に置く。一つ、二つ……百万円の束が二つで二百万円。

真次郎はゴクリと唾を飲み込む。

「ど、どうしたんだい？ この金は？」

「は、晴美！」

麻里恵も驚いている。どうやら麻里恵も晴美がこんな大金を鞆に入れていたことを知らなかったらしい。

驚いている真次郎と麻里恵を余所に晴美はまるで落ち着き払った様子で答える。

「これは、私が家の金庫から持って来ました」

「家の金庫って？」

と思わず真次郎は身を乗り出す。

「お父さんが、家の中に隠してる金庫です。大阪の闇市で稼いでた

頃に、税務署にも届けてないお金だから、金庫に入れて隠してたんです。私はその場所を知ってたから、ダイアルの番号が書いてある紙もこっそり見つけて、覚えたんです」

「そんな、それじゃこのことはお父さんは？」

「勿論知りません」

「そんな！　なんてこと！」

と麻里恵が咎める様に言う。

「お願いです。おじさん、このお金で、私とお母さんのこと、連れて逃げて下さい。お願いします。私もうお父さんのところにいたくないんです。お願いします。お願いしますから……」

と言って晴美は畳に頭を擦り付ける。

「うーん……」

二百万の札束を見て真次郎は考え込んでしまう。

「私は、今もあの時の貴方の顔を覚えていますよ」

と今晴美に言われると、真次郎は居た堪れなくなってしまう。

真次郎が晴美の言うその顔をしていた時、頭の中で考えていた……この金は谷本さんが戦後に闇市で稼いだ税務署を通っていない金なんだ。だから盗まれたとしても警察には届けられないのかもしれない……。

「ようし、晴美ちゃん。分ったから、ちよつとここで待ってなさいよ」

と言って真次郎は寝間着を着替えると、札束を自分の鞆に詰め込む。

そのまま麻里恵と晴美をアパートに残し、金を持って銀行に向う。そして自分の口座に全部預金してしまう。

真次郎には悪賢い考えが浮かんでいる。麻里恵がまた逃げたと知れば、谷本さんはきつとまたここへ来るだろう。そしてこの前と同じ様に麻里恵を連れて帰るに違いない。そうなれば晴美ちゃんもここに居る訳にはいなくなる。

……そして俺は、金のことは知らないと言う。晴美ちゃんが何を

言ってもそんな物は知らないと言ひ張る。

もし谷本さんが金を返せと言ひ出したら、それなら警察に届ければいいじゃないですかと言つてみよう。闇市で稼いだ金だから、下手をすれば没収された上に罰金まで取られるかもしれないのだ。だから谷本さんは警察には言えないかもしれない。そうなれば俺にとつてはまたとない幸運じゃないか……。

晴美の持つて来た二百万円を銀行に預けると真次郎はアパートに戻つて来る。しかし部屋には入らない。そつと離れた所から見ながら、谷本が来るのを待っている。

二百万円もの金があれば、すぐにここを引き払つて、何処か谷本に見つからないところへ逃げることも出来るのだが、真次郎はそれをしない。金は貰つて麻里恵と晴美だけを谷本に返そうと思つている。

その時の悪い考えは、紛れも無く真次郎自身が考えた悪さである。隠れてアパートを見ているうちに午後になり、待ちくたびれたのか麻里恵と晴美が部屋から出て来る。マズイと思い、真次郎も部屋へ戻る。

「何処に行くんだ？」

「何処に行つてたんですか相沢さん！ 早く逃げないと父さんが捜しに来ちゃうよ」

「ああ、悪かったな、大丈夫だよ。さ、部屋に入つて相談しよう」

と二人を部屋の中へ戻す。そして内心、谷本さんよ、早く来てくれよ。と思つている。

「早く、ねえ早く真次郎さん。兎に角ここを出ましようよ。でないと谷本がやつて来ます」

「うん、解かつてるよ、でもある程度行き先を決めてからでないと動くにも動けないだろう」

等と言ひながら真次郎は時間を稼ぐ。

「そんなことはここから出てから考えましようよ、そうしないと、また見つかったら……」

麻里恵は恐怖に慄いている。そして案の定、そうこうしているうちにバンバンと激しくドアを叩く音が響き出す。

「ああ〜！ 来たっ！ だから言ったのに！ だから言ったのに！」
「やめてえ」

という晴美の訴えも聞かず、真次郎はドアを開け放つ。果たしてそこには恐ろしい形相をした谷本がいる。

「きゃあー」

麻里恵は恐怖のあまり叫び声を上げる。

靴も脱がずにドカドカと上がり込んで来た谷本は、逃げ惑う麻里恵の髪をつかみ、後ろへ引き摺り倒す。

「いやあ〜〜っ！」

「やめて、お父さん！」

腕に縫り付いて哀願する晴美を振り解き、肘鉄を喰らわせて跳ね飛ばす。

麻里恵の腕をつかみ、外へ連れて行こうとする。嫌がる麻里恵の顔を谷本は何度も殴りつける。麻里恵が暴れて、弾みで谷本の杖を蹴飛ばし、谷本が倒れる。

瞬間麻里恵の表情が無くなったかと思うと流しから包丁を持って来て、転んだ谷本の上に馬乗りになる。

傍観していた真次郎は叫ぶ。

「バカ！ やめろー」

麻里恵は振り上げた包丁を突き下ろす。

ズブーッ……。

「ぎゃあー！ー！ー！ー！！！」

谷本の絶叫が響き渡る。

「麻里恵ー！ーっ！」

馬乗りになった麻里恵を見つめて、谷本は眼を見開く。

「馬鹿っ……馬鹿な、麻里恵……」

谷本に突き飛ばされて、麻里恵は床に落とされる。

谷本の胸には突き刺さった包丁の柄が立っている。

「もう嫌っ、もう嫌なのよ……私嫌なんです……お願いします……許して下さい……」

と言って麻里恵はその場にへたり込む。恐怖に引き攣りながらそれを晴美が見つめている。

気丈にも谷本は胸元に包丁を刺したまま立ち上がろうともがいている。

真次郎は驚きのあまり声も出せずにいる。

谷本は胸に包丁を刺したまま杖を床に突き立て、ヨロヨロと震えながら身体を立ち上がらせようとする。

「お前、ら……」

真次郎は驚きに目を見張る。

「お前等あ……」

遂に立ち上がった谷本は、物凄い目で真次郎を、麻里恵を、晴美を睨み回す。そしてバランスを取ると杖を放し、刺さっている包丁の柄を握り、引き抜こうとする。

咄嗟に真次郎は言う。

「谷本さん。止めなさいよ、抜いたら血が一杯出て助からなくなりますよ」

と言って駆け寄り、包丁を引き抜こうとするのを止める。

「放せコイツ……」

「本当だよ、抜いたら血が止まらなくなつて、死んでしまいますよ！」

柄を握る谷本と揉み合いになり、抜こうとするのを阻止しようとする真次郎は包丁の柄を握る。

しかし谷本が暴れるので、柄を持っては返って抜け落ちてしまふと思う、手を放す。

「放せい、バカ野郎が！」

仕方なく真次郎は後ずさる。

「お前には関係ないっ」

「関係ないって……」

「お前等の為だろうが」

「えっ？」

谷本の視線はヘタリ込んでいる麻里恵と、頬を抑えて谷本を見ている晴美に注がれている。

「俺がこうなったのは……」

麻里恵が顔を上げる。

谷本は麻里恵と晴美の顔を睨み付けて、柄を握り絞める。

「お前等の為だろうが、俺がこんな身体になったのは！ お前等を守る為に戦ったせいだろうがあ！」

「お父さん……」と晴美が言った瞬間、谷本がズボツと包丁を引き抜く。

途端にブシューツツと血が噴き出し、晴美の顔面に噴きかかる。

「きゃあーあーあああああ………」

3

遠い地平に思いを馳せる様にして、晴美は語っている。

「あの時、私は思いました。同じ戦争に行って、貴方は無事で帰って来たのに、どうしてお父さんはあんな怪我をして帰って来たんだろう、って。貴方と逆なら良かったのに、って」

今真次郎の目も同じ地平を見ている。

「……私は優しくて物静かだったっていう、戦争に行く前のお父さんのことを全然知りません」

引き抜いた包丁を床に落とし、自分から噴き出した血の海に谷本は倒れていく。ドシャーン！

麻里恵は背中を丸めて放心している。晴美は鮮血に染まった顔を覆って泣いている。

「何やってんだ！ このバカ！ 何てバカな女なんだ……ちくしよ、お前は、全く、しょうがねえ……」

起きてしまったことを收拾することも出来ず、真次郎もまた立ち

尽くしている。

病室で話を聞いている沙奈も、まるで今自分もそこにいる様に放心している。

「私はあの時、お母さんがお父さんに殴られてるのに、他人事みたいに知らん顔してた貴方のことが憎かったのと、これから先お母さんまでいなくなったらどうしようと思って。それで警察に、貴方が刺したって言いました」

ベッドの上の真次郎が急に血迷った様に喚き出す。

「……うう……それ、は違う！ ……俺じゃない、ああ俺じゃ……ないんです……よう！」

暴れ出した真次郎を見て沙奈が慌てて宥める。

「相沢さん。相沢さん、大丈夫ですよ、相沢さん、もうここは警察じゃないですよ。ここは病院ですよ。もう誰も捕まえる人なんかいませんから、大丈夫なんですよ……」

「……」

真次郎は病室を見回す。沙奈の顔を見る、晴美のことも。

そしてやつと今の状況を思い出したのか、喚くのを止める。やはり薬の効き目が薄らいでいるのか、少し意識が朦朧としている。

……そうだった。俺は、やつと思いついたんだ。今までのことを全部……そうだ。俺は麻里恵を殺すんだ……。

「貴方はそのまま警察に捕まって、裁判でも有罪になりました」

「……」

……そうだ。それから始まったんだ。俺の五十年が……。

晴美はベッドの脇に置いてある真次郎の持ち物の中から通帳を取り、開いて見る。真次郎は一緒に置いてあるスプーンのことを思い、ハツとして晴美を見るが、スプーンには感心を寄せていない様子である。

「やっぱり……私が持って行った二百万円は、相沢さんが持ったままだったんですね」

「……」

「あのお金のことは、警察の人には言わなかったんですか？」

「……違う、最初はとぼけてたけど、俺は言った。兎に角谷本さんを刺したのは俺じゃないってことを信じて貰う為に、全部正直に言わないと信じて貰えないと思って。」

「俺は……お金の、ことも……言いました。でも、信じて……貰えない……った」

取調室の刑事が真次郎の預金通帳を見ている。

「……この金は、麻里恵さんの娘が自宅から持って来たってのか？」

「そうですよ、でも俺は、その金だけ取って麻里恵は返してしまおうと思って……」

「嘘つけよ！」

バーンと机を叩かれて真次郎は縮み上がる。

「そんな金のこと谷本さんの方では何も言ってきていないぞ！」

「そんな！ 確かにアレは晴美ちゃんが家の金庫から盗んで来た……」

「あれだけの大金を盗まれておいて、被害届も出さない訳がないだろうが！」

「だから、それは、闇市で稼いで税務署に隠して持ってた金だから……」

「いい加減なこと言ってんじゃねえよ！」

「本当ですよ」

「お前が何処か他所から盗んで来たんじゃないのか！」

「……もう何を言っても信じて貰えないと思った。」

「……そうだったんですか。でもそれは私も話したんですよ。でもそれは貴方に言われて盗んで来たってことにして、私は作り話をしました」

「！」

「貴方が、母さんに一度家に帰って、金庫から谷本が隠してる財産を盗んで持って来たなら家に置いてやるって言って、持って来させたことにしたんです。でもそのことは谷本の実家の方でも、アレは税

務署にも届けていない闇のお金でしたから、無くなっていることは解かってても、被害届は出さずにいた様です。そもそも谷本が自分の金庫に隠してたから、谷本の両親も金庫にどれくらい入ってたのかわらなかつたみたいです。だから警察の方でも、それは貴方が何処か余所から盗んで来たお金だということにして、表に出さなかつたんですね」

沙奈が口を挟む。

「だけど、実際はそのお金のことも警察が相沢さんを犯人だっと思いついた原因になつてたんじゃないの」

「そうだね……でも相沢さんも刑務所に入つて、お金を使うことも出来ずに、結局はずつと持つてるしかなかつたんですね、五十年も」

「……」

晴美は通帳を閉じて元の位置に戻す。真次郎はスプーンのことを気になるが、やはり晴美は気にも止めていない。

「……あの時私が、父さんに連れ戻されたお母さんに、もう一度私を連れて逃げてなんて言わなければ、あんなことにはならなかつたんですよね」

「……その通りだと思う。だが、今はそう言わない方が良いだろう。嫌、それは、違う……それは、ね、晴美さん……」

晴美が真次郎の言葉を遮る様に言う。

「それから裁判の日が決まつて、きつと裁判で相沢さんは自分はやっていないって言うから、私と母さんも証人として裁判所に行かなきゃならないと思つてましたけど、相沢さんはそのまま罪を認めておしまいになつたんですね？」

「……それも違う、俺はあんまり刑事の取り調べが朝から晩まで毎日続くので、もう意識が朦朧としてしまつて、一度は自分の供述ですと認める書類に名前を書いてしまつたのだ。」

でも裁判の時に、今度こそ裁判官の人たちに本当のことを聞いて貰おうと思つて、一生懸命言つた。頼むからあの二人を、麻里恵と晴美ちゃんをここへ呼んでくれつて、自分で言つてやりたいつて、

でもそれも聞き入れて貰えなくて、結局は判決を決定されてしまった。

そうか……あの金のことも、本当は警察も解かってて、俺を犯人だと決めつける理由のひとつになってたのか……でももうそのことも、もうどうでもいい。それよりも今は、晴美さんと沙奈さんにもっと俺に同情して貰って、麻里恵のところ連れて行って貰える様にしなければ。

「……はい、もう。何を言ってる……も、仕方無い、と思って、俺は……諦めて、しまった……んです」

「そうだったんですか」

と言って頷くと、晴美は話を続ける。

「事件の後、母は谷本の実家から離縁されて、私を連れて武田尾温泉の実家に戻りました。旅館をやっていた母の両親もいい顔はしませんでしたけど、私は、お母さんが可哀相だったということを、祖父母に一生懸命言いました。お父さんにはいつも叩かれていて、相沢さんには騙されて連れて行かれたのだと言いました。私と母さんは、もう他に行くところもないのだと……祖父母も中学生だった私のことは不憫だと感じてくれたのか、黙って置いてくれる様になりました」

真次郎はじっと聴き入っている。

「母は谷本の姓から実家の三浦姓に戻って、一生懸命旅館の仕事を手伝って来ました。ことあるごとに、刑務所にいる貴方のことを思っていて泣いていましたけど、その度に私は、悪いのは相沢さんなんだから、お母さんは悪くないんだからと言って宥めすかしていました。それから、母は貴方がもし刑務所から出て来たら、自分に仕返しに来ると思って、怯えてましたから。私は相沢さんが刑務所から出て来る日があるとしたら、その時は知らせて貰える様に警察の人をお願いしました。だから私は、実は相沢さんが刑務所で脳梗塞になって医療刑務所に移ったことも、認知症になって施設に入ったことも警察から連絡して貰って知っていました。ただ、まさかそこで沙奈

と貴方が出会ってたなんて……」

真次郎に話す晴美の横で、沙奈はまるで麻里恵の意志を代弁するかの様に、濟まなそうな顔をしている。

「何年前かに沙奈は東京で勤めていた会社が倒産して、介護の仕事に就いたという事は知っていましたけど、まさかその施設に、相沢さんがいたなんて……だけどよく相沢さんは、沙奈が母の孫だつてことに気付かれましたね」

「……」

「沙奈からの電話で、貴方の名前を聞かされた時には、愕然としました。相沢さんという名前を知っているかどうか、母に聞いてみてくれて沙奈は言いましたけど、勿論母には言いませんでした。それからの毎日、生きた心地がしませんでしたよ。でも沙奈の話だと、貴方は身体の半分が麻痺して、酷い認知症だということでしたから、このまま何もなく貴方が死んでしまえば良いと思っていました」

「……」

「でも、相沢さんが突然旅館に現れた時には、私は覚悟を決めたんです。だってもう、何をどうしたって取り返しのつかないことです。これはもう、貴方を殺すしかないと思って……」

「……」

ガチャリと病室の扉が開く。先ほどの看護師が入って来る。

「三浦さん、麻里恵さんの意識が戻りましたよ」

「えっ……」

と沙奈は晴美の顔を見る。

「解かりました。すぐ行きます」

と言つて晴美は沙奈を見て頷く。そして真次郎を見る。

「相沢さん。私、母に話して来ます。相沢さんが、会いたいと言つていますって、相沢さんはもう母のことを許して、恨んでなんかいないからって、それでいいんですよね？」

「そうです……その通りです、よ……」

と答えながら、真次郎の心は躍動している。よし、やった……や

ったこれで、殺しに行ける、やった。でもあのスプーンを、何とかして取って持って行かなければ、パジャマに隠して持って行かなければ……。

晴美は看護師と一緒に部屋を出て行く。病室には沙奈と二人だけになる。

「……沙奈、さん……」

「はい、何ですか」

「その……通帳と……俺の物を……」

「ああ、コレですね、はい」

と沙奈はベッド脇の台の上に置いてある通帳と印鑑、それにスプーンをビニール袋に入れて真次郎に渡す。

「そういえば相沢さん、施設でもスプーンを盗んでいつも削ってましたけど、それは何に使うつもりだったんですか？」

ギクリとする。咄嗟に出て来た言葉はこんなことだった。

「コレは……ね、俺……の、お守り……なんだよ、大事な……」

「スプーンを削ると、お守りになるんですか、そんなの初めて聞きましたけど」

真次郎は袋を毛布の中に入れて、中でスプーンを取り出し、パジャマの中へ入れる。

そして不思議そうな顔をしている沙奈に笑って見せる。

スプーンは自分のお守り……誤魔化そうとして咄嗟に言った言葉だったが、真次郎にとってこのスプーンは、本当にお守りの様な物だったと思う。

長い受刑者生活も、施設で訳が解らなくなっている時も、真次郎はこのスプーンに思いを託していた。

……そうだ。俺は、刑務官に見つかって取り上げられても、また次のスプーンを盗んで、施設では職員に取り上げられても、また次のスプーンを盗んで。自分が何故そんなことをしているのか、訳も解からなくなってしまうって、俺は自分の意志でスプーンを削っていた。俺は、コレに、自分の生きる目的を託してたんだ……。

……そして、今やつと恨みを晴らせる時が来たんだ。絶対にやらなければ、このままでは死んでも死にきれない。

……あの時、誰も俺の言うことを信じてくれなかった。くる日もくる日も永遠に続くかと思われる労働をさせられた日々……あの時の俺の為に、俺は復讐してやらなければならぬ。でなければ、俺が可哀相すぎる。理不尽に無駄にさせられた俺の人生が……おお、俺はなんて可哀相なんだ。待ってろよ麻里恵、今こそ俺は人生の恨みを晴らしてやるからな。

ガチャリとドアが開いて、晴美が戻って来る。

「どうだった？」

と沙奈が訊ねる。

「会うって」

「お祖母ちゃん身体は大丈夫なの？」

「うん、バイタルは安定してるから、先生がもう明日は退院しても良いからって」

「そう」

晴美は真次郎の顔を見る。

「相沢さん。母は会ってもいいって言ってますから。いえ、会ってもいいなんて言い方は間違ってますよね、母の方が悪いんですから。母の方でお詫びしなければならぬんですものね……」

……母、この人の母……そうだ。この人の母が麻里恵なんだ。

真次郎は一瞬病室に入って来た晴美が誰なのか解からなかった。やはり薬の効き目が落ちてきている。急がなければならぬ。

「……いや、もう……いいんですよ。本当に、私は……許すんです。マリに……許すと、言ってやりに……行きたい……んです」

そう言いながら懐に入れたスプーンを握り、確認している。

……早く、早く俺を麻里恵のところへ連れて行ってくれ。

このままではきつとここが何処なのか、自分が何をしているのかも分からなくなってしまう。

また以前のように訳が解らなくなってしまうのは時間の問題であ

る。

晴美と沙奈に支えられて、真次郎は身体を起こし、ベッドから降りる。

そして左手で杖を持ち、右腕は晴美に支えられながら、歩いて病室の出口へと向かう。

沙奈が病室のドアを開けてくれる。

真次郎は病室を出て、廊下を歩き始める。

白い壁と、等間隔に電灯の点いた白い天井が真っ直ぐに延びている。

……あれ？　ここは、風呂に行くまでの廊下だったか……？

瞬間真次郎の頭は施設に戻り、入浴する為に廊下を歩いている。

……いや違う、違う違う、すっかりしろ。俺は、神戸の武田尾温泉の近くにある病院にいて、今晴美さんと沙奈さんに連れられて、麻里恵を殺しに行くところじゃないか。

杖を握っている左手を胸元に当て、そこにスプーンが入っていることを感触で確かめる。

……俺は大丈夫だ。きつと、自分の意識を失ったとしても、麻里恵に会えば、俺の身体はちゃんと自分のやるべきことを実行する筈だ。その為に長年生きて来たんだから、俺が、コレを忘れる訳がない……。

「大丈夫ですか？　もう少しですからね」

と真次郎の右腕を支えている晴美が歩きながら言う。

「……え、ええ、大丈夫です、よ」

と真次郎は答える。

そのままエレベーターに乗る。グインとエレベーターは上昇し、ひとつ上の階に停まり、ドアが開く。

瞬間それが施設のエレベーターと重なって見える。

……違うぞ、俺よ、ここは施設じゃない。今俺は、やっこのことで辿り着いたんだ。俺はやつと、麻里恵を殺せるんだ。と自分に言い聞かせ、意識をしっかりと持たせる。

……そうとも、俺はやるべきことをちゃんとやるぞ。俺の身体は、俺の意志が支配しているに違いないのだから、俺は自分の身体を信用してあげればいいんだ。例えばまた訳が解らなくなったとしても、俺の口は、俺の喋るべきことを喋り、俺がやるべきことを実行するに違いない。

そう思いながら廊下を進む。

「相沢さん。お祖母ちゃんは、この部屋にいます」

と先に行った沙奈がドアの前に立つ。

晴美に支えられて真次郎が来ると、沙奈がドアを開いてくれる。

真次郎はその病室に足を踏み入れる。

……何をすべきかは、俺の本能が知っている。俺は俺のするべき事をやるだけだ。俺はそうする。俺はやつと、自分の意志を通すことが出来る。俺の好きな様になるんだ。もう何も心配はいらない、俺は俺のすることにまかせておけばいいのだから……。

4

杖を突きながら真次郎が足を踏み入れると、ベッドには誰も寝ていない。

見ると小さな老婆が床に正座して座っている。

「お祖母ちゃん……」

沙奈が声を掛けると、老婆は途端に顔を両手で覆う。

「おおお……おおお……」

低いくぐもった声で嗚咽を漏らし始めたかと思うと、それは大音響になって部屋中に轟き渡る。

「あああああ……あ……あ……あ……あ……あ……」

真次郎は立ち尽くしたまま、呆然とそれを見つめている。

真次郎の目にはそれが誰なのか解かっているのか、その様子は、まるでもう自分が誰なのかということすら忘れてしまっている様子である。

「お祖母ちゃん、お祖母ちゃん！」

「おおおおおおうくくおうおうおう……」

麻里恵が顔を覆っている手の間から、ポタポタと涙が滴り落ちて
いる。

沙奈は病室の隅に立ち尽くしたまま、その光景に見入っている。

カシャン……。

真次郎が杖を前へ突き出す。そして一歩、足を前へ踏み出す。タ
ツ……。

カシャン、タツ、カシャン……。

真次郎は正座する麻里恵に近付くと、パジャマの懐に左手を入れ
て、ゴソゴソと何かを取り出そうとする。

カラーン！

沙奈が見ると、音を立てて床に落ちたそれは、先端を削られたス
プーンである。

ズルッ、ドシャーン。

杖を踏み外したのか、真次郎は麻里恵の前に転ぶ様にして座って
しまう。

「大丈夫ですか、相沢さん！」

と思わず晴美も真次郎の身体を抱き抱える。

見ると真次郎は左手を伸ばし、泣いている麻里恵の右手を取る。

「もう、泣かなくて……いいんだ、よ……マリ……俺だよ……」

真次郎に右手を取られても、麻里恵は両目から流れ続ける涙を左
手で拭っている。

「また、会えた……ね、やっと、会えたね……元気に、してた……
かい？」

頷いているのか、ただ震えているのかも分からないが、麻里恵は
顔を上下にガクガクと動かす。

「もう、心配しなくて……も、いい、んだよ……もう、俺は、怒っ
てない、よ……」

「おっ、おっ……おお、うう……わあああああー」

叫ぶ様にして麻里恵は真次郎の胸に飛び込んで行く。真次郎はその小さな背中を左手で受け止める。

「おっ、おっ、おっ、おおおおお〜〜〜ううああああ〜〜〜」
麻里恵の声はただ激しく呻いているだけの様に聞こえるが、沙奈の耳にはその声が「ごめんなさい〜ごめんなさい〜」と言っていることがしっかりと解かる。

晴美はブルブル震えながら涙をながし、今にもその場に崩れてしまいそうなのを辛うじて耐えている。

今、この二人を見ながら沙奈は思う。この先、もうずっと永遠に、この二人は一緒にいるのだろう。

例えどちらかが死のうとも、二人とも死んでしまおうとも。この世界がなくなつたととしても、それはきっと変わらない、二人はずっと一緒にいる。

おわり